

金 佐 奈 遺 跡

— A 1 地点の調査 —

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書19

児玉町文化財調査報告書 第24集

かな さ な い せき
金 佐 奈 遺 跡

— A 1 地点の調査 —

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書19

1 9 9 7

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

「歴史」というと、つい政治的動向が中心になってしまいがちですが、その時代に住んでいた人々の生活史が注目されることは重要なことと考えております。たとえマスコミ等に取り上げられなくても各時代に人々が実際に生活していたという証拠は、発掘調査という作業を通してわれわれに明示してくれます。小さな調査、研究の積み重ねこそが、歴史の礎ともなる普通の人々の生活を語ってくれるのです。このことにより歴史のページが増えていくことは確実です。

今回の発掘調査を通してまた一つ、古えの人々の生活があきらかになったということは、見玉町の歴史を検証していく上で大切な遺産であり、たいへん喜ばしいことだと自負しております。

本書が刊行されることにより、今後、見玉町の歴史を解明するための一資料として御活用くだされば幸甚でございます。

最後になりましたが、本報告書が刊行出来ましたことは、町民の皆様をはじめ、本庄土地改良事務所ならびに関係諸機関の暖かいご理解とご協力の賜であり、深く感謝するものであります。

平成9年3月3日

見玉町教育委員会
教育長 富 丘 文 雄

例 言

- 1、本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字上真下字金佐奈ほかに所在する金佐奈遺跡 A1地点の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は、県営かん排事業（九郷地区）に先立つ町内遺跡保存事業として、平成2年度に児玉町教育委員会が実施したものである。
- 3、調査の担当は、鈴木徳雄・徳山寿樹があたった。
- 4、発掘調査及び整理・報告書に要した経費は、町費・国庫補助金・県費補助金（埼玉県教育委員会）および委託金（埼玉県）である。
- 5、本書の編集は、整理参加者の協力を得て徳山寿樹が行い、執筆分担については各文末に記した。
- 6、発掘調査及び本書作成にあたって下記の方々や機関から御助言・御協力を賜った。（順不同、敬称略）

赤熊浩一、池田敏宏、岩瀬譲、岩本克昌、梅沢太久夫、江原 英、大倉 潤、太田博之、大屋道則、岡本幸夫、尾崎美砂、金子彰男、駒宮史朗、小宮山克己、坂本和俊、笹森健一、篠崎 潔、外尾常人、高橋一夫、瀧瀬芳之、田村 誠、千装 智、利根川章彦、鳥羽政之、永井智教、中沢良一、長滝歳康、中村倉司、長谷川勇、坂野和信、平田重之、増田逸朗、増田一裕、松澤浩一、丸山 修、丸山陽一、水村孝行、宮本直樹、矢内勲、山川守男、山口逸弘、弓 明義、埼玉県生涯学習部文化財保護課、本庄土地改良事務所、児玉北部土地改良区、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、児玉郡市文化財担当者会、東海大学考古学研究会
- 7、本書作成の主な作業分担は、次のとおりである。

土器接合、復元（赤堀俊子、新井千都子、白石敏子、野沢公代、福島礼子）
土器復元ほか（田口照代、林和代、新井栄子、根岸富士江）
土器観察、実測（大熊季広、佐藤博之、井口泰基、永井智教）
遺構原図操作（徳山寿樹、大熊季広、尾内俊彦、新井嘉人）
ト レ ー ス（倉林八重子、中原好子）
遺 物 写 真（尾内俊彦）
本文レイアウト（徳山寿樹）

発掘調査の組織

平成2年度（発掘調査）

調査主体	児玉町教育委員会	教育長	野口	敏雄
事務局	児玉町教育委員会社会教育課			
	社会教育課	課長	吉川	豊
		課長補佐	立花	勲
		課長補佐	前川	由雄
	社会教育係	主任	金子	幸弘
		主事	渋谷	路子
		主事	恋河内	昭彦
担当者	社会教育係	主任	鈴木	徳雄
		主事	徳山	寿樹
調査員補			千装	智
			尾内	俊彦

平成8年度（整理・報告）

調査主体	児玉町教育委員会	教育長	富丘	文雄
事務局	児玉町教育委員会社会教育課			
	社会教育課	課長	大塚	勲
		課長補佐	関根	安男
	社会教育係	係長	田島	賢二
		主任	倉林美恵子	
	文化財係	係長	鈴木	徳雄
		主事	恋河内	昭彦
担当者	文化財係	主事	徳山	寿樹
		主事	大熊	季広
調査員補			尾内	俊彦
補助員			佐藤	博之

目 次

序

例 言

目 次

第 I 章	発掘調査の経緯	1
第 II 章	遺跡の地理的・歴史的環境	3
	1. 地理的環境	3
	2. 歴史的環境	7
第 III 章	金佐奈遺跡 A1 地点の調査	11
	1. 遺跡の概要	11
	2. 基本土層	12
	3. 遺構の概要	13
第 IV 章	まとめ—第 23 号住居址検出の大型壺形土器について—	80

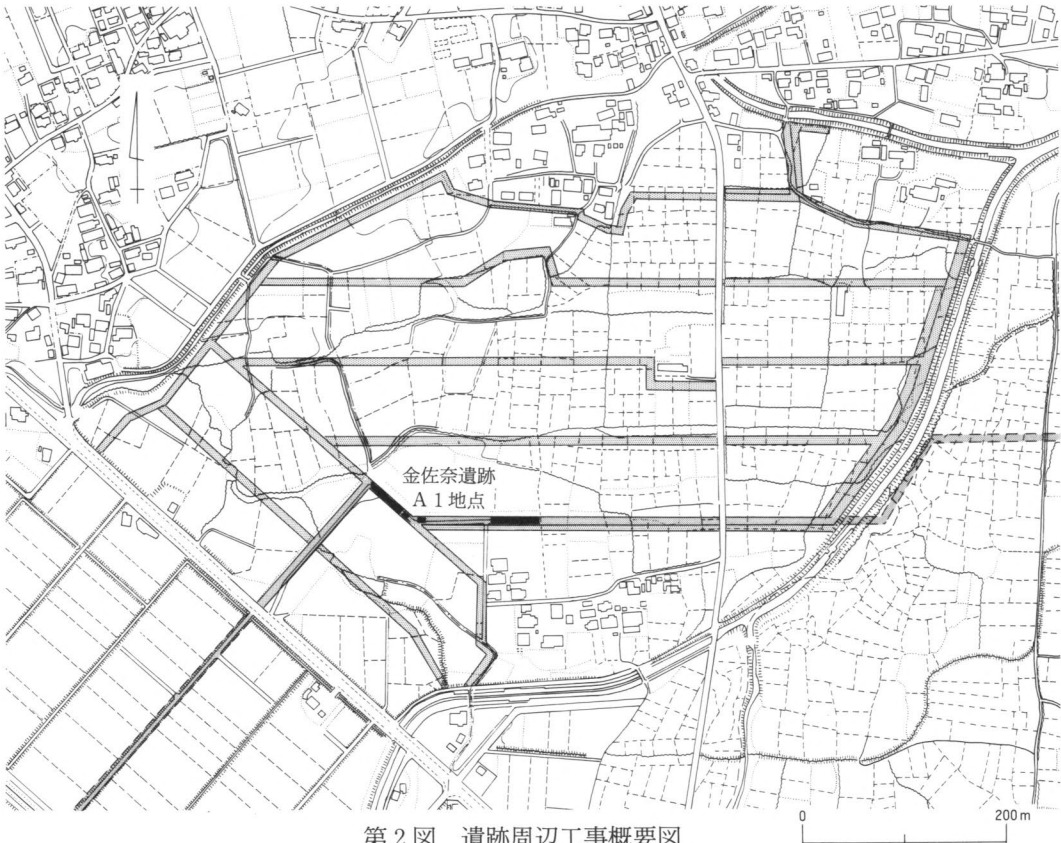
写 真 図 版



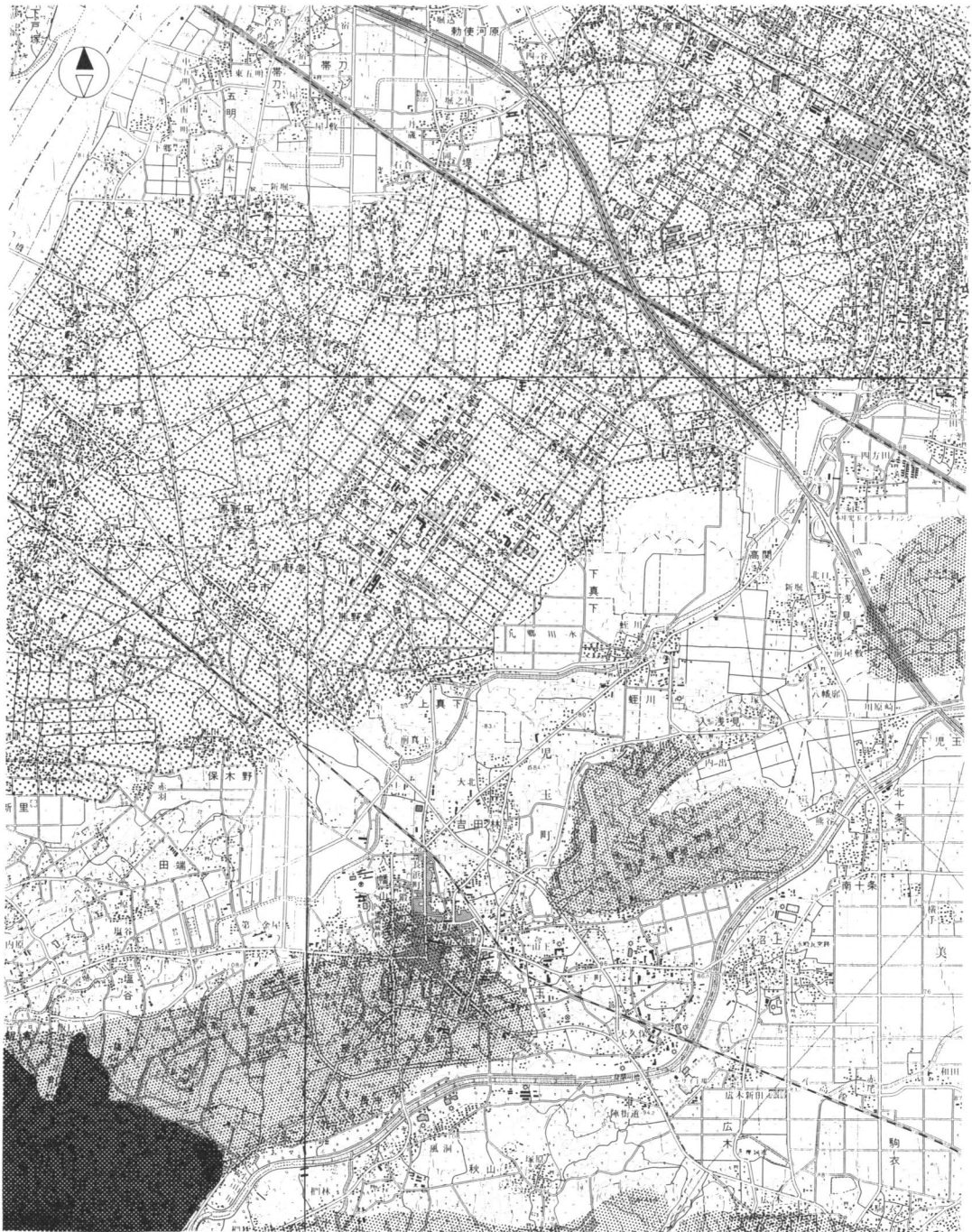
第1図 金佐奈遺跡 A1 地点調査位置図

第 I 章 発掘調査の経緯




本報告にかかわる発掘調査は、平成2年度の県営かんがい排水事業（九郷地区）に先立つ埋蔵文化財保存事業として実施したものである。平成2年度事業については、上記の事前協議に基づき埼玉県教育局文化財保護課、県耕地課、埼玉県本庄土地改良事務所及び町教育委員会が平成元年12月に打ち合せ会議を行った。この結果平成2年度工区のうち、今回報告の金佐奈遺跡（No. 54-298）の現状変更される区域について発掘調査による記録保存の措置をとることになった。平成2年7月4日付 土地第660号で県営かんがい排水事業九郷地区の埋蔵文化財の取扱いについて町教育委員会を經由して県教育委員会へ協議が行われ、発掘調査を実施することが決定した。児玉町教育委員会より平成2年5月28日付児教社第68号で発掘調査通知を埼玉県教育委員会に提出した。文化庁からは平成3年10月11日付3委保記第5-1881号をもって発掘調査通知書の受理について通知があった。一方、平成2年5月25日付本地第267号で埼玉県本庄土地改良事務所長より埋蔵文化財発掘の通知が提出され、教文第3-266号周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知があった。（事務局）



第2図 遺跡周辺工事概要図



凡例

	山地		台地
	丘陵		低地

第3図 周辺の地形区分

第II章 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

本報告の遺跡が所在する児玉町は、埼玉県北西部の一角にあり、東京都心から約85kmの所に位置し、東は美里町、西は神川町・神泉村、南は秩父郡長瀬町・皆野町、北は本庄市・上里町と接している。町は南西から北東にかけて細長い形を呈しており、標高は町役場付近で98.5mである。町の面積は52.93km²で、町の大部分が山林と耕地により占められている。

地形 児玉町の地形は町を東西に横断する八王子―高崎構造線により山地と平地が地質的にも地形的にも明瞭に区分されている。山地は町の南西部を占めており、関東山地に属す上武山地と呼ばれ、陣見山・不動山を主体としている。平地は北東方向に半島状に張り出した児玉丘陵などに代表される丘陵と本庄台地などの台地、神流川や小山川により開析された沖積地などからなり、沖積地の中には生野山丘陵や大久保山丘陵などのように、独立丘として存在しているものもある。これらの平地は町の北東部を占めている。

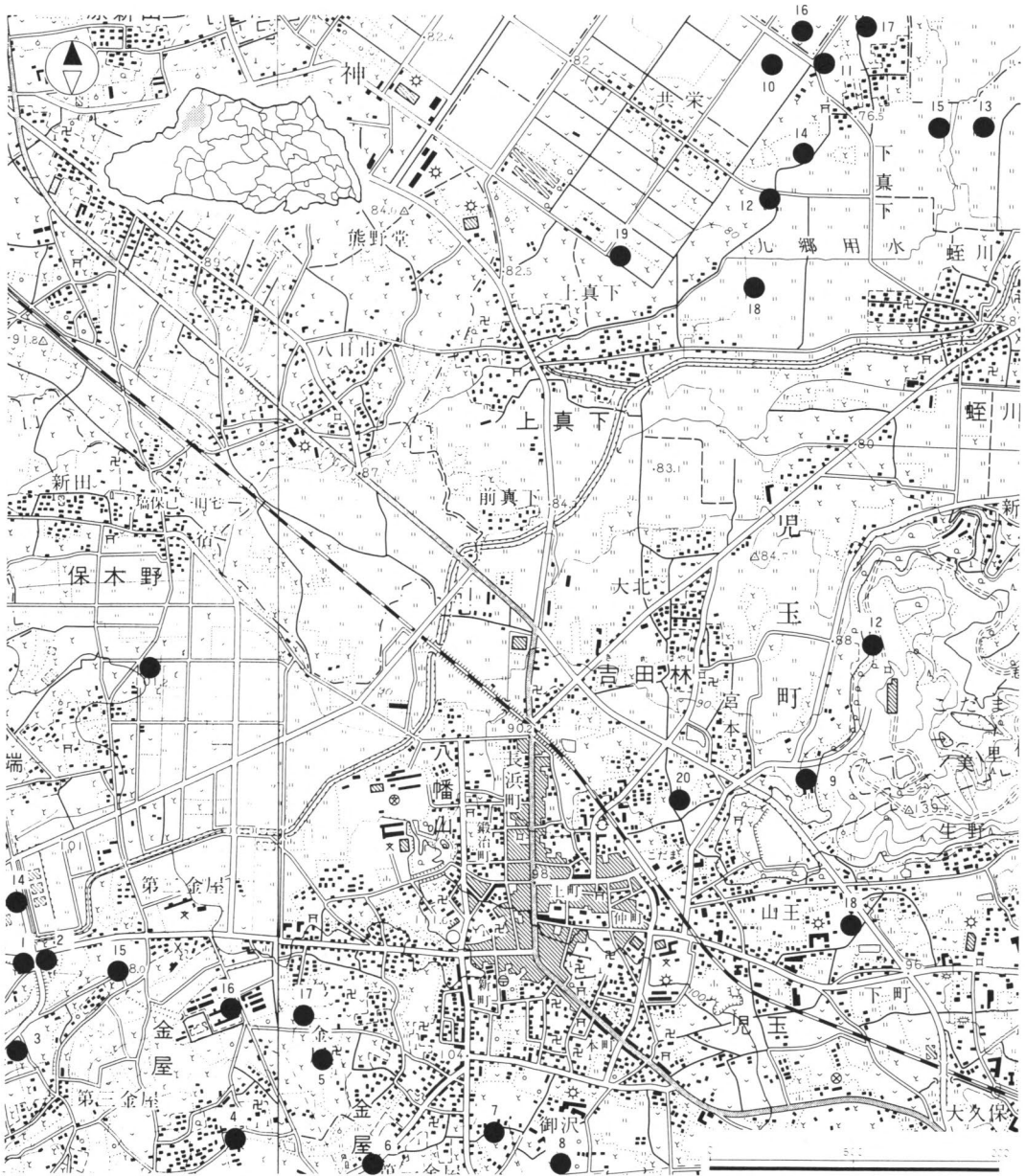
山地 児玉町の山地は結晶片岩の山地として有名である。結晶片岩とは一般的に三波川結晶片岩と呼ばれているもので、初めに群馬県鬼石町を流れる神流川の支流の三波川で発見されたためにこの名称が使用されている。三波川変成帯の結晶片岩は泥質片岩・砂質片岩・塩基性片岩・石英片岩・石灰質片岩・蛇紋岩などの岩石からなっている。三波川結晶片岩の変成された時期は、ジュラ紀までに主に海底火山活動によって形成された御荷鉾緑石岩類と呼ばれる地層が、白亜期末ごろに200～300°Cの温度と6000～7000気圧の圧力による変成作用の結果、形成されたものである。結晶片岩の分布は、群馬県下仁田町南部から東関東の方向に甘楽町南部、藤岡市南部、鬼石町、埼玉県神川町南部、児玉町、長瀬町、寄居町、皆野町南部、小川町、玉川村を通して越生町西方まで約60km、幅は数km～10数kmにわたって連続して分布している。そして関東地方だけでなく、さらに長野県南部から東海・近畿地方に伸びて紀伊半島と四国を横断し、九州北東部にまで延々と約1000kmにわたって分布することが明らかになっている。この結晶片岩は本報告の遺跡周辺においては、土師器などの混和材として粘土に混ぜられて広く使用されている。

丘陵 丘陵は主に海底に堆積した地層により形成されており、地層を形成している岩石は、砂岩・泥岩・礫岩・凝灰岩で、海棲貝類化石を含んでいる。一部には石灰層を挟む地層もあり陸の湿地に堆積した地層もあると考えられる。これらの地層は、児玉丘陵のほか独立丘として残る生野山丘陵や大久保山丘陵においても確認されている。

台地 台地はローム層の形成された時代により2つに区分されており、下位面を武蔵野ローム層、上位面を立川ローム層と呼んでいる。武蔵野ローム層は粘土質の暗褐色層理のローム層で、厚さが1～1.5mある。立川ローム層は淡黄色無層理で粘土化が無く武蔵野ローム層よりも新しいとされている。これらのローム層のうち本庄台地などは、立川ローム層の堆積が主であるとされている。台地と沖積地は現在では明確な比高差はない。

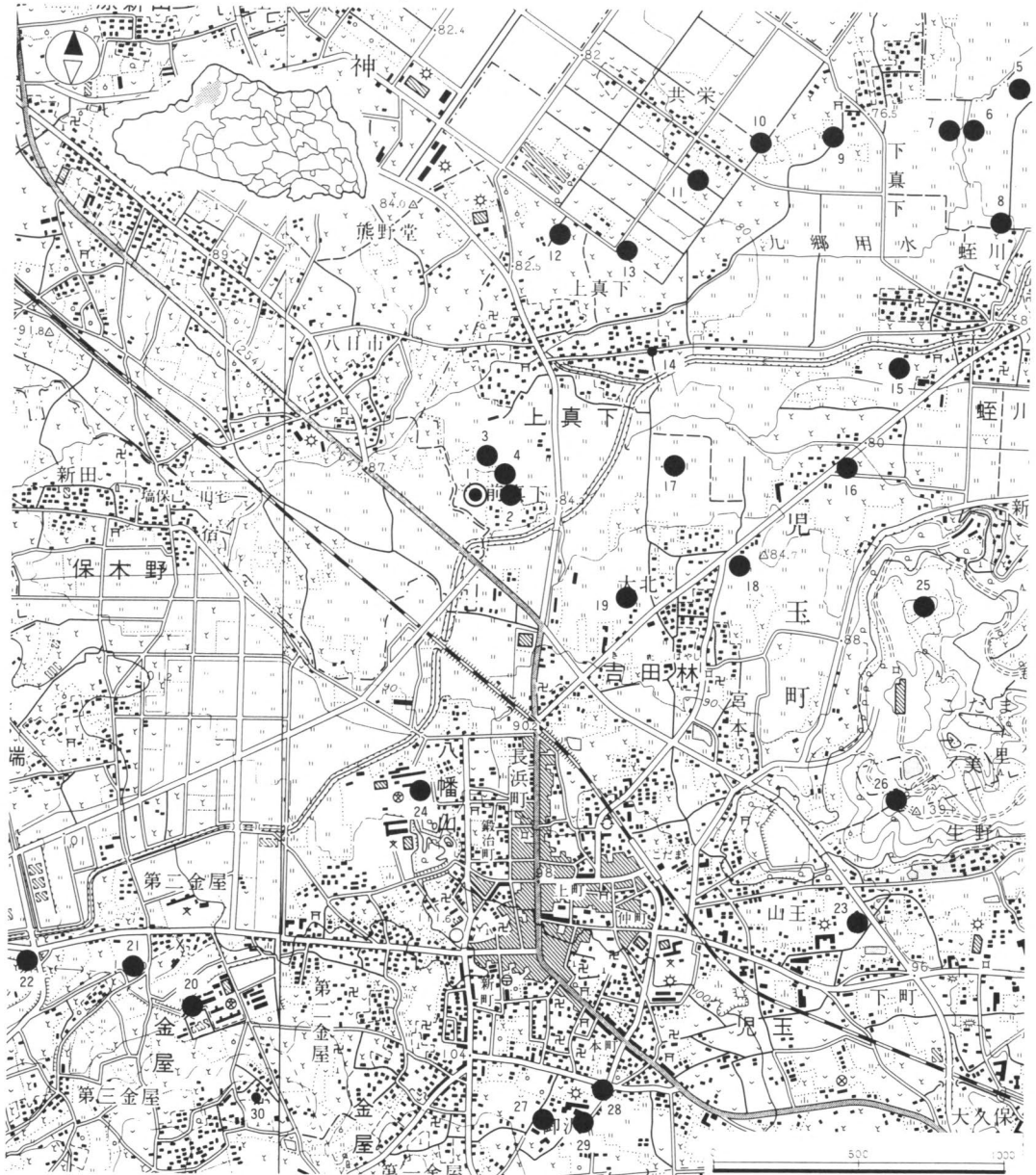
平地 平地は神流川により形成された神流川扇状地上に位置しており、本庄台地などの台地を含む微高地と低地に大別することができる。しかし、現在においては河川の沖積作用により、微高地と低地には明確な比高差は無く明瞭に区分することはできないが、現在では畑や水田というような土地利用の違いにより区分することも可能である。

河川 児玉町を流れる河川の主たるものとして、町の南西部から北東部にかけて流れる小山川が挙げられる。それに次ぐものとしては、小山川の北側でほぼ平行に流路を取る女堀川が挙げられる。どちらの河川も水量は少なく距離は短い、1年間を通して水の溜れることはほとんど無い。しかし、冬期の降水量が少ないという特色を有する本町は、神流川扇状地上に立地していると言う事と併せて、表流水量が少なく大半が伏流してしまう。このため奈良時代以降においては、水田を営むために大規模な灌漑が必要であり、開墾年代が西暦700年を幾分遡るものである可能性が高い九郷用水（鈴木、1989）などに代表される用水堀が構築されたと推定される。遺跡・周辺本報告の遺跡は児玉町大字上真下字金佐奈ほかに所在し、本町北東部の神川町との境界付近の微高地から低地にかけての沖積地上に位置している。本遺跡の周辺は前述の大規模な沖積地の灌漑による児玉条里と呼ばれる条里制が展開し、一面の水田地帯が広がっている。この水田地帯を含む沖積地には、女堀川により形成された自然堤防や埋没台地のような微高地が存在していると考えられ、本報告の周辺の遺跡（集落）は、主としてこれらの自然堤防や埋没台地のような微高地上、あるいは台地縁辺部、独立丘裾部に占地していると推定されている。また、隣接する金屋遺跡群（鈴木、1981）においても同様に、沖積地内の自然堤防や微高地上、台地縁辺部に集落が占地していると推定され、沖積地内には児玉条里と同様な金屋条里が展開している。この地域は神流川扇状地上に立地しているために、南西から北東にかけてゆるやかに傾斜しており利根川沿いにまで及んでいるが、前述のように微高地と低地の比高差は明瞭には区分できないのが現状である。しかし、本報告の遺跡が営まれていた古墳時代後期から奈良・平安時代においては、現在よりも明確な起伏が存在しており景観もだいぶ違っていたのではないかと推定される。



第4図 周辺の縄紋・弥生時代主要遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
縄 文 時 代	1 塩谷下大塚遺跡 (恋河内1990)	縄 文 時 代	11 内手遺跡 (徳山他1995)	弥 生 時 代	1 塩谷下大塚遺跡 (恋川内1990)
	2 塩谷遺跡 (菅谷他1973)		12 神田遺跡 (鈴木1991)		2 塩谷遺跡 (菅谷他1973)
	3 上別所遺跡		13 藤塚遺跡 (徳山他1995)		3 上別所遺跡
	4 長沖梅原遺跡		14 平塚遺跡 (徳山他1994)		4 生野山遺跡 (菅谷他1973)
	5 倉林東遺跡		15 堀向遺跡 (徳山他1995)		5 十二天遺跡 (鈴木他1981)
	6 長沖久保遺跡 (恋河内1984)		16 将監塚遺跡 (石塚1986)		6 ミカド遺跡 (鈴木他1981)
	7 江ノ浜遺跡 (鈴木他1979・埼玉県1980)		17 将監塚東遺跡		7 枇杷橋遺跡 (菅谷他1973)
	8 賀家上遺跡 (埼玉県1980)		18 中下田遺跡 (鈴木1991)		8 金屋池脇遺跡 (小沢1969)
	9 阿知越遺跡 (鈴木他1984)		19 新宮遺跡 (恋河内1995)		9 西浦遺跡
	10 古井戸遺跡 (石塚1984)		20 女池遺跡		10 児玉清水遺跡 (1995年調査)



第5図 周辺の古墳時代主要遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	金佐奈遺跡 A1 地点 (本報告)	11	塚島遺跡 (鈴木他1991)	21	枇杷橋遺跡 (菅谷他1973)
2	金佐奈遺跡 A2 地点 (1991年調査)	12	辻ノ内遺跡 (鈴木他1991)	22	塩谷下大塚遺跡 (宍河内1990)
3	金佐奈遺跡 C 地点 (1992年調査)	13	新宮遺跡 (宍河内1995)	23	児玉清水遺跡 (1995年調査)
4	金佐奈遺跡 B 地点 (1992年調査)	14	上真下境遺跡 (1986年確認調査)	24	八幡山埴輪窯跡
5	藤塚遺跡 B2 地点 (徳山他1996)	15	蛭川坊田遺跡 (1990年調査)	25	生野山銚子塚古墳 (菅谷1973)
6	藤塚遺跡 A 地点 (徳山他1995)	16	南街道遺跡 (宍河内1996)	26	物見塚古墳 (菅谷1984)
7	堀向遺跡 (徳山他1995)	17	鶴蒔遺跡 (宍河内1995)	27	長沖25号墳 (金子他1980)
8	左口遺跡 (徳山他1994)	18	宮田遺跡 (宍河内1995)	28	長沖31号墳
9	平塚遺跡 (徳山他1994)	19	高縄田遺跡 (宍河内1995)	29	長沖32号墳
10	古井戸南遺跡 (1984年調査)	20	倉林後遺跡 (利根川他1981・1994年調査)	30	長沖157号墳

2. 歴史的環境

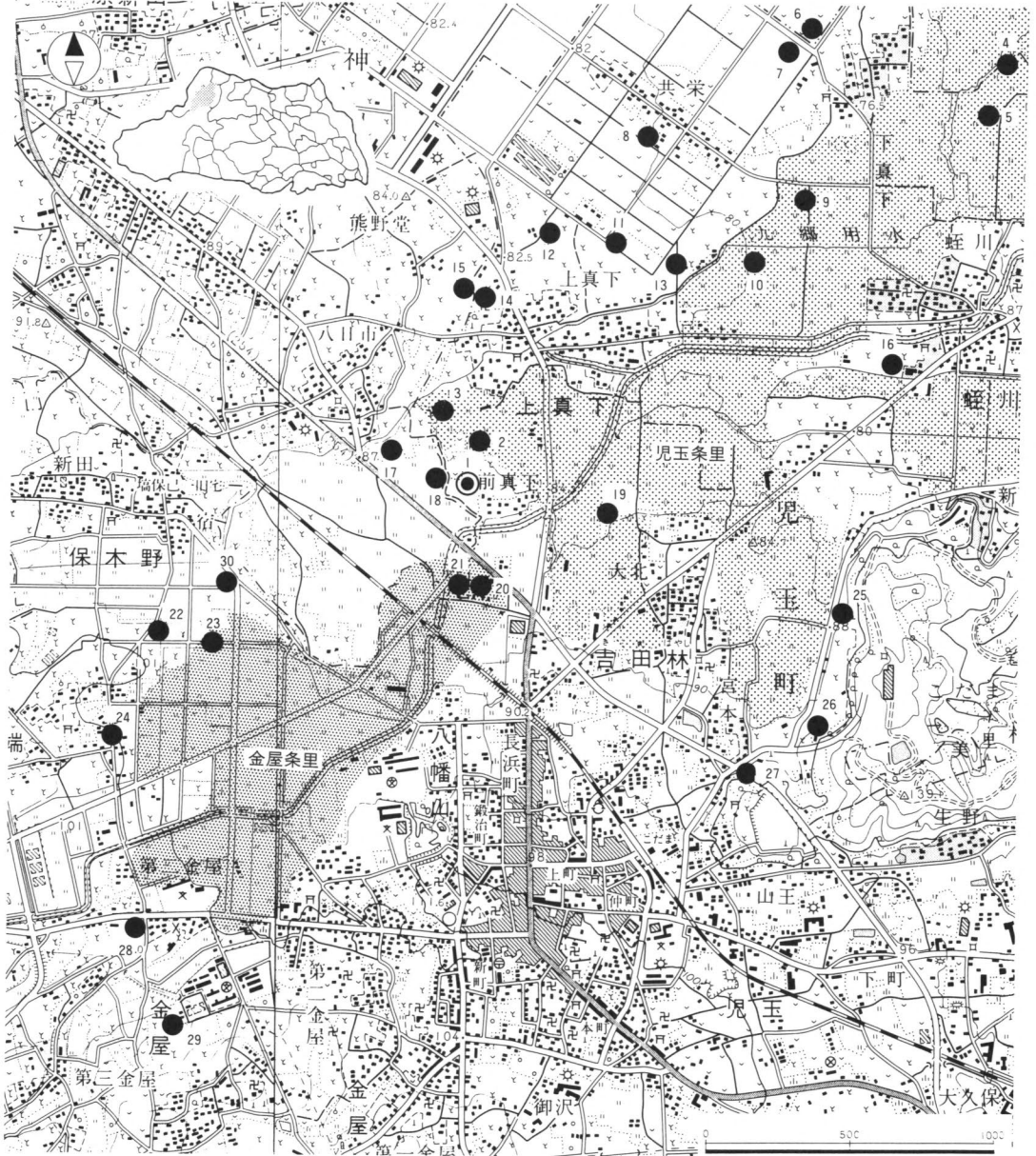
本報告の遺跡は古墳時代後期（鬼高期）から平安時代（国分期）にかけての集落が主要なため、本章においては鬼高期から国分期にかけての本報告遺跡周辺の遺跡の歴史的環境について概観して行きたいと思うが、まず前段階にあたる古墳時代中期（和泉期）の周辺遺跡の様相を概観していこうと思う。

和泉期

本報告の遺跡周辺における和泉期の集落は、主に女堀川により開析された沖積地内に形成されている自然堤防や微高地上に占地しており、前段階の五領期とほぼ同様の占地形態を呈していると推定される。また、後張遺跡のような大規模な集落も五領期に引き続き営まれ、このような大規模な集落はこの地域の和泉期における中心的な集落であったと考えられている。後張遺跡のほかにも沖積地内の自然堤防や微高地上には数多くの遺跡が発掘調査されており、中でも古井戸遺跡、高縄田遺跡、平塚遺跡、根田遺跡などの集落は和泉期単一の集落であるため、この地域の和泉期の様相を考えるうえでは非常に重要な遺跡となっている。和泉期の後半になると後張遺跡はやや衰退していき、これに変わるようにして沖積地以外にも、本庄台地縁辺部や独立丘裾部などに占地する小規模な集落が確認されるようになってくる。この時期には集落以外にも金鑽神社古墳や生野山將軍塚古墳、公卿塚古墳などの格子目叩きの埴輪を有する、首長墓クラスの直径60mを測る円墳が築造されるようになる。

鬼高期

鬼高期の集落は本報告の遺跡周辺で集落数が増加する時期にあたる。和泉期に形成された沖積地内の自然堤防や微高地上の集落はそのまま継続的に営まれるものが多く、周辺の本庄台地縁辺部や独立丘裾部などの小規模な集落もさらに発展して行くようである。沖積地内の集落として藤塚遺跡、柿島遺跡、左口遺跡、古井戸南遺跡、塚島遺跡、辻ノ内遺跡、共和小学校校庭遺跡、鶴蒔遺跡、梅沢遺跡、川越田遺跡、後張遺跡、飯玉東遺跡、新宮遺跡、辻堂遺跡、南街道遺跡、宮田遺跡などの遺跡が調査されている。また、和泉期よりみられるようになってきた沖積地以外の本庄台地縁辺部や独立丘裾部の集落として、雷電下遺跡、枇杷橋遺跡、ミカド遺跡、真鏡寺後遺跡、宮ヶ谷戸遺跡、山根遺跡、鷲山南遺跡、浅見境遺跡などの遺跡が形成されるようになってくる。沖積地内の自然堤防や微高地上の集落と本庄台地縁辺部や独立丘裾部の集落という占地形態の違いには、様々な政治的な背景があったのではないかと考えられるが、現在においては明確なことは判明しておらず今後も研究を重ねて行く必要がある問題である。鬼高期になると、首長墓は大規模な円墳に変わって前方後円墳が築造されるようになってくる。全長60m級の生野山丘陵上の生野山銚子塚古墳、生野山16号墳、熊谷1号墳などは当地域最大級の古墳である。この時期には大規模な首長墓クラスの古墳のほかに比較的規模の小さい円墳が継



第6図 周辺の奈良・平安時代の主要遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	金佐奈遺跡 A1 地点 (本報告)	11	新宮遺跡 (忍河内1995)	21	反り町南遺跡 (1995年調査)
2	金佐奈遺跡 C 地点 (1992年調査)	12	辻ノ内遺跡 (鈴木他1991)	22	十二天遺跡 (鈴木他1981)
3	上田遺跡 (1992年調査)	13	坊田遺跡 (1987年調査)	23	円良岡遺跡 (鈴木他1981)
4	藤塚遺跡 B2 地点 (徳山他1996)	14	真下境東遺跡 (鈴木他1989)	24	田端南屋敷遺跡 (1996年調査)
5	藤塚遺跡 A 地点 (徳山他1995)	15	真下境西遺跡 (田村他1995)	25	割山遺跡 (1991年調査)
6	将監塚遺跡 (井上他1986・赤熊他1988)	16	蛭川坊田遺跡 (1990年調査)	26	阿知越遺跡 (鈴木他1983・1984)
7	古井戸遺跡 (井上他1986・赤熊他1988)	17	八荒神南遺跡 (金子他1995)	27	御林下遺跡 (駒宮他1977・1987年調査)
8	南共和遺跡 (忍河内1995)	18	反り町遺跡 (金子他1995)	28	枇杷橋遺跡 (菅谷他1973)
9	塚畠遺跡 (鈴木他1991)	19	樋越遺跡 (忍河内1995)	29	倉林後遺跡 (利根川他1981・1994年調査)
10	中下田遺跡 (鈴木他1991)	20	八幡山北田遺跡 (1995年調査)	30	東鹿沼遺跡 (徳山他1996)

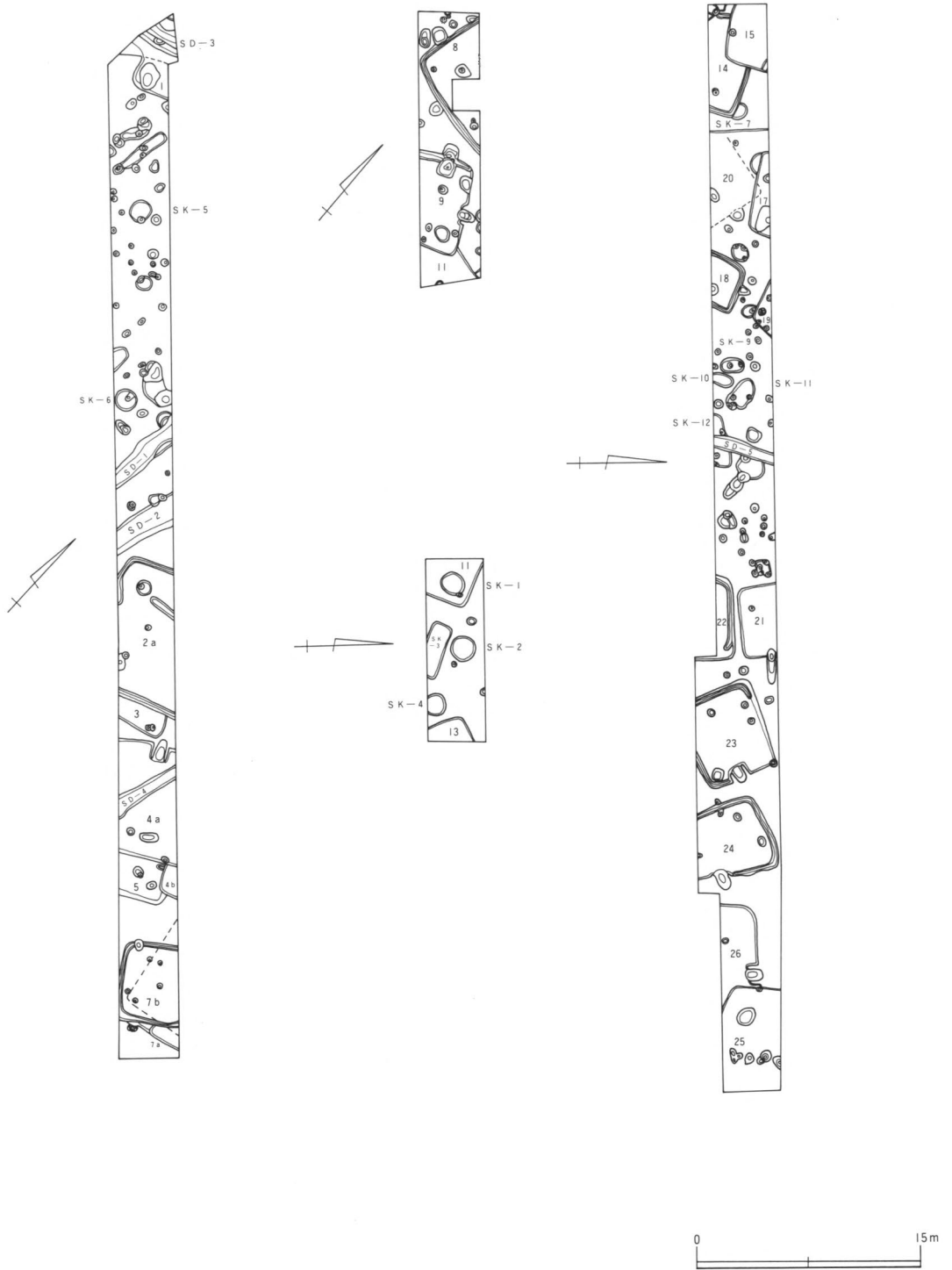
統的に築造されるようになり古墳群を形成している。このような古墳群は主に丘陵上や独立丘上に形成されており、生野山丘陵上には生野山古墳群、児玉丘陵上には長沖古墳群、大久保山丘陵上には塚本山古墳群、などが築造されている。丘陵上以外にも広木大町古墳群、秋山古墳群などの古墳群が確認されている。これらの古墳群は主に小山川（旧身馴川）に沿うような形で点在し、集落域と墓域との明確な区分けがなされていると推定される。

真間期

真間期に入ると集落の占地の様相は大きく変様していき、沖積地内の自然堤防や微高地上の集落はしだいに衰退し、集落は沖積地周辺の生野山丘陵や大久保山丘陵などの独立丘裾部や本庄台地縁辺部などに居住地域が移動して行く傾向を示している。このような独立丘裾部や本庄台地縁辺部などに占地している集落として、八幡太神南遺跡、立野南遺跡、辻ノ内遺跡、真下境東遺跡、真下境西遺跡、南共和遺跡、新宮遺跡、諏訪遺跡、将監塚遺跡、古井戸遺跡、熊野太神遺跡などの遺跡が挙げられる。このうち諏訪遺跡、熊野太神遺跡、八幡太神南遺跡、将監塚遺跡、古井戸遺跡、真下境東遺跡、真下境西遺跡などにおいては、真間期に灌漑用水のために開鑿されたと思われる大溝が検出され、その流路が推定されている。このような真間期に入ってから起こる現象は、沖積地内の集落が沖積地の大規模な灌漑による条里制の展開により、条里の周辺に居住域が変化していったために起こったものであると推定される。また、堀向遺跡などにおいては真間期に開鑿された「古九郷用水」（鈴木、1989）が検出され、前述の大溝などと併せて独立丘裾部や本庄台地縁辺部の集落は、「計画的集落」としての推定がなされ、当該地域における律令制の定着と条里制の展開を窺うことができる。

国分期

国分期に入ると独立丘裾部や本庄台地縁辺部に営まれていた集落は、しだいに縮小していき沖積地内の自然堤防や微高地上などに拡散して行く傾向が見られる。このような集落としては、後張遺跡、一丁田遺跡、今井川越田遺跡、塚島遺跡、中下田遺跡、新宮遺跡、上真下東遺跡、東牧西分遺跡、柿島遺跡、左口遺跡、蛭川坊田遺跡、鶴蒔遺跡、などの遺跡が挙げられる。その後も拡散現象はさらに進行して行き、条里施行区域以外にも展開して行く。根田遺跡、雷電下遺跡、鷲山南遺跡、浅見境遺跡、新屋敷遺跡、吉田林割山遺跡、阿知越遺跡、などの集落が形成される。九世紀後半から見られるようになったこのような集落の衰退や拡散現象は、律令的に編成された大規模集落の解体、あるいはその体制自体の解体なども推定されるものであり、当該地域における律令体制の変革時期であったものであると思われる。しかし、これらの集落は十世紀以降においても営まれていることなどから、この地域は古代の居住域としては比較的安定した場所であったことが窺える。 (井口 泰基)



第7図 金佐奈遺跡 A1 地点全測図

第Ⅲ章 金佐奈遺跡 A1地点の調査

1. 遺跡の概要

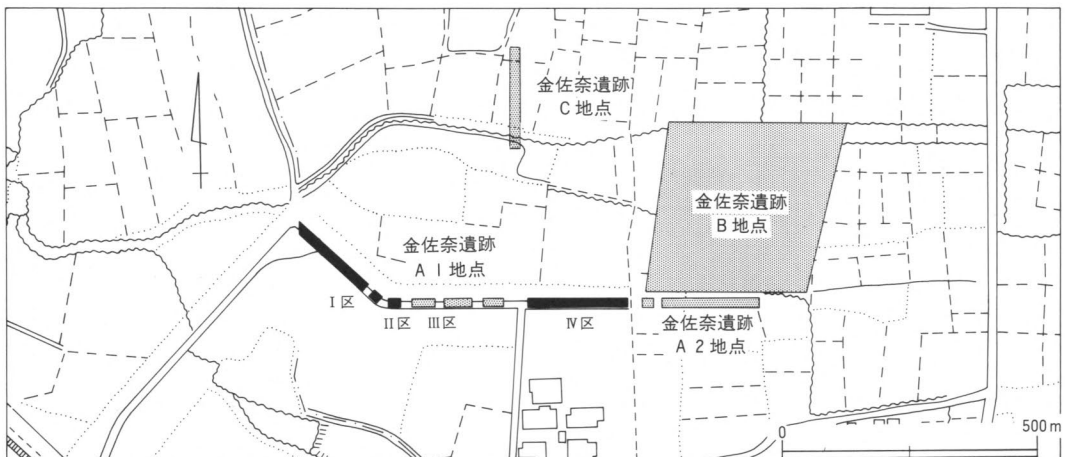
本遺跡は、大字上真下字金佐奈及び字南に所在しており、金佐奈遺跡（埼玉県遺跡地図No54-298）に該当している。尚、当初は本事業である県営かん排事業（九郷地区）平成2年度工区を金佐奈遺跡第1次調査さらに平成3年度工区を金佐奈遺跡第2次調査として発掘調査を行ってきたが、あらたに県営畑地帯総合土地改良事業（神川東部地区）の大規模な開発事業が本地域で進められ事業の違いや同一遺跡内での発掘地点増加による混乱を避けるため本報告である第1次調査を金佐奈遺跡 A1地点、第2次調査を A2地点として呼称した。

遺跡の立地は、女堀川に因って開析された本庄台地の一部が沖積地内に取り残された島状の微高地北側に占地している。遺跡を取り巻く状況は、北へ約300m付近を九郷用水が、南に約300m付近を女堀川が東に向かって流下しており本遺跡付近は、児玉条里（No54-121）最西端に当たっている。現状の地形は、微高地から低地部への地形の変化が緩やかでありその違いは不明瞭であるが、土地利用の相違を観ると微高地部は現集落及び畑地であり、低地部は水田というように明瞭な違いをみせている。

検出された遺構

本遺跡からは、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての竪穴式住居址27軒のほか複数の土壇址・溝址等が検出されている。しかし、各遺構ともに切合関係が激しくかつ中世から近・現代にかけての耕作や開墾などが遺構深部まで達しており遺構の保存状態は非常に悪かった。特に遺構の掘込みが浅い平安時代の竪穴式住居址に到っては殆ど原形を保っていないかった。

調査区は、神川町との町境を起点に西より東へ第Ⅰ区から第Ⅳ区を設定し、幅2.5m総延長118.5mの約300㎡について調査を行った。（徳山 寿樹）



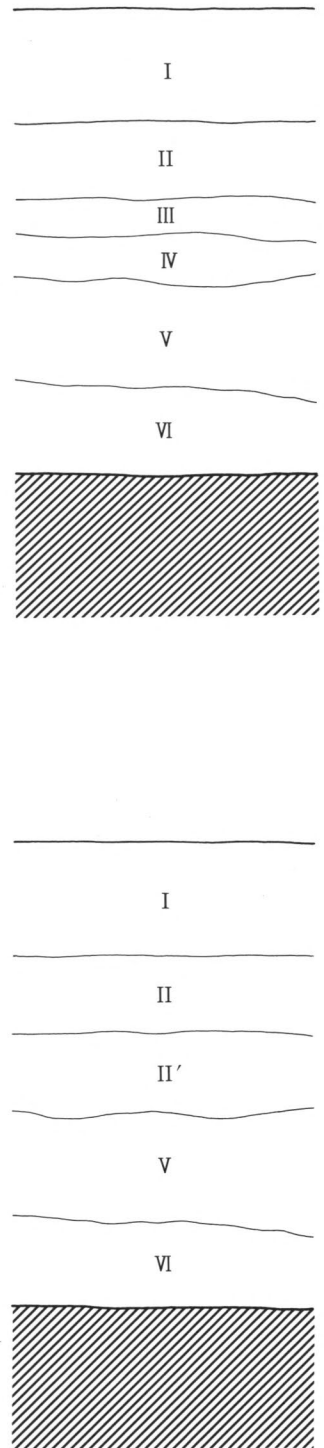
第8図 金佐奈遺跡 A1 地点位置図

2. 基本土層 (第9図)

図に示した土層は、本遺跡の東側と西側における基本土層模式図である。特に東側は第II層と第III層の層位の部分に焼土粒・炭化物粒・土師器小片を多く含む層が堆積しており第II'層とした。この層は、浅間山系、(As-A)を含んでいないことから、中世期における耕作土層と推定される。

- 第I層 暗灰褐色土 (As-A) を含む。
現代の耕作土層
- 第II層 黒色土 (As-B) を含む。
旧表土層
- 第II'層 褐色土 (As-B) を含む。
中世耕作土層
- 第III層 暗褐色土 ローム風化土を多く含む。漸移層
- 第IV層 明黄色土 ソフトローム。
- 第V層 黄色土 ハードローム。
- 第VI層 白色粘質土 白色粘土。

- (As-A) 浅間山系A軽石
- (As-B) 浅間山系B軽石
- (Hr-FA) 榛名二ツ岳渋川軽石
- (As-YP) 浅間-板鼻黄色軽石



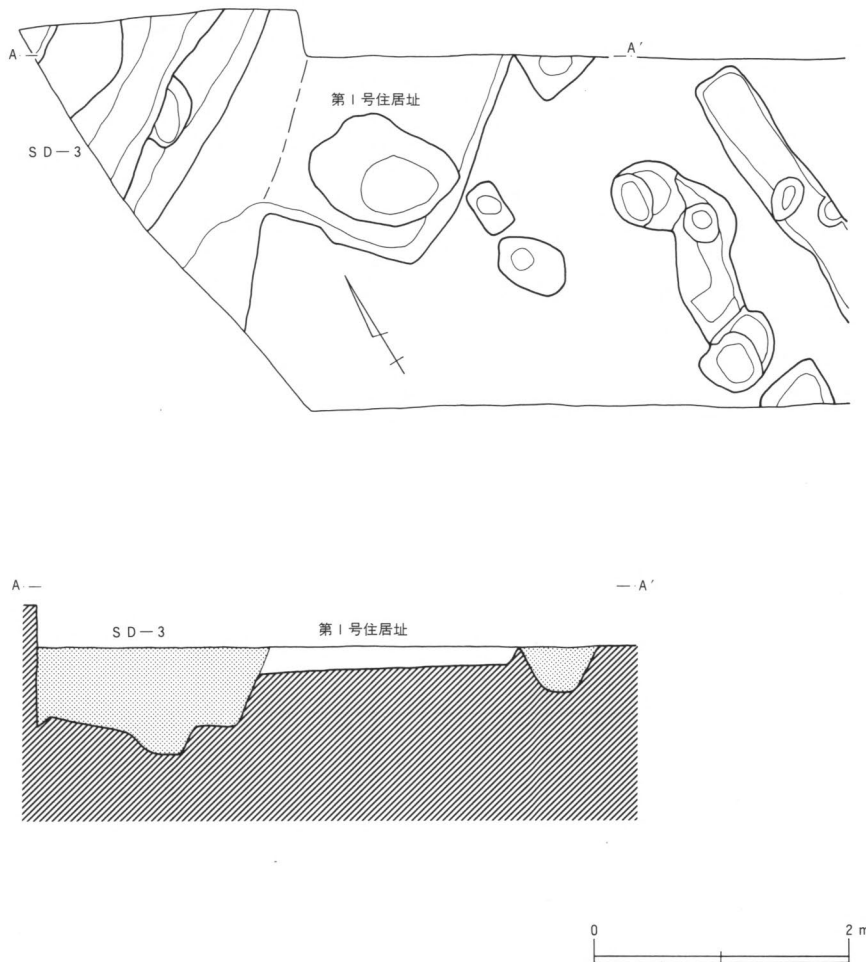
第9図 基本土層模式図

3. 遺構の概要

a. 竪穴式住居址

第1号住居址（第10図 図版3-1）

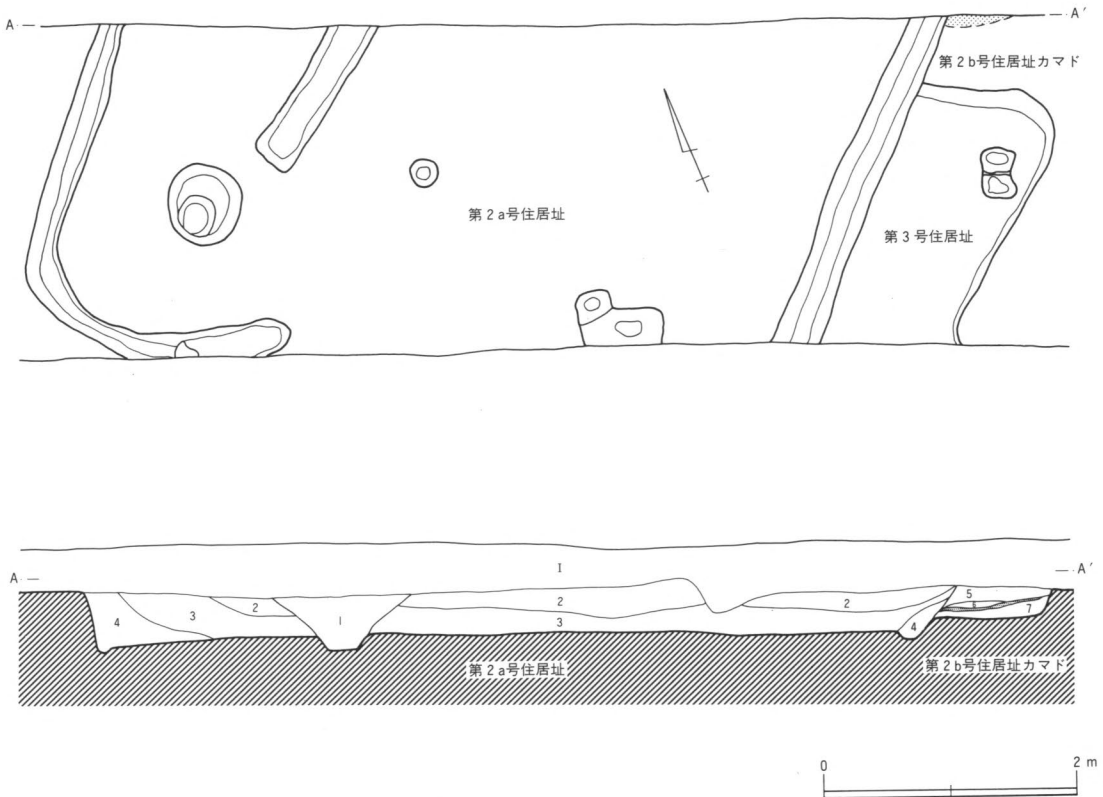
本址は、調査区第I区北端に第3号溝に切られて検出された。遺構の残存部分が調査区外北方向に延びており、南西隅だけの検出となった。調査は全体の約2割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推定される。全体の規模は不明であるが、深さは確認面より約13.6cmを測る。付帯施設は南西隅に最大直径約120cm、深さ14.5cmの不整円形の貯蔵穴を検出している。出土遺物により古墳時代後期（鬼高式）の所産である。



第10図 第1号住居址

第2a・b号住居址（第11図 図版3-2）

本址は、調査区第I区中央付近に第3号住居址を切って構築されている。第2a号住居址は西側部分が検出されたが、北東部分は調査区外の為、調査は全体の5割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈しており、1辺は最大約6mを測り、深さは確認面より約35cmを測る。調査区内の壁は壁溝を有しており全周にめぐらされている可能性が高い。壁溝の深さは床面より平均7cmを測る。床の一部に硬い貼床が確認されている。カマドの検出はなかったが、柱穴が北西隅に1本検出されている。出土遺物は検出されていないが、国分期の第3号住居址を切っていることから、平安時代（国分式）の所産と推定される。第2b号住居址は調査区東側壁断面からカマドの存在が確認された。住居址本体およびカマドの主体部のほとんどが調査区外にあるため時期や詳細については不明である。



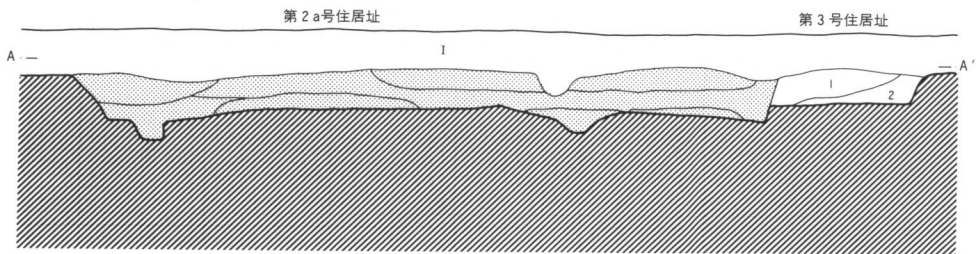
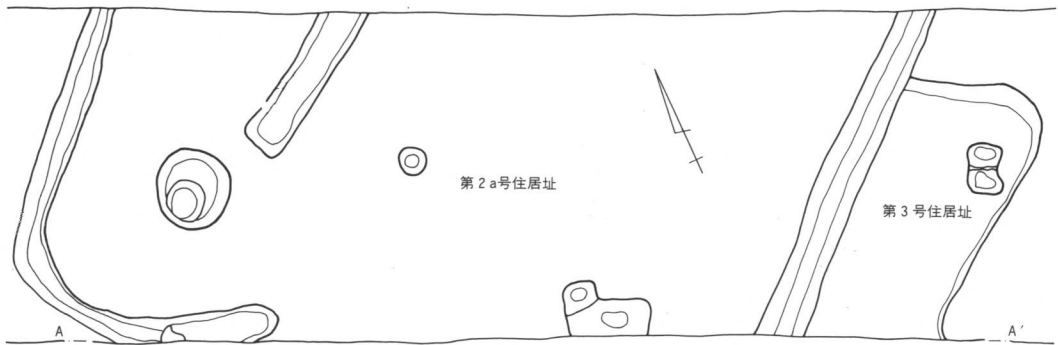
第11図 第2a・b号住居址

第2a・b号住居址土層説明

- | | |
|-----------------------------------|-----------------------|
| 第1層 灰褐色土 (As-A) を含まず、ローム粒子を含む均質層。 | 第4層 黒褐色土 少量のローム粒子を含む。 |
| 第2層 暗褐色土 ローム粒子を少量含む均質層。 | 第5層 褐色土 ローム・焼土を含む。 |
| 第3層 明褐色土 ローム・ローム粒子を多く含む均質層。 | 第6層 明褐色土 粘土・焼土を含む。 |
| | 第7層 明褐色土 粘土・炭化物を多く含む。 |

第3号住居址（第12図 図版3-2）

本址は、調査区第I区中央付近に第2a号住居址に切られて南東隅が検出された。本址北側部分のほとんどは第2a号住居址に切られており、さらに西側は調査区外に延びているため調査は全体の約2割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推定される。全体の規模は不明であるが、深さは確認面より約27cmを測る。付帯施設は確認されていない。出土遺物により平安時代(国分式)の所産である。



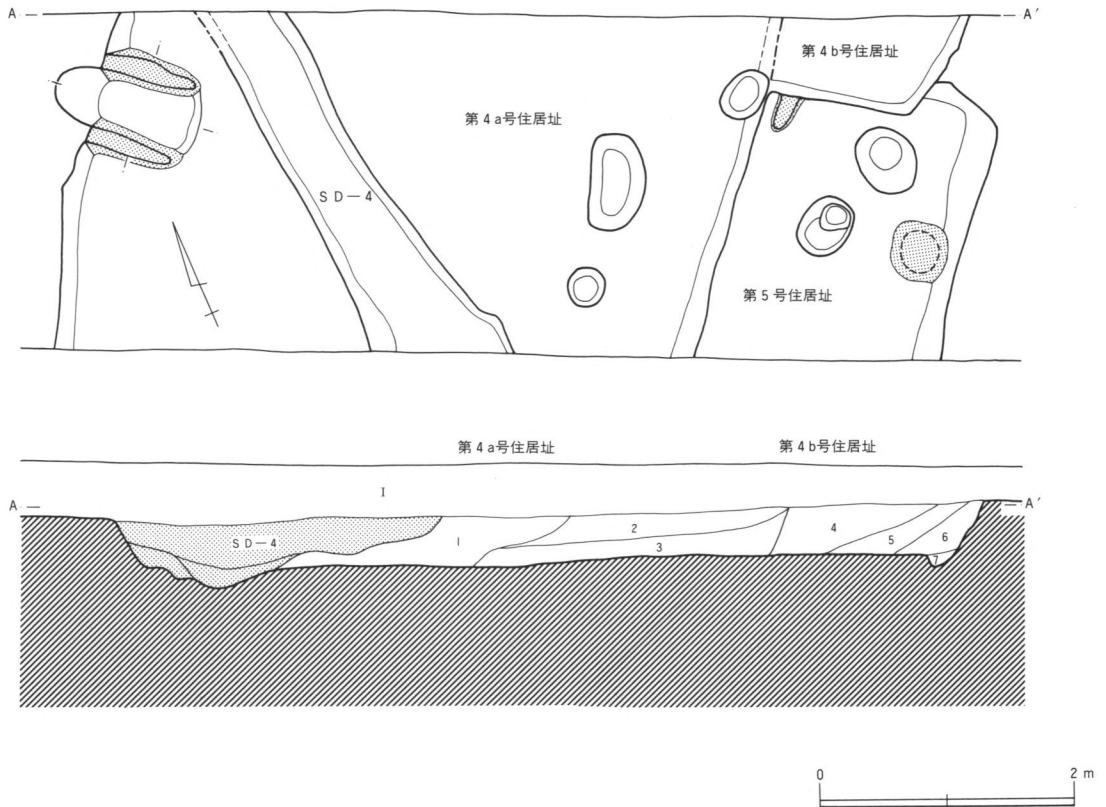
第12図 第3号住居址

第3号住居址土層説明

- 第1層 黒褐色土 わずかにローム粒子を含む均質層。
- 第2層 暗褐色土 第1層よりわずかに明るく、しまりがある。

第 4a・b 号住居址 (第13図 図版 4-1)

本址は、調査区第 I 区中央やや南西寄りに第 5 号住居址を切って検出された。本址の中央部分には北東から南西にのびる第 4 号溝によって切られている。南西壁および北東壁が調査区外に延びているため、調査は全体の 7 割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈し、1 辺は最長 5 m50cm、深さは確認面より 54cm を測る。北西壁からカマドを検出している。また一部に貼床が施されている。第 4b 号住居址は、第 4a 号住居址に切られて検出された。検出されたのは南西隅付近であり、調査は全体の 1 割程度と思われる。住居址の平面形態は方形を呈すると推測されるが規模は不明、深さは確認面から約 45cm を測る。出土遺物により第 4a・b 号住居址ともに古墳時代後期 (鬼高 II 式) の所産である。



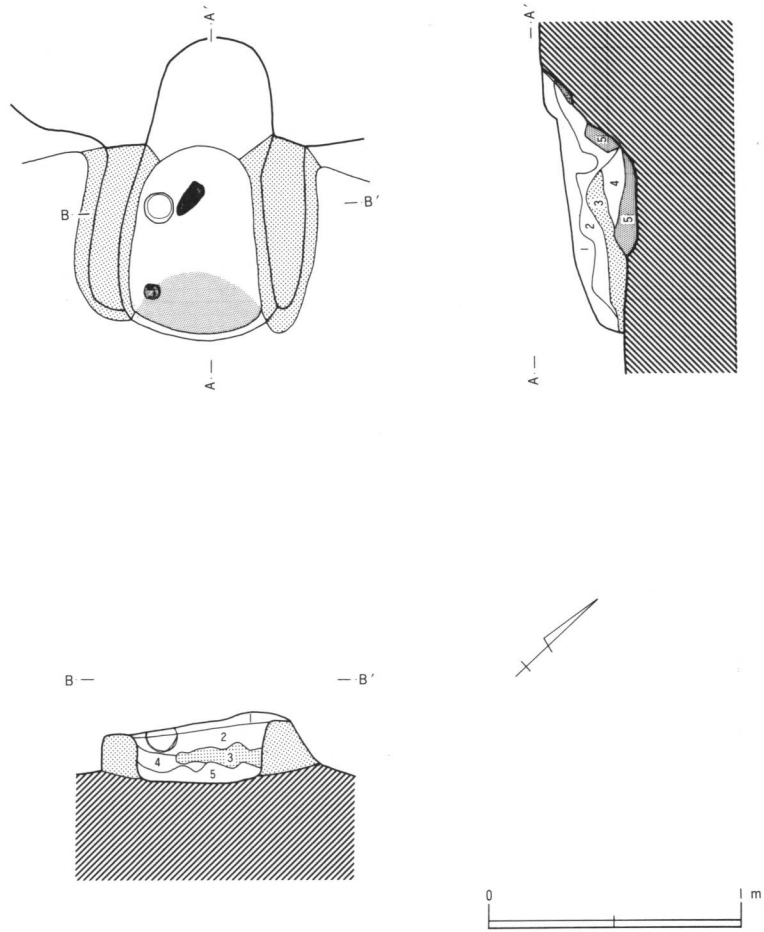
第13図 第 4a・b 号住居址

第 4a・b 号住居址土層説明

- 第 1 層 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロックが多い。
- 第 2 層 黒褐色土 旧表と思われる黒色土中に、ローム粒子が所々に含まれる。
- 第 3 層 黒褐色土 第 2 層よりロームブロック・焼土粒子がやや多い。第 1 層に準じた層。
- 第 4 層 明褐色土 ローム粒子・ブロック (径 3 cm) を多く含む。
- 第 5 層 明褐色土 第 4 層よりやや暗いが、同じ様相である。
- 第 6 層 明褐色土 第 4 層より多くのロームブロック・ローム粒子が含まれる。
- 第 7 層 黄褐色土 ロームブロック。

第 4a 号住居址カマド (第14図 図版 4-2)

住居址北西壁に設置されており、遺存状態は普通である。全長は120cm、幅約56cm、袖部の長さ約60cmを測る。焚口部の掘込みは緩やかで浅く、特に前方部分の底部に強く焼けている痕跡が確認された。また最下層が焼土であることから第4層はカマド天井部の崩壊土層であることがわかった。なお西側のソデ近くの燃焼部より坏がかけられた状態で一個体出土している。



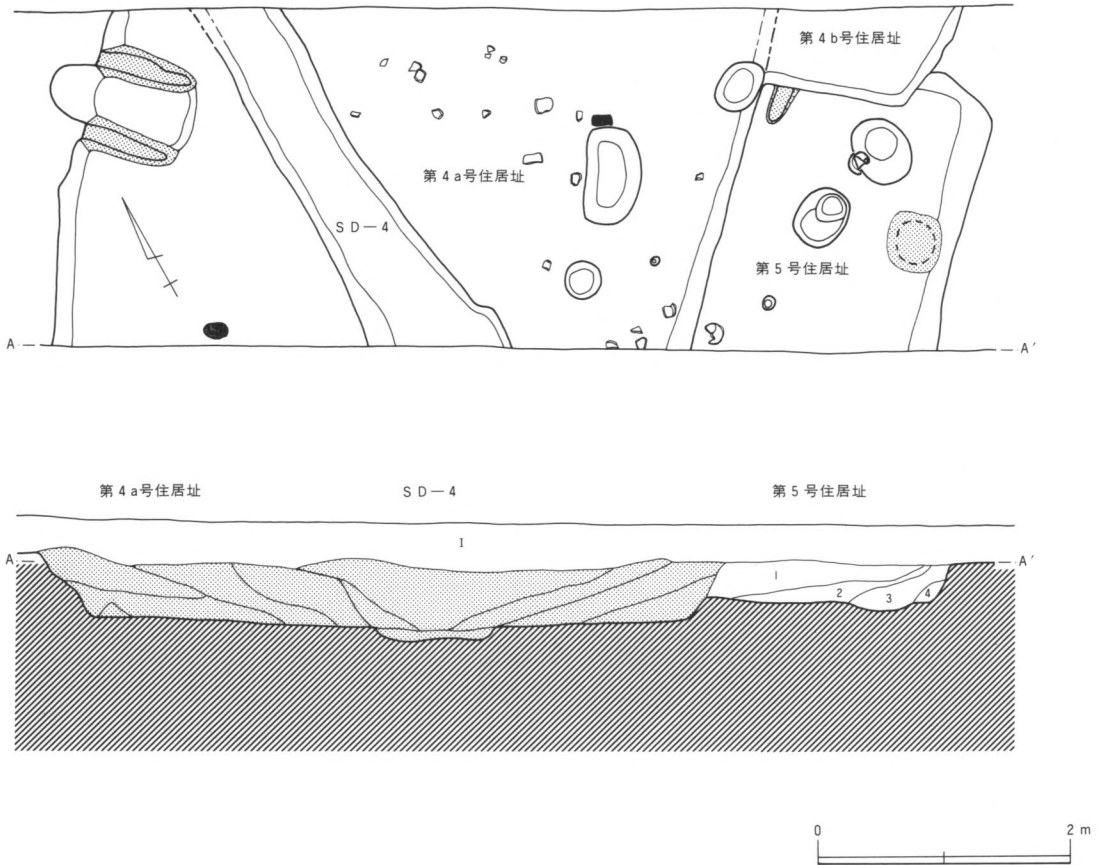
第14図 第 4a 号住居址カマド

第 4a 号住居址カマド土層説明

- 第1層 暗褐色土 しまりは強く、粘性は弱い。ローム粒・カーボン粒・赤色スコリアを含む。
- 第2層 褐色土 しまりは第1層より若干弱い粘性。粘性は第1層と同様。住居の覆土に相当。ローム粒・カーボン粒・焼土を含む。
- 第3層 褐色土 しまりは第2層と同様。粘性は第1・2層より若干強い。ロームブロック・焼土・カーボンを含む。
- 第4層 暗褐色土 粘性・しまりは第3層より若干強い。1/3程度が焼土層。
- 第5層 焼土層。

第5号住居址（第15図 図版4-1）

本址は、調査区第Ⅰ区中央やや南西寄りかつ第4a号住居址南西側に位置している。第4a号住居址および第4b号住居址に切られて検出されており、南東隅付近が検出された。南西部分は調査区外に延びており調査は全体の4割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推定されるが、全体の規模は不明である。深さは確認面から約30cmを測る。付帯施設はカマドのソデの先端が北東部分より検出されているが第4b号住居址に切られているためにカマドの主体部の検出はなかった。北東隅に支柱穴1本及びほぼ円形の貯蔵穴が確認された。また、南東壁から円錐形の粘土塊が確認されている。出土遺物により古墳時代後期（鬼高Ⅱ式）の所産である。



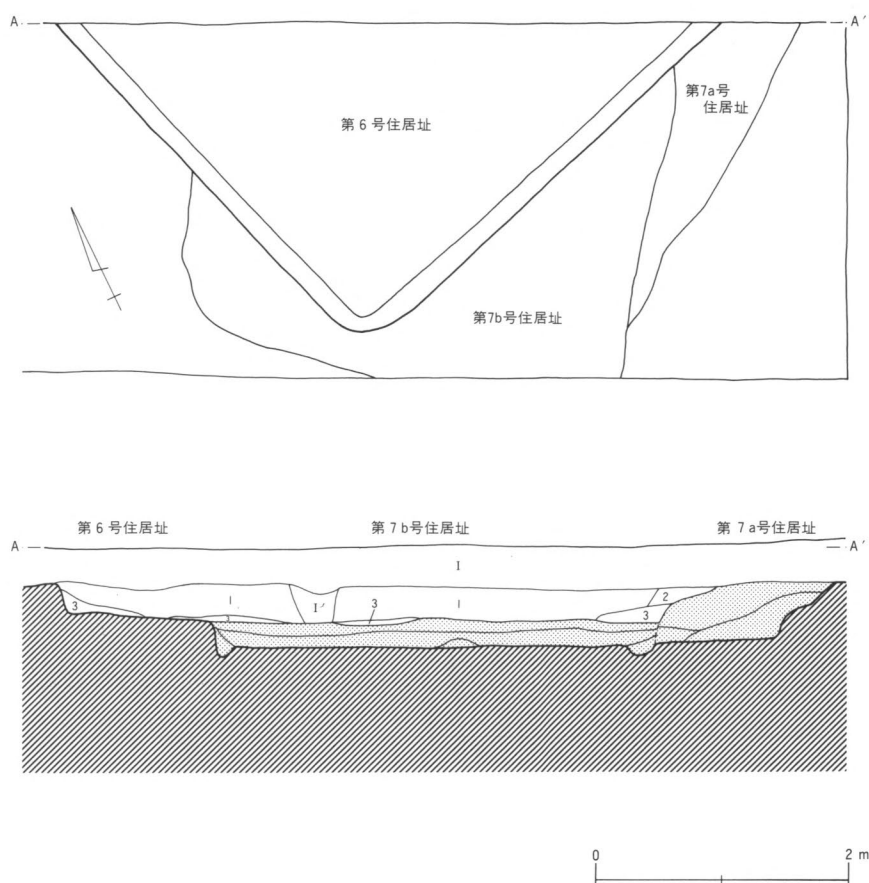
第15図 第5号住居址

第5号住居址土層説明

- 第1層 黒褐色土 黒色土（基本層第Ⅲ層）中にローム粒子を多く含む。
- 第2層 暗褐色土 黒色土中に非常に多くのローム粒子を含む。
- 第3層 黒褐色土 第1層と同じ様相の層。
- 第4層 暗褐色土 第2層に準じた層。

第6号住居址（第16図）

本址は、調査区第Ⅰ区南東側に第7a号住居址、第7b号住居址を切った形で検出された。遺構の北東部分は調査区外に延びているため調査は全体の約3割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈しているが、規模は不明である。黒色土層の旧表土から切り込まれており、深さは約30cmを測る。床面に関しては柔らかく明確な貼床および付帯施設の確認はできなかった。断面の観察により本址は廃棄後、ある程度の自然堆積がなされた後ロームブロック主体の旧表土を人為的に再堆積させたことが考えられる。このことは竪穴住居址を埋めた後に平地式住居に再構築した可能性や、基盤がローム層であることから隣地に造り変え、その廃土を本址に廃棄した可能性が考えられる。出土遺物により平安時代（国分式）の所産である。



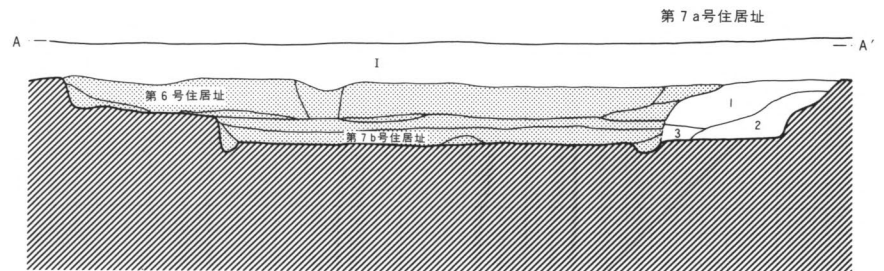
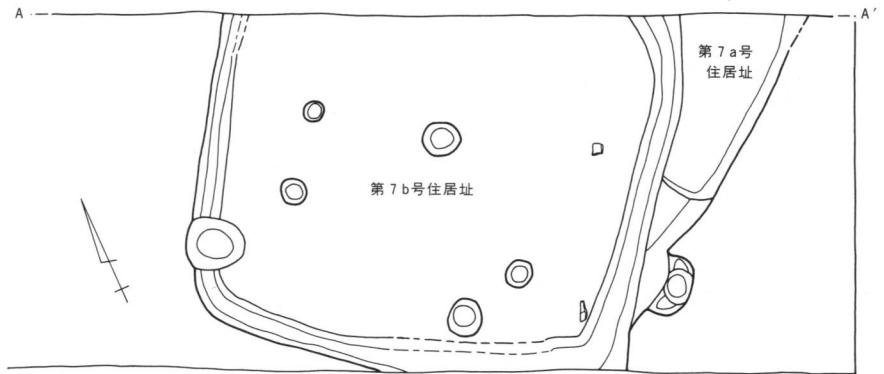
第16図 第6号住居址

第6号住居址土層説明

- 第1層 ロームブロック層 褐色土中にロームブロックを多く含む。
- 第2層 褐色土 若干のローム粒子を含む。(As-A)は含まない。
- 第3層 褐色土 ロームブロックを所々に含む。

第7a号住居址（第17図 図版5-1）

本址は、調査区第I区南東側に第6号住居址および第7b号住居址に切られて検出された。遺構の北東部分は調査区外に延びており南壁付近の一部のみ検出され、調査は全体の約2割程度に留まった。平面形態、規模は共に不明であるが深さは確認面より約50cmを測る。付帯施設については検出されなかった。出土遺物により古墳時代後期（鬼高II式）の所産である。



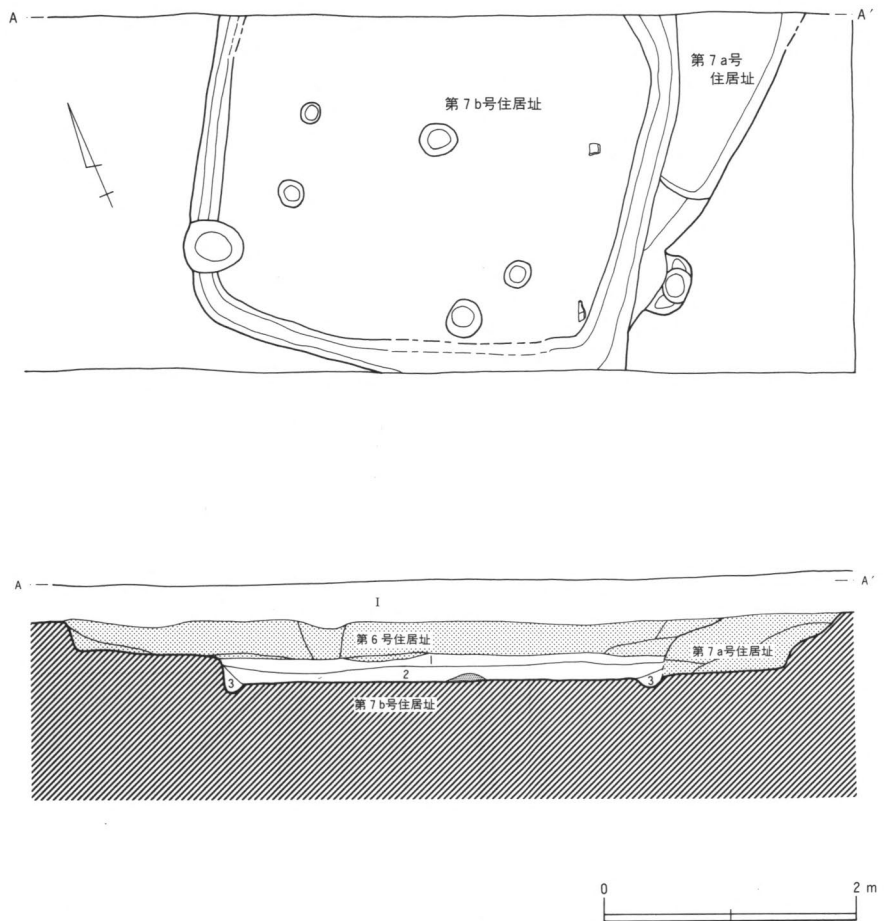
第17図 第7a号住居址

第7a号住居址土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒子を所々に含む均質層。
- 第2層 暗褐色土 第1層と同じくローム粒子を所々に含むが若干暗い。
- 第3層 暗褐色土 第2層に準ずるが第1層より暗い均質層。

第7b号住居址（第18図 図版5-2）

本址は、調査区第Ⅰ区南東側に第6号住居址および第7a号住居址と重複して検出された。新旧関係は第6号住居址に切られ、第7a号住居址を切って構築されている。東側壁は調査区外に延びており調査は全体の約8割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈しており、規模は南北方向に3.7m、深さは確認面より約20cmを測る。全体に壁溝を配していると推定される。他の付帯施設はカマドを含め検出されなかったが、調査区北壁下部断面に焼土塊が認められたことから、カマドは住居址北壁に設置されていたものと思われる。出土遺物により古墳時代後期（鬼高Ⅱ式）の所産である。



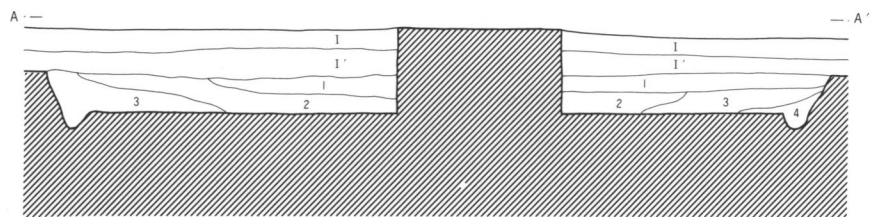
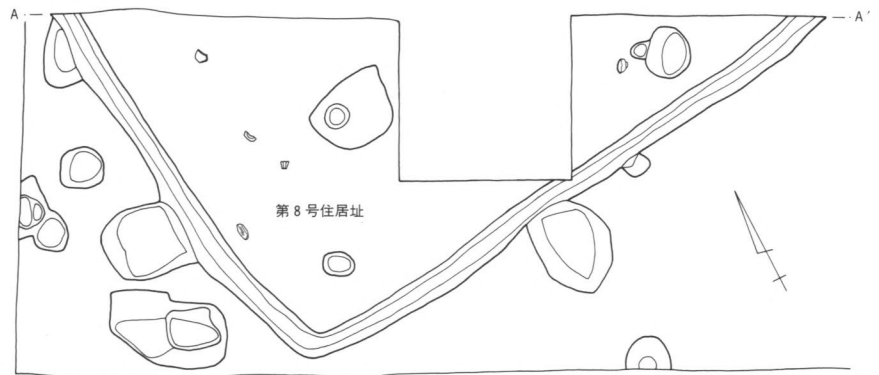
第18図 第7b号住居址

第7b号住居址土層説明

- 第1層 黒褐色土 ロームブロック・粒子を多く含む。(第7b号住をうめた貼り床) とても硬い層。
- 第2層 黒褐色土 所々にロームブロック・粒子を含む。住居埋没過程の層。
- 第3層 褐色土 ロームブロックを所々に含む。

第8号住居址 (第19図 図版6-1)

本址は、調査区第II区北西端に検出された。住居の東北側半分が調査区外に延びている。また基準杭が住居址内中央付近にあり未調査区を設定したため、調査は全体の約5割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈し、南東隅は調査区壁付近と推定される。規模は調査区内で最長4.8m、深さは確認面より約45cmを測る。付帯施設は南側の支柱穴が1本確認されている。床面は硬質でありしっかり踏み固められていた。また、壁には明確な壁溝が検出され、住居全体に壁溝がめぐると推測される。出土遺物により古墳時代後期（鬼高I式）の所産である。



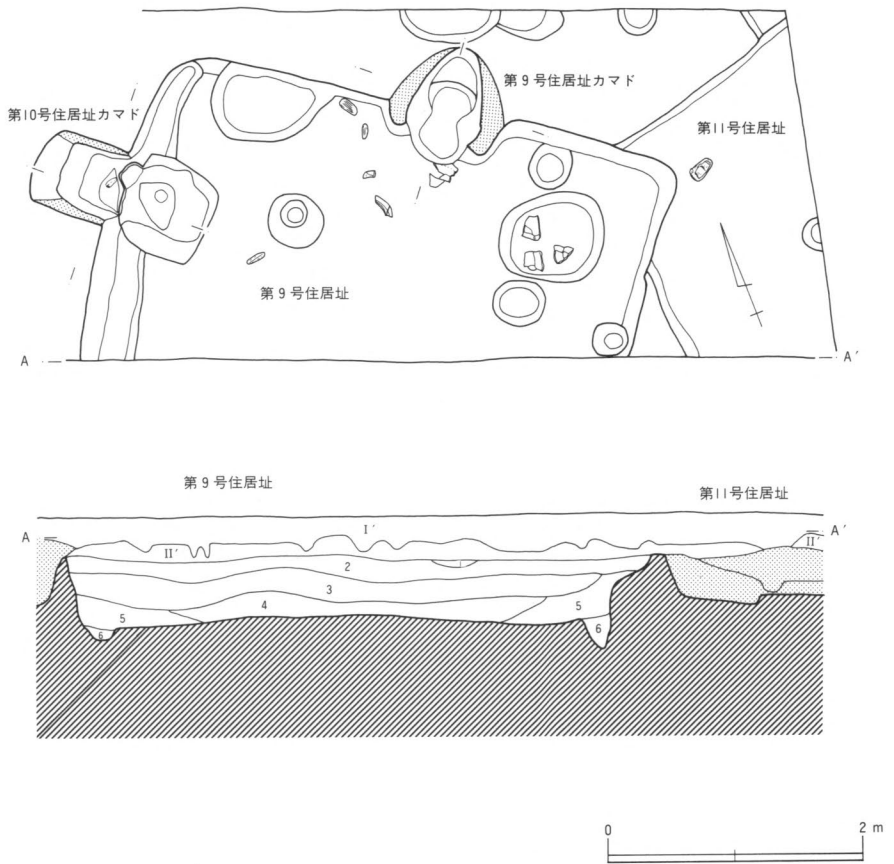
第19図 第8号住居址

第8号住居址土層説明

- 第1層 褐色土 ローム粒子を少量含む。焼土粒子は少ない。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒子をわずかに含む。
- 第3層 黒褐色土 旧表と思われる。黒色土中にわずかにローム粒子が含まれる。
- 第4層 黄褐色土 ロームを非常に多く含む。

第9号住居址 (第20図 図版7-1)

本址は、調査区第II区中央付近に第10号住居址と重複して検出された。第10号住居址を切って構築されている。住居址の南西側部分は調査区外のため、調査は全体の5割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈しており、規模は東西に4.2mを測る。深さは確認面より約50cmを測る。北東壁ほぼ中央にカマドが構築されている。東側の支柱穴2本と南西側壁付近に直径約85cmの円形の貯蔵穴を検出している。北西側壁にのみ壁溝を付設している。出土遺物により奈良時代(真間期)の所産である。



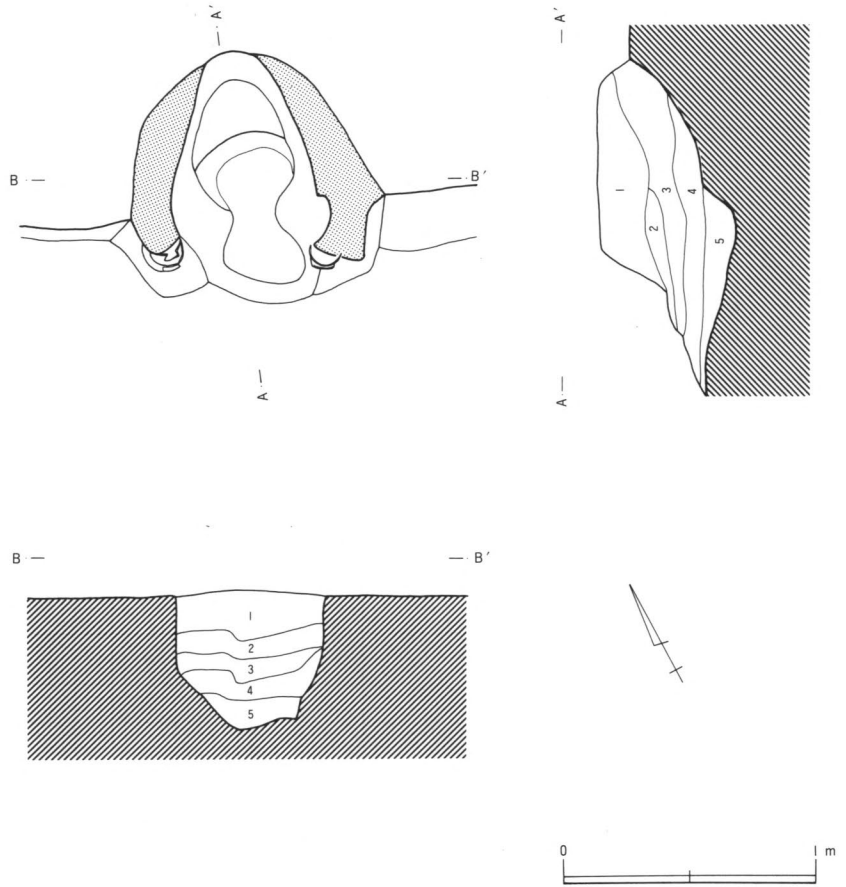
第20図 第9号住居址

第9号住居址土層説明

- 第1層 白色粘土 粘性、しまりが強い粘土。
- 第2層 暗褐色土 黒色土とロームがまだらに含まれる砂質層。ローム粒が所々に含まれる。
- 第3層 褐色土 ローム粒子を所々に含む砂質層。
- 第4層 褐色土 ローム粒子を所々にロームブロックを斑点状に含む不均質層。第3層より暗い。
- 第5層 黒褐色土 黒色土中に、ロームブロックが斑点状に多く含まれる。
- 第6層 黄褐色土 ロームブロックが主体である。

第9号住居址カマド（第21図 図版7-2）

北東側壁のほぼ中央に設置されている。遺存状態は良好である。全長は約100cm、幅約95cm、袖部の長さ約30cmを測る。両ソデの先端には甕が倒立した状態で検出されたことからカマドの補強材として甕を使用したと推定される。さらに燃焼部の両壁には粘土による補強がなされている。焚口部は奥が10cm程度掘り込んであり手前に向けて緩やかに立ち上がり床面とほぼ同一になる。



第21図 第9号住居址カマド

第9号住居址カマド土層説明

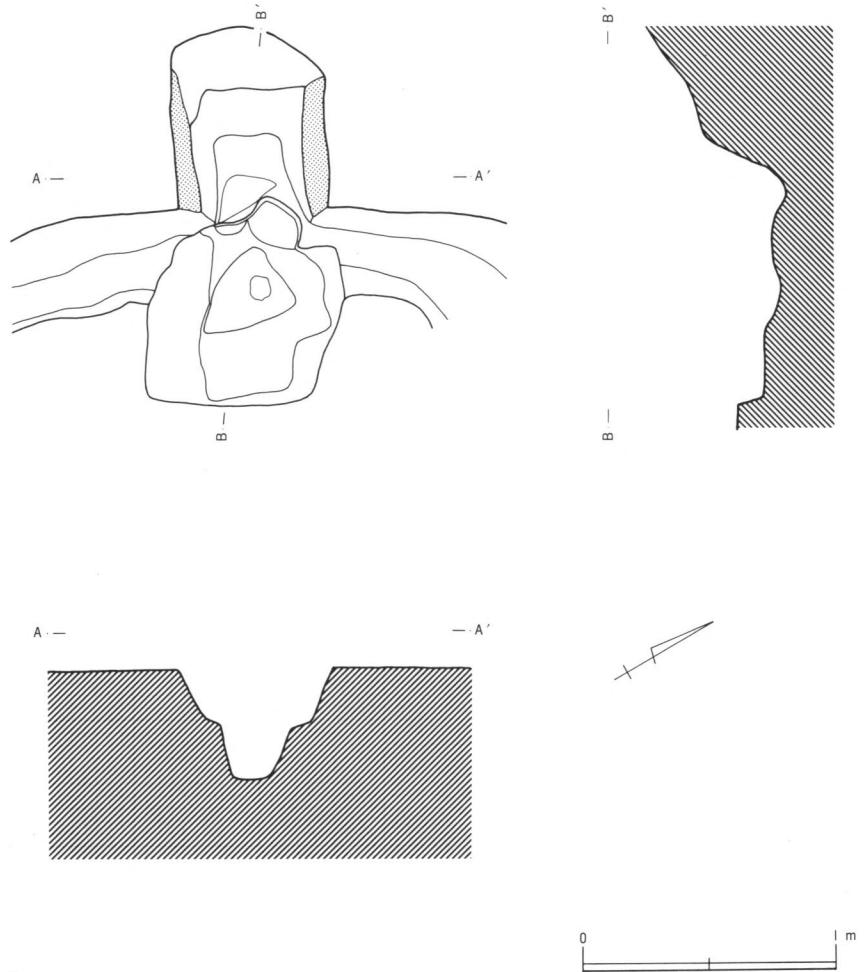
- 第1層 灰茶褐色土 粘性、しまり共に有する。径1～2mmのローム粒子を多量に含む粘質土。(カマド天井部崩壊土)
- 第2層 赤茶褐色土 しまりは有するが粘性を欠く。焼土主体で成り立っている。
- 第3層 黒褐色土 しまりは少ないが多少の粘性はある。炭化された還元層である。
- 第4層 明灰色土 しまり、粘性共に有する。きめの細かいローム・粘土の風化土のような層。(カマド床面)
- 第5層 暗褐色土 しまり、粘性共に有する。径1～10mm位の炭化物・焼土粒を多く含む。(カマド掘り方)

第10号住居址（第20図 図版8-1）

本址は、調査区第II区中央付近に第9号住居址と重複して検出された。本址は第9号住居址より浅く、第9号住居址の構築によりほとんどが破壊されたと推定され、カマド以外は検出されていない。詳細は不明であるが、第9号住居址は本址の再構築の可能性もある。

第10号住居址カマド（第22図 図版8-1）

第9号住居址の北西壁に切られて検出された。遺存状態は不良である。全長は約145cm、幅約80cmを測る。カマドのソデは第9号住居址に切られているため確認できなかった。燃烧部の両壁に粘土による補強がなされている。第9号住居址の北西壁溝下周辺から長さ約80cmの方形に近い焚口部の掘り込みが検出されている。



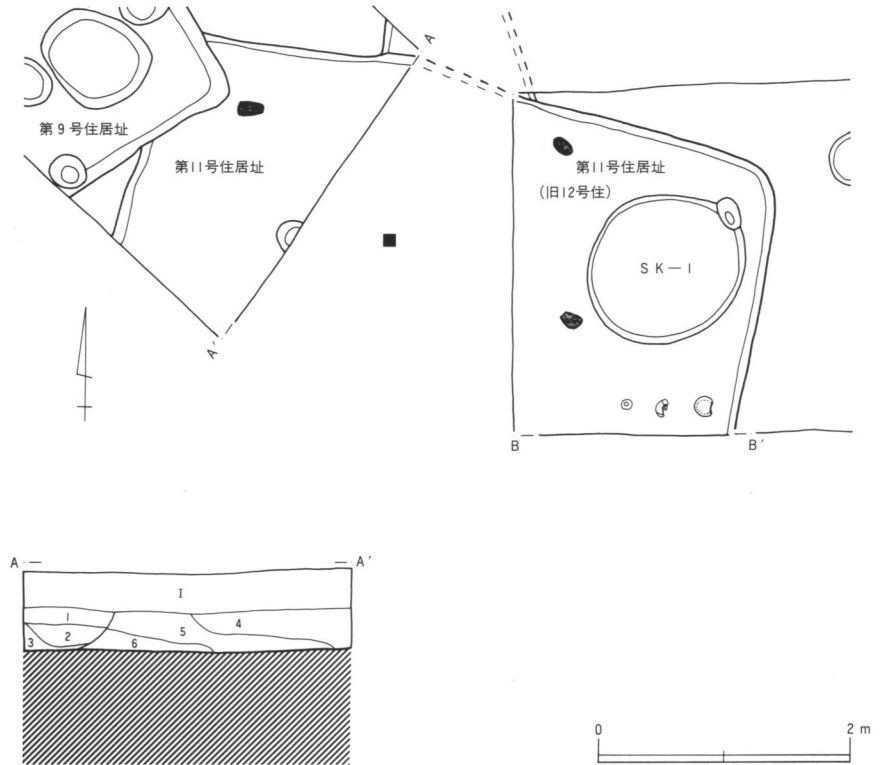
第22図 第10号住居址カマド

第11号住居址 (第23図 図版7-1)

本址は、調査区第II区南西隅および調査区第III区西隅にかけて検出された。北西隅を第9号住居址に、北東壁近くを第1号土壌によって切られている。また北壁中央付近を溝状遺構によって切られており、さらに北側中央部分は調査区に、南側は調査区外に延びているため調査は全体の約4割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈し、規模は東西に約5m、深さは確認面より約30cmを測る。出土遺物により古墳時代後期(鬼高II式)の所産である。

旧第12号住居址 (欠番)

本址は第11号住居址と同一住居址である。調査の過程で調査区第II区および第III区に跨ったため、第12号住居址と住居番号を付けたが、調査の結果同一住居と判明したため第12号住居址は欠番とした。



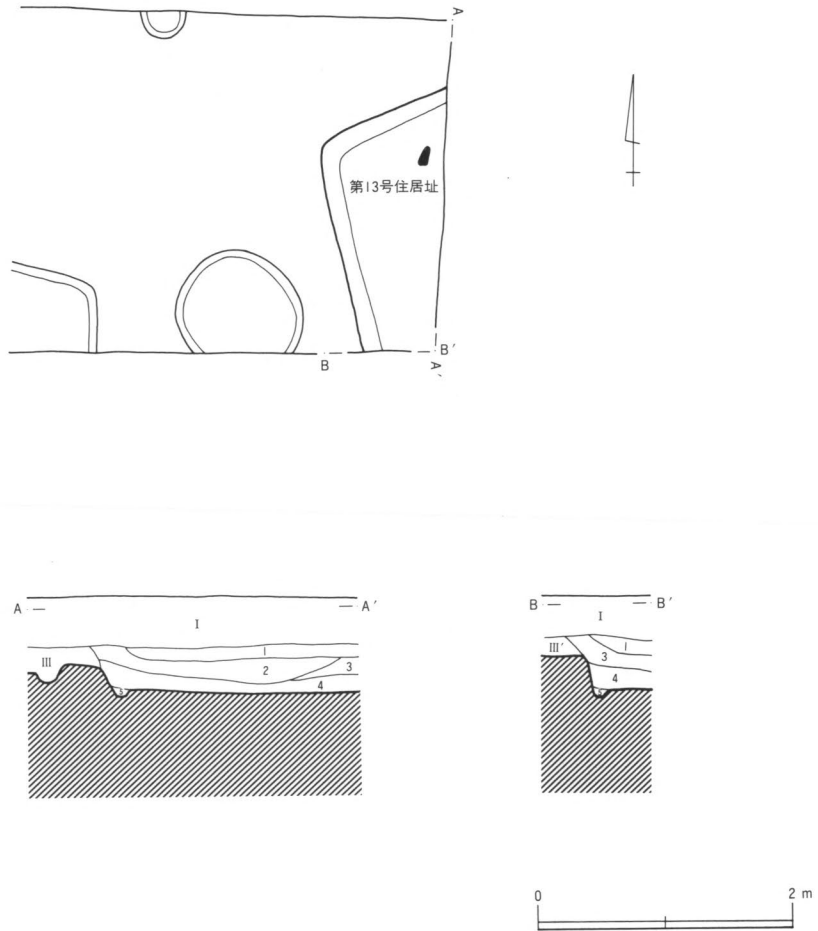
第11号住居址土層説明

- 第1層 褐色土 若干のローム粒子を含む。
- 第2層 褐色土 第1層よりやや暗い。
- 第3層 暗褐色土 わずかにローム粒子を含む。
- 第4層 褐色土 ローム粒子をわずかに含む。
- 第5層 暗褐色土 旧表中にローム粒子を多く含む。
- 第6層 明褐色土 ローム粒子を非常に多く含む。

第23図 第11号住居址

第13号住居址（第24図 図版9—2）

本址は、調査区第Ⅲ区東端に西隅付近のみ検出された。住居址の大部分は調査区外に延びており調査は全体の2割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推測される。規模は不明、深さは確認面より約35cmを測る。カマド等の付帯施設の検出はなかった。出土遺物により古墳時代後期（鬼高Ⅱ式）の所産である。



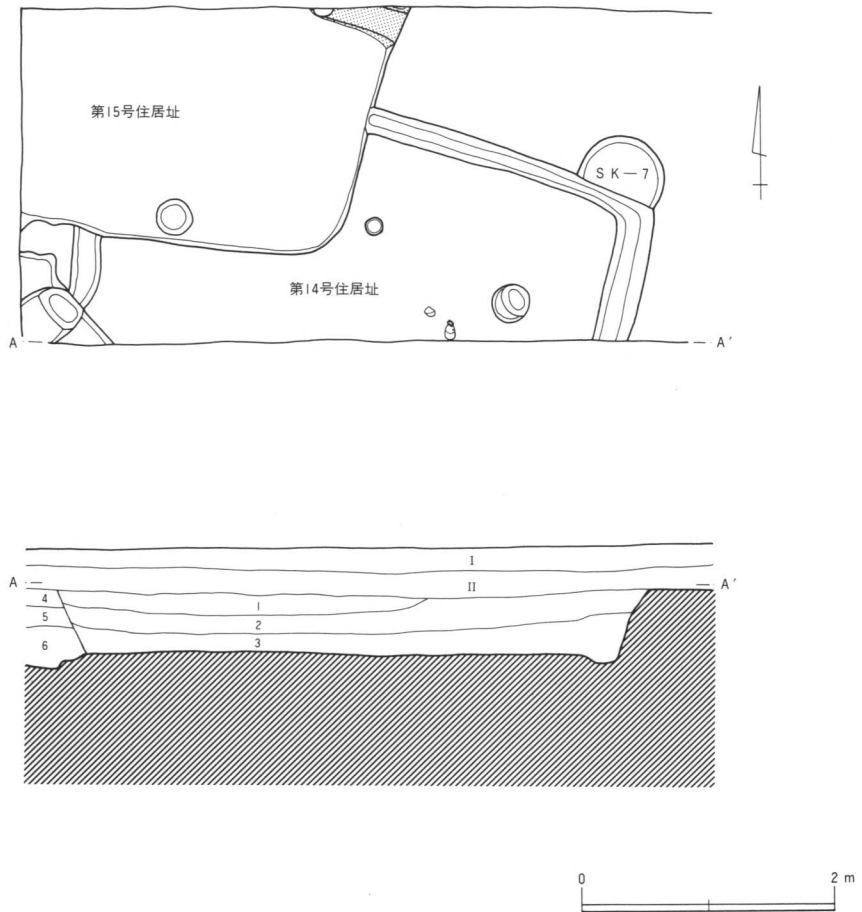
第24図 第13号住居址

第13号住居址土層説明

- 第1層 暗褐色土 わずかにローム粒子を含む均質層。
- 第2層 褐色土 わずかにローム粒子を含む均質層。第1層よりやや暗い。
- 第3層 褐色土 ローム粒子が多く含まれる。
- 第4層 黒褐色土 旧表と思われる黒色土中に、ローム粒子・ロームブロックがわずかに含まれる。
- 第5層 黄褐色土 ロームブロックにより構成されている。

第14号住居址（第25図 図版10—1）

本址は第IV区西端に西隅付近が第15号住居址と重複して検出された。南側は調査区外に延びているため調査は約5割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推定され、規模は東西に4.5m、深さは確認面から50cmを測る。床は貼床が施されている。検出された壁は壁溝がめぐっており、全体にめぐらされている可能性が高い。住居址北側より支柱穴が2本検出されている。カマドなどその他の付帯施設は検出されなかった。出土遺物より古墳時代後期（鬼高II式）の所産である。



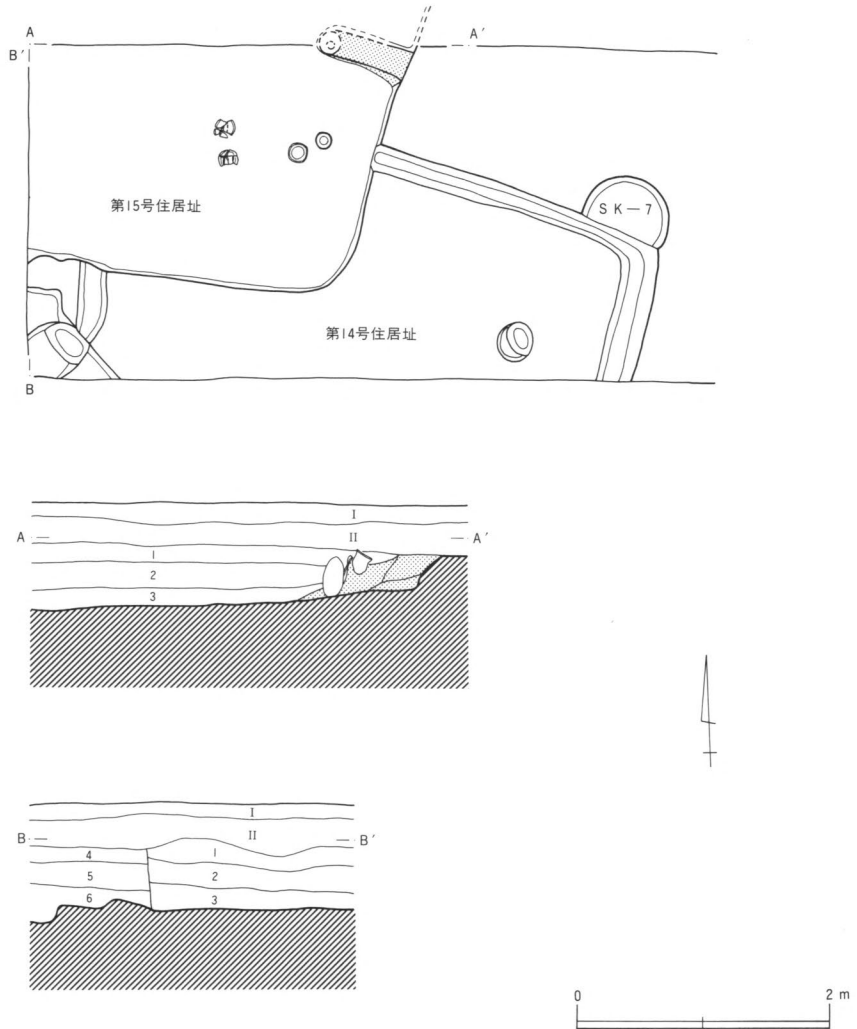
第25図 第14号住居址

第14号住居址土層説明

- 第1層 褐色土 ローム粒子を多く含む砂利質層。
- 第2層 明褐色土 ローム粒子・ロームブロックが非常に多く含まれる砂質層。
- 第3層 褐色土 ローム粒子・ロームブロックが所々に含まれる。
- 第4層 褐色土 ローム粒子が多く含まれる粘質土層。
- 第5層 褐色土 ローム粒子が多く含まれる砂利質層。
- 第6層 暗褐色土 ローム粒子が多く含まれる粘質層。

第15号住居址（第26図 図版10—2）

本址は第IV区西端に第14号住居址と重複して検出された。住居址のほとんどが調査区外に延びており、調査は全体の3割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推定されるが、規模は不明である。深さは確認面より約50 cmを測る。カマドが東壁に南側のソデのみが検出された。出土遺物より古墳時代後期（鬼高II式）の所産である。



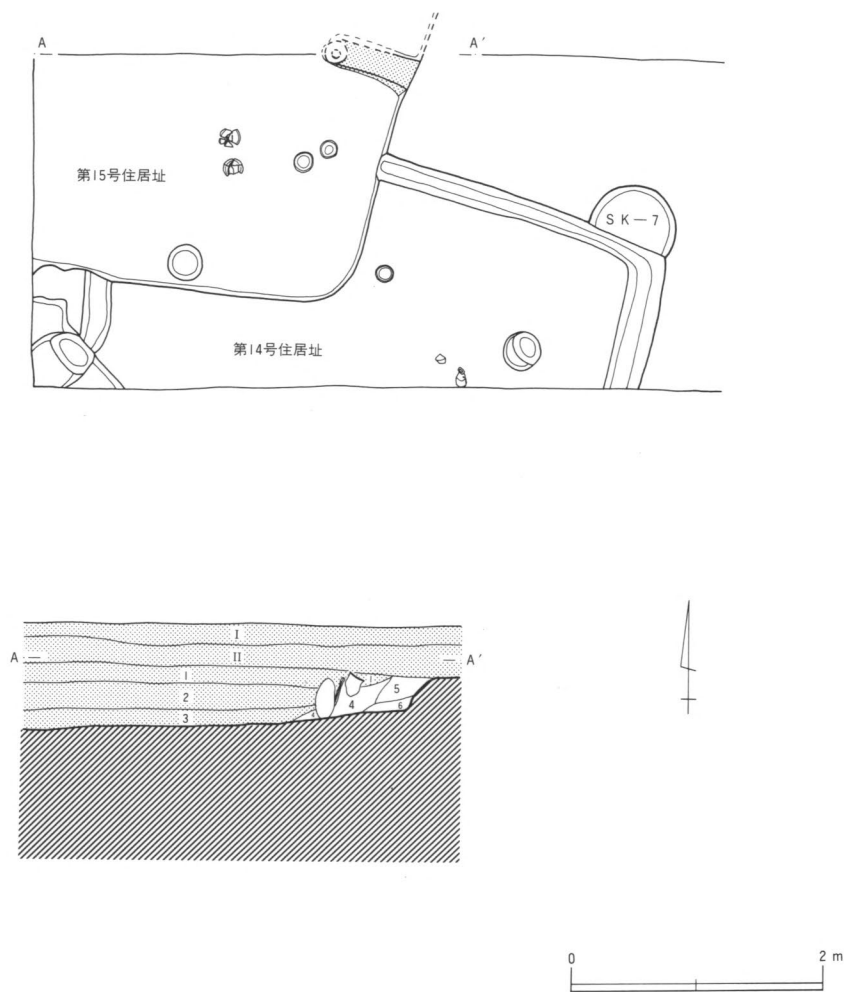
第26図 第15号住居址

第15号住居址土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む粘質土層。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒子を更に多く含む砂利質層。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒子を更に多く含む粘質層。
- 第4層 褐色土 ローム粒子が多く含まれる粘質土層。
- 第5層 褐色土 ローム粒子が多く含まれる砂利質層。
- 第6層 暗褐色土 ローム粒子が多く含まれる粘質層。

第15号住居址カマド (第27図 図版10-1)

カマドは東壁中央付近に設置されている。カマドの全体は北側調査区外にあるため、調査は南側ソデの一部のみとなった。そのため全体の規模は不明である。ソデの長さは70cmを測る。ソデの先端には補強材としての長胴甕が直立状態で置かれていた。



第27図 第15号住居址カマド

第15号住居址カマド土層説明

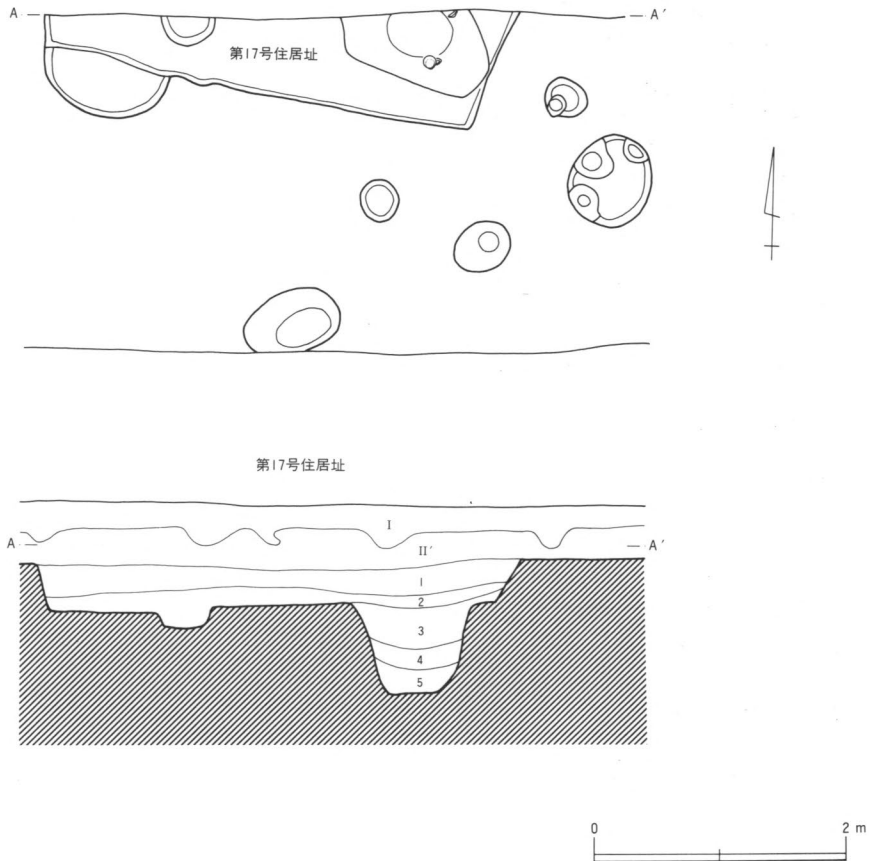
- 第I層 暗灰褐色土 (As-A) を含む。現代の耕作土層。
- 第II層 暗褐色土 (As-B) を含む。旧表土層。
- 第1層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む粘質土層。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒子を更に多く含む砂利質層。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒子を更に多く含む粘質層。
- 第4層 明褐色土 焼土炭化物を多く含む。
- 第5層 黄褐色土 ソフトロームの2次堆積層。
- 第6層 暗黄褐色土 ソフトロームと黒色土の交合した層。

旧第16号住居址（欠番）

第17号住居址西側に平面調査の際、落ち込みが検出されたため、住居址として調査をおこなったが、調査の結果自然地形の落ち込みであることが判明したため、本報告では欠番とした。

第17号住居址（第28図 図版11-1）

本址は調査区第IV区西側に、第20号住居址の一部と重複して検出された。住居の北側は調査区外に延びており、調査は全体の2割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈していると推定され、規模は東西に3.6m、深さ40cmを測る。南東隅付近に平面形態が楕円を呈する貯蔵穴が南半分程度検出されている。出土遺物より古墳時代後期（鬼高II式）の所産である。



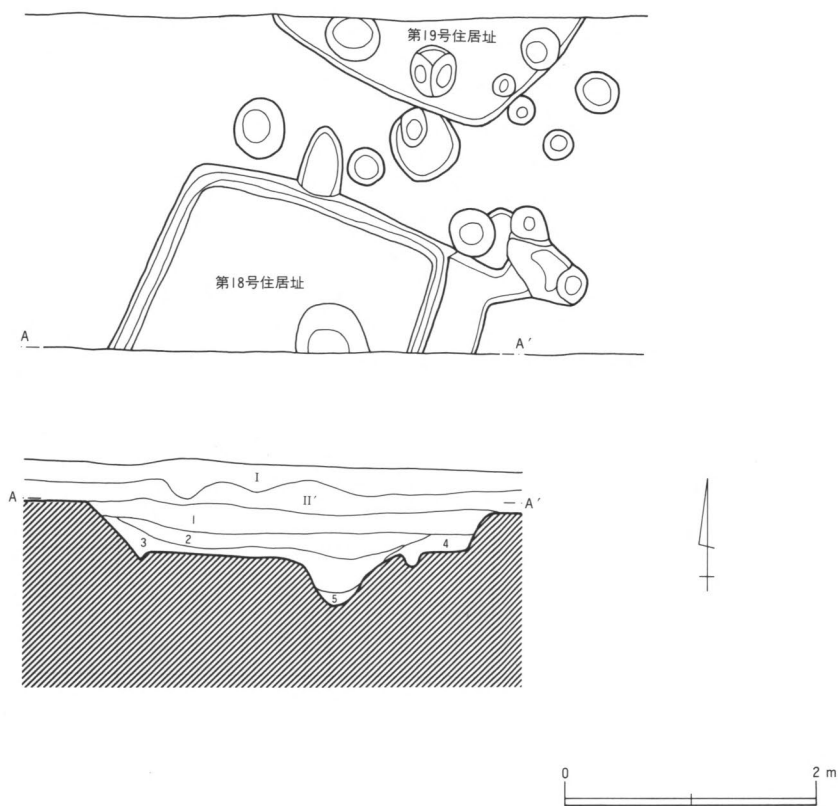
第28図 第17号住居址

第17号住居址土層説明

- 第1層 褐色土 ローム粒が少し含まれる砂質層。
- 第2層 褐色土 ローム粒が少し含まれる砂質層。第1層より暗い。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒子が非常に多く含まれる。
- 第4層 黒褐色土 旧表と思われる黒色土中に、若干のローム粒子が含まれる。
- 第5層 暗褐色土 ロームブロックや、ローム粒子の含まれる不均質層。

第18号住居址 (第29図 図版11-2)

本址は調査区第IV区中央西側寄りに検出された。住居址南側は調査区外に延びており調査は全体の5割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推定され、規模は東西に2.7m、深さは確認面より50cmを測る。南東隅より貯蔵穴の可能性がある半円の落ち込みが確認されている。全体に溝壁がめぐると推定されるが、東側壁溝が住居址のやや内側に回っていることから、建物の拡張がされたと考えられる。また、覆土第1層は焼土を多く含むことから、住居廃絶後時間を経てから廃屋が何らかの理由で火災になった可能性がある。



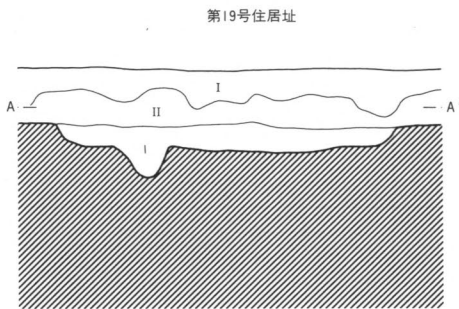
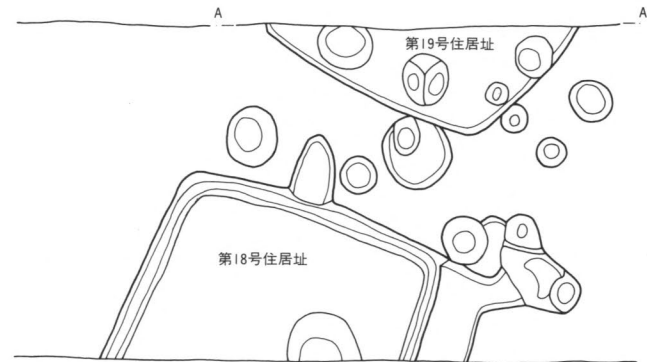
第29図 第18号住居址

第18号住居址土層説明

- 第1層 褐色土 焼土・土器片を多く含む。ローム粒子は非常に少ない。
- 第2層 褐色土 ローム粒が所々に含まれる。ローム粒子は非常に少ない。
- 第3層 褐色土 ローム粒が所々に含まれる。ローム粒子は非常に少ない。
第2層より明るい。
- 第4層 明褐色土 ロームブロックが汚点状に含まれる不均質層。
- 第5層 黒褐色土 ロームブロックがいくつかある。

第19号住居址 (第30図 図版11-2)

本址は調査区第IV区中央西側寄りに南東隅付近が検出された。北側のほとんどが調査区外に延びているため、調査は全体の2割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推定されるが、規模は不明である。深さは確認面より20cmを測る。付帯施設などの検出はなかった。遺物も検出されなかったため時期も不明である。



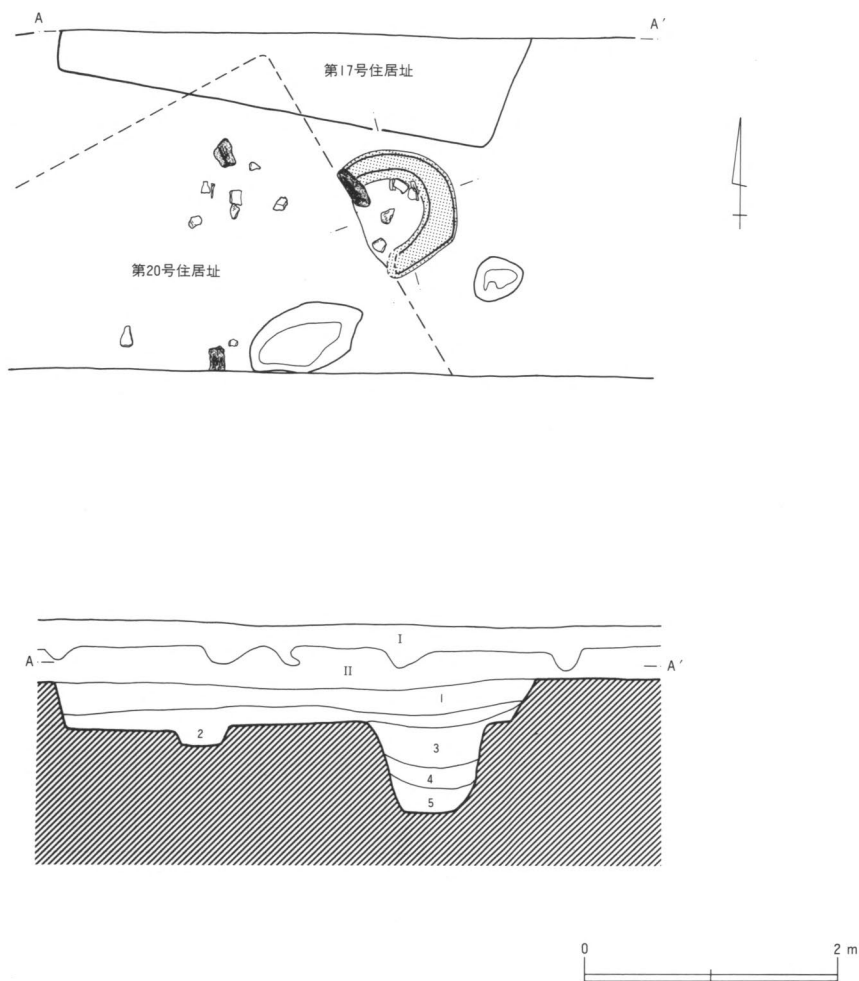
第30図 第19号住居址

第19号住居址土層説明

- 第I層 暗灰褐色土 (As-A)を含む。現代の耕作土層。
- 第II層 暗褐色土 (As-B)を含む。旧表土層。
- 第1層 黒褐色土 しまり、粘性を若干有する。ローム粒を含む。

第20号住居址（第31図 図版12-1）

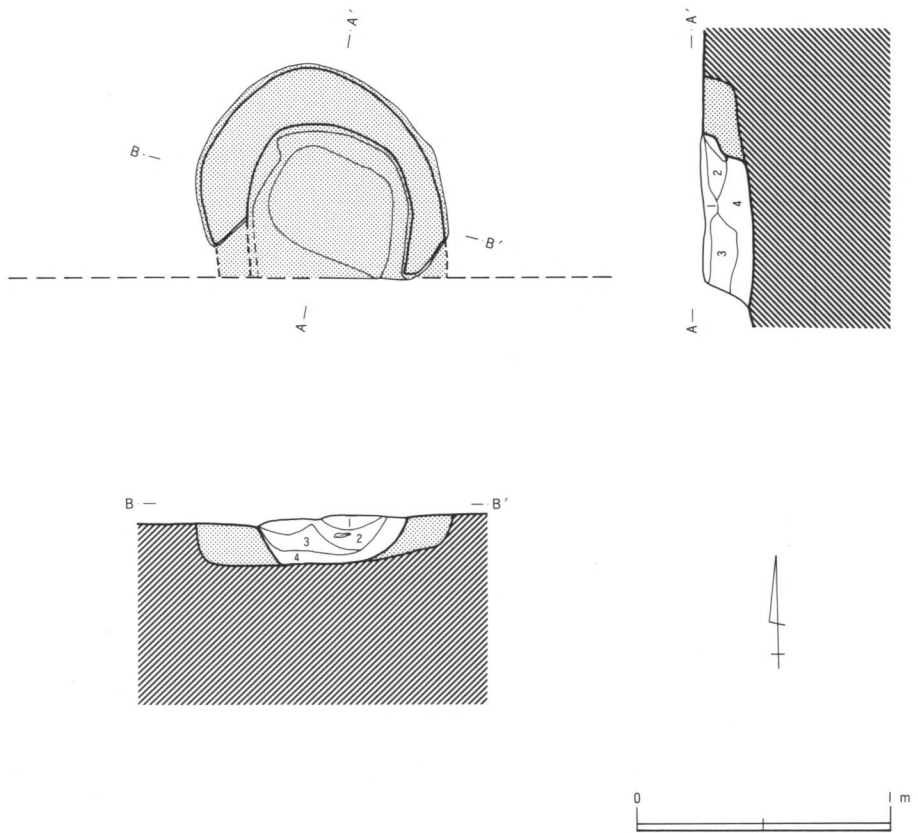
本址は調査区第IV区中央西側寄りに、北側隅付近を第17号住居址と重複して検出された。耕作による攪乱がひどいため、遺構全体像は明確にすることはできず、平面形態および規模は不明である。しかし、本住居址の北側に位置する第17号住居址断面から本址の床面が検出されていないことから、第17号住居址の断面図作成位置より南側に本址の北壁があると考えられる。付帯施設としては東壁にカマドのみが検出されている。カマド内およびカマド前付近より羽釜の破片が数点出土しており、平安時代（国分式）の所産である。なお南側の土壌は貯蔵穴の可能性もあるが明確ではない。



第31図 第20号住居址

第20号住居址カマド（第32図 図版12-2）

カマドは東壁に構築されているが、依存状態は不良であった。規模は全長70cm、幅100cmを測る。ソデ部はほとんどない構造であると思われるが、外側は幅10cm程度の粘土によって補強がなされている。またカマド内からは自然石製の支脚が出土している。焚口部は広く、燃烧部の下部はごく浅くゆるやかにくぼみ皿状を呈している。



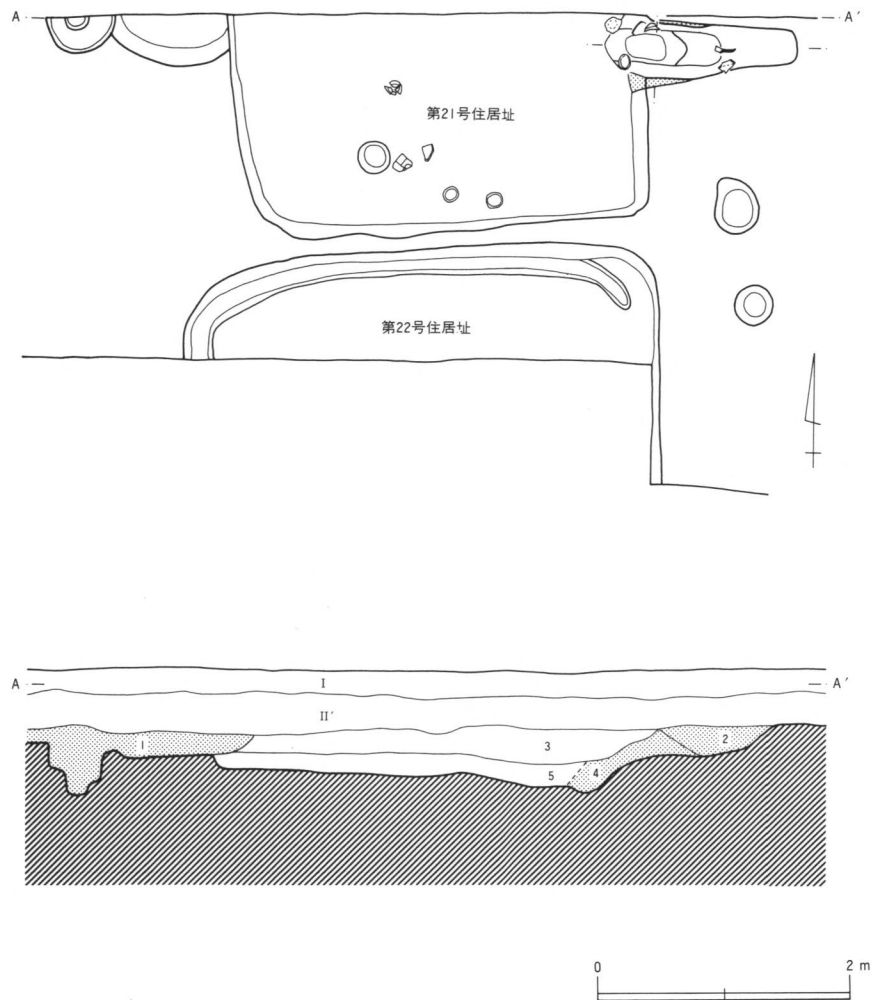
第32図 第20号住居址カマド

第20号住居址カマド土層説明

- 第1層 褐色土 しまり強く、粘性弱い。焼土少量であるが全体的に含んでいる。ローム粒と黄色粒を含んでいる。
- 第2層 暗褐色土 しまりは第1層にくらべて強い。粘性は第1層より弱い。ローム粒・黄色粒・カーボン粒を含んでいる。
- 第3層 暗褐色土 第2層よりやや明るい。しまり強く、粘性弱い。焼土を若干含んでいる。
- 第4層 暗褐色土 しまりは普通で、粘性は第3層よりやや強い。焼土とカーボン粒を含む。

第21号住居址（第33図 図版13—1）

本址は調査区第IV区中央やや東側寄りに検出された。北側は調査区外に延びているため調査は全体の約6割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈し、規模は東西に3.3m、深さは確認面より30cmを測る。床は貼床が施されている。東壁にカマドが設置されているが、支柱穴、貯蔵穴などのその他の付帯施設は確認されていない。出土遺物より奈良時代（真間式）の所産である。



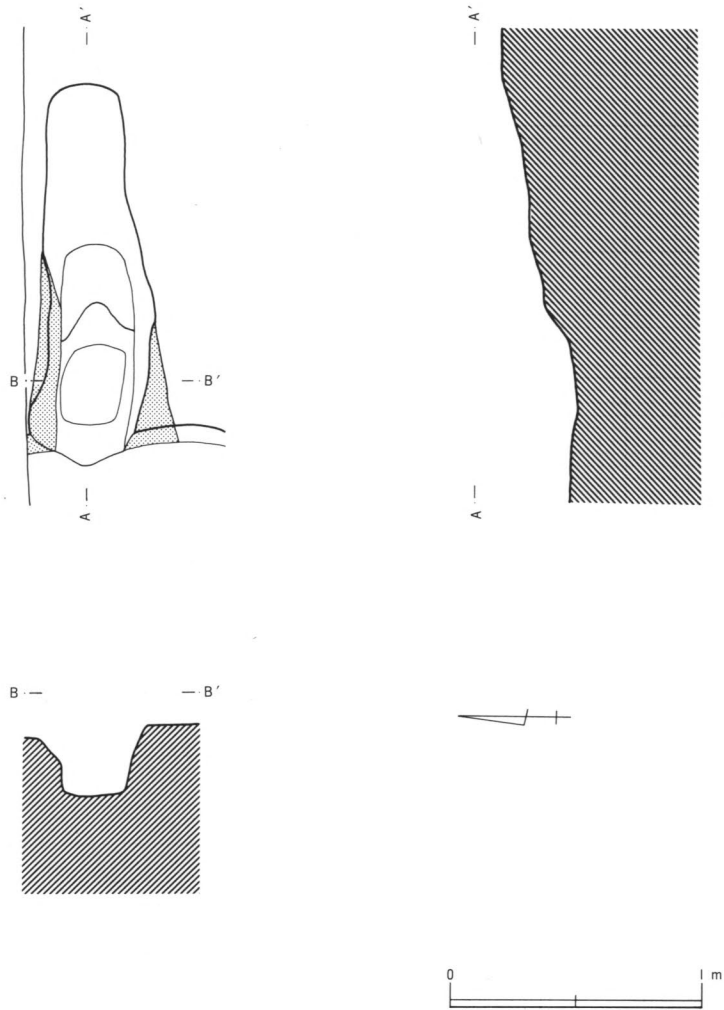
第33図 第21号住居址

第21号住居址土層説明

- 第1層 暗褐色土 (As-A) を含まず、ロームが斑点状に混入した不均質層。
- 第2層 暗褐色土 焼土・炭化物を多く含む。カマド関連層。
- 第3層 褐色土 ローム粒子・焼土を多く含む。
- 第4層 灰褐色土 カマド天井部の粘土が混入している。焼土粒子を多く含む。
- 第5層 暗褐色土 所々にローム粒子を含む。

第21号住居址カマド（第34図 図版13-2）

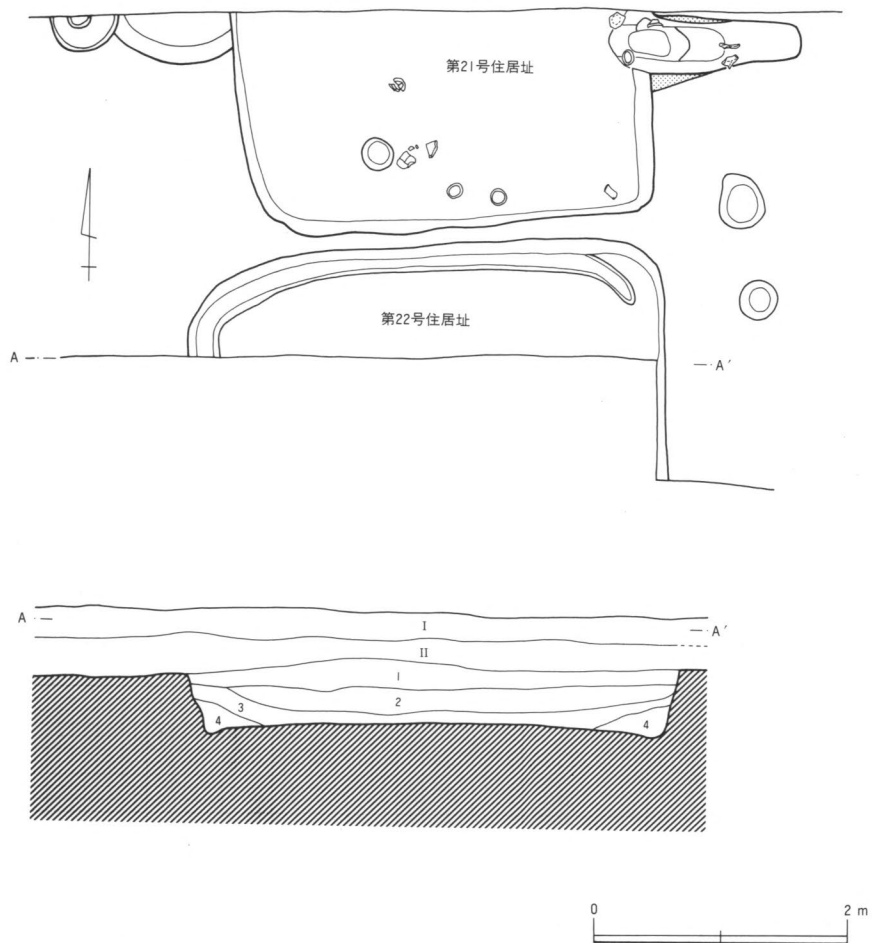
カマドは東壁のほぼ中央に設置されていると推定できる。遺存状態は良好である。規模は全長約150cm、幅55cmを測る。煙道の一部が残存しており、立ち上がりは非常に緩やかである。焚口部は細く、燃烧部の下部にはゆるい皿状のくぼみを有している。焚口部から燃烧部にかけての内壁には粘土が貼られ、補強されている。



第34図 第21号住居址カマド

第22号住居址 (第35図)

本址は調査区第IV区中央やや東側寄り、第21号住居址南側に検出された。南側は調査区外に延びているため調査は北側壁付近約3割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推定され、規模は東西に3.8m、深さは確認面より50cmを測る。床は貼床が施されており、西壁、北壁には壁溝が掘られていた。覆土第1層は焼土を含み、中に土器片を含むことから住居廃絶後に火を焚いた形跡と考えられる。また、東壁の南寄りの断面より焼土が確認されており、この住居のカマド付近の可能性が高いが、明確にすることはできなかった。出土遺物はなく、時期は不明である。



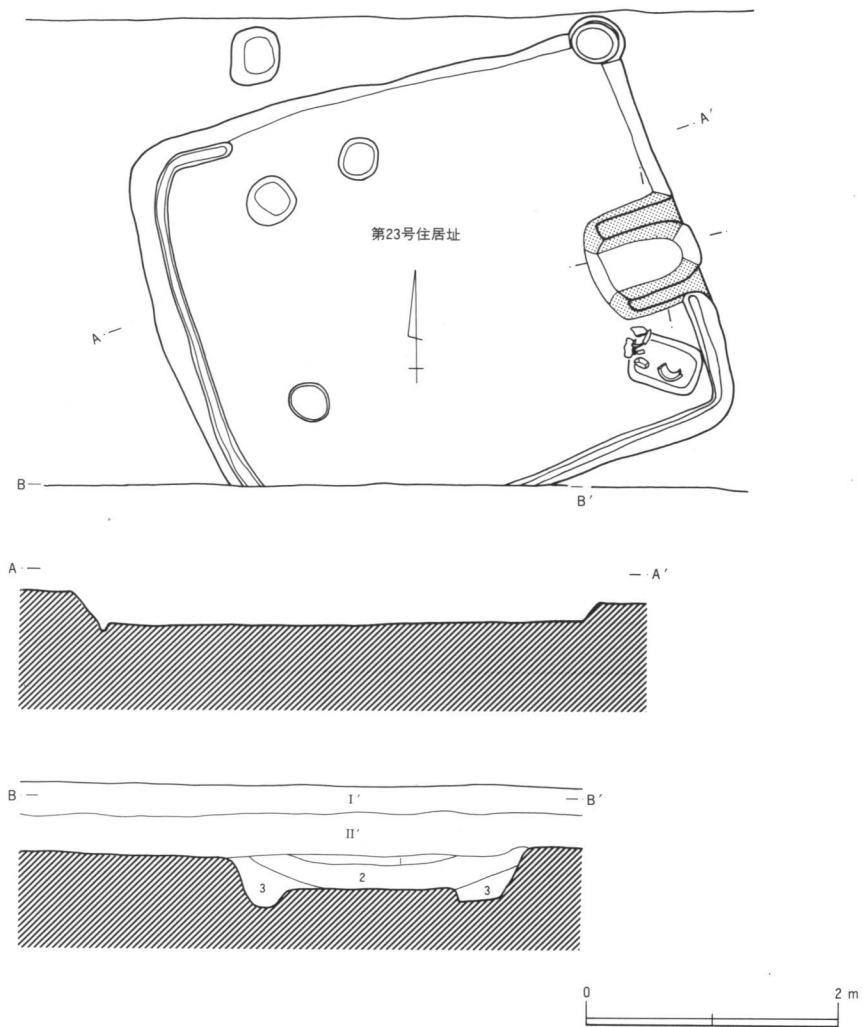
第35図 第22号住居址

第22号住居址土層説明

- 第1層 暗褐色土 土器片・焼土粒子を所々に含む。しまりの強い層。
- 第2層 褐色土 ローム粒・ローム粒子を所々に含む。しまりのある層。
- 第3層 暗褐色土 ローム粒子を所々に含む。しまりの弱い層。
- 第4層 黒褐色土 ローム粒子をわずかに含む。旧表相当の2次堆積。

第23号住居址 (第36図 図版14)

本址は調査区第IV区中央より東側に検出された。南東隅は調査区外にあるため、調査は全体の9割程度である。住居址の平面形態は長方形を呈し、規模は東西に420cm、南北に3.4m、深さは確認面より30cmを測る。カマドは東壁に設置されている。南東壁および西壁、東壁の一部に壁溝が掘られている。また、西側に支柱穴が2本、貯蔵穴が南東隅に確認されている。出土遺物より古墳時代後期(鬼高II式)の所産である。



第36図 第23号住居址

第23号住居址土層説明

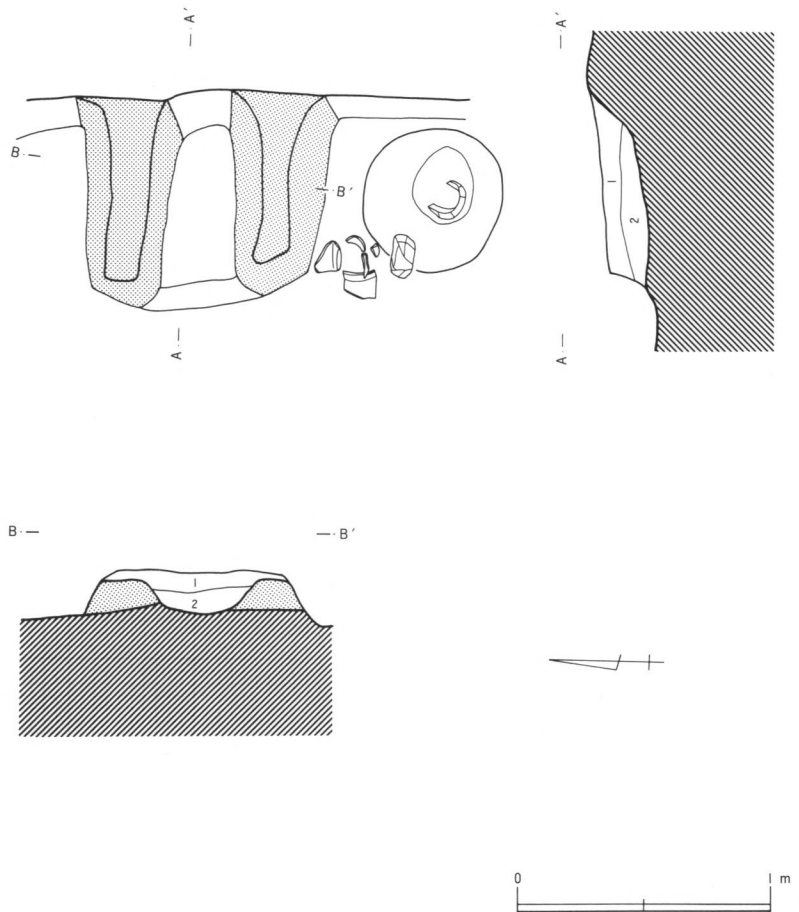
- 第1層 褐色土 ローム粒・ローム粒子を斑点状に含む。しまりの強い均質層。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒・ローム粒子を斑点状に含む。しまりの弱い不均質層。
- 第3層 褐色土 ロームブロックが汚点状に含まれ、ローム粒・ローム粒子を所々に含む不均質層。

第23号住居址カマド（第37図 図版16-1）

カマドは住居址東壁中央やや南側よりに設置されている。遺存状態は不良である。規模は全長90cm、幅95cm、ソデ長80cmを測る。焚口部は広く、燃烧部の下部にゆるいくぼみを有している。また、崩壊が著しいが、ソデ下部が地山のロームを掘り残して構築されていることが確認されている。

第23号住居址貯蔵穴

貯蔵穴はカマド南側に検出された。平面形態は円形を呈し、規模は、直径約60cmを測る。底部はやや中心より南側によっており楕円形を呈する。底部の形状は平坦であり、立ち上がりは緩やかである。覆土中から甕の土器片が出土している。



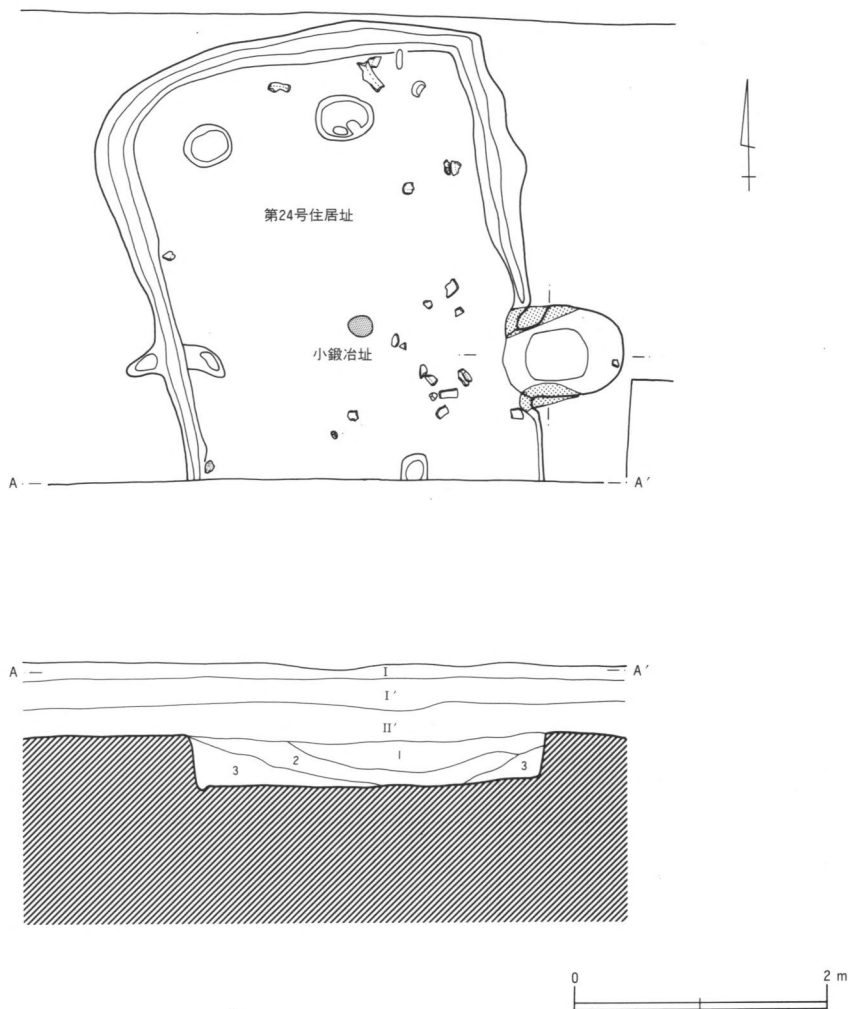
第37図 第23号住居址カマド

第23号住居址カマド土層説明

- 第1層 褐色土 ローム粒子・焼土粒子をわずかに含む。
- 第2層 褐色土 ローム粒子・焼土粒子を多く含む粘質層。
- 第3層 褐色土 ローム粒子を多く焼土粒子を少し含む粘質層。ロームブロックを含む。

第24号住居址（第38図 図版17-1）

本址は調査区第IV区東側寄りに検出された。南壁付近が調査区外に延びているため、調査は全体の8割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈し、規模は東西に3.3m、深さは確認面から40cmを測る。カマドは東壁に構築されている。また検出された壁のほぼ全体に壁溝が掘られていることが確認されている。住居中央付近の床面が直径約20cmの範囲で焼けており、さらに周囲の床面が非常に硬質であることから、小鍛冶址の可能性も考えられる。出土遺物より奈良時代（真間式）の所産である。



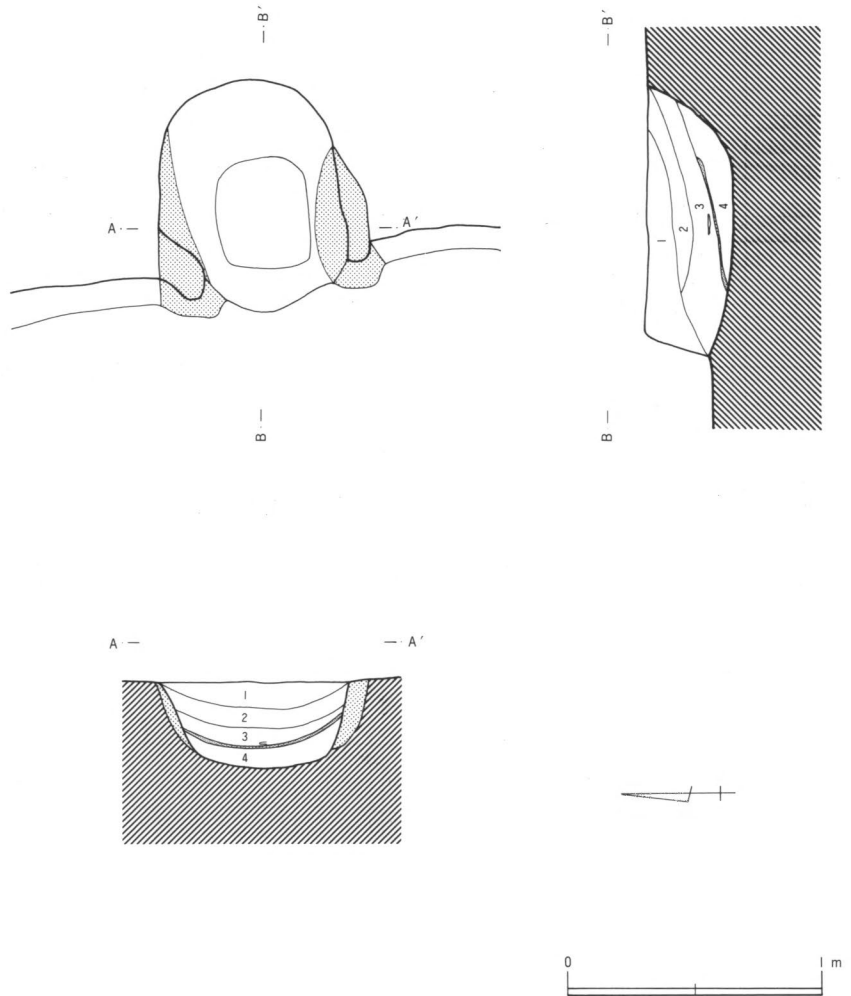
第38図 第24号住居址

第24号住居址土層説明

- 第1層 褐色土 ロームブロックを所々に、ローム粒子を斑点状に含む。しまりの弱い層。第5層より暗い。
- 第2層 暗褐色土 ローム粒子を所々に含む。しまりの強い層。
- 第3層 褐色土 ローム粒子やロームブロックを所々に含む。しまりの弱い不均質層。

第24号住居址カマド（第39図 図版17-2）

カマドは東壁中央より南寄りに構築されている。遺存状態はやや良好である。規模は全長95cm、幅85cmを測る。ソデはあまり顕著ではなかった。覆土中の第3層と第4層の間に薄い焼土の層があり、天井部の崩壊層である。この焼土層がかなり顕著であることから天井部が一気に崩壊したと考えられる。焚口部はやや広く、燃烧部の壁には粘土を貼って補強してある。また燃烧部下部には奥に傾きを持ったくぼみを有している。



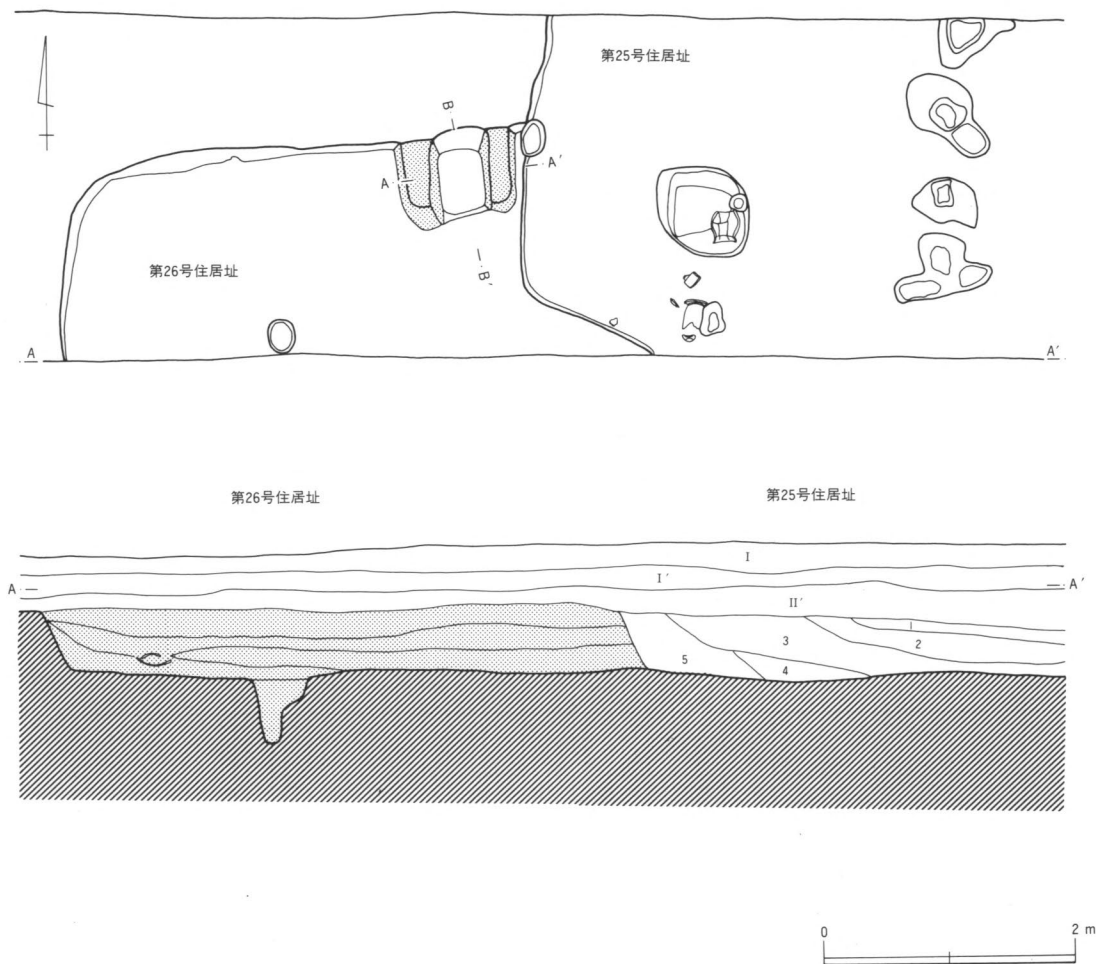
第39図 第24号住居址カマド

第24号住居址カマド土層説明

- 第1層 明褐色土 ローム粒やローム粒子が含まれる粘質層。
- 第2層 灰褐色土 少しのローム粒子を含む粘土層。
- 第3層 赤灰色土 焼土が斑点状に含まれ、この層下部には厚さ2～1.5cm程の焼土が層状になっている。これは天井部がそのまま落下したと考えられる。
- 第4層 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子を少し含む。

第25号住居址（第40図 図版18—1）

本址は調査区第IV区東側に第26号住居址を切って検出された。住居址のほとんどが調査区外に延びているため、南西隅付近のみの調査に留まった。規模等の詳細は不明であるが、住居址の平面形態は方形を呈すると推定される。床面は貼床が施されており、また南西隅に貯蔵穴が確認され、覆土中からは甕が出土している。出土遺物より奈良時代（真間式）の所産である。



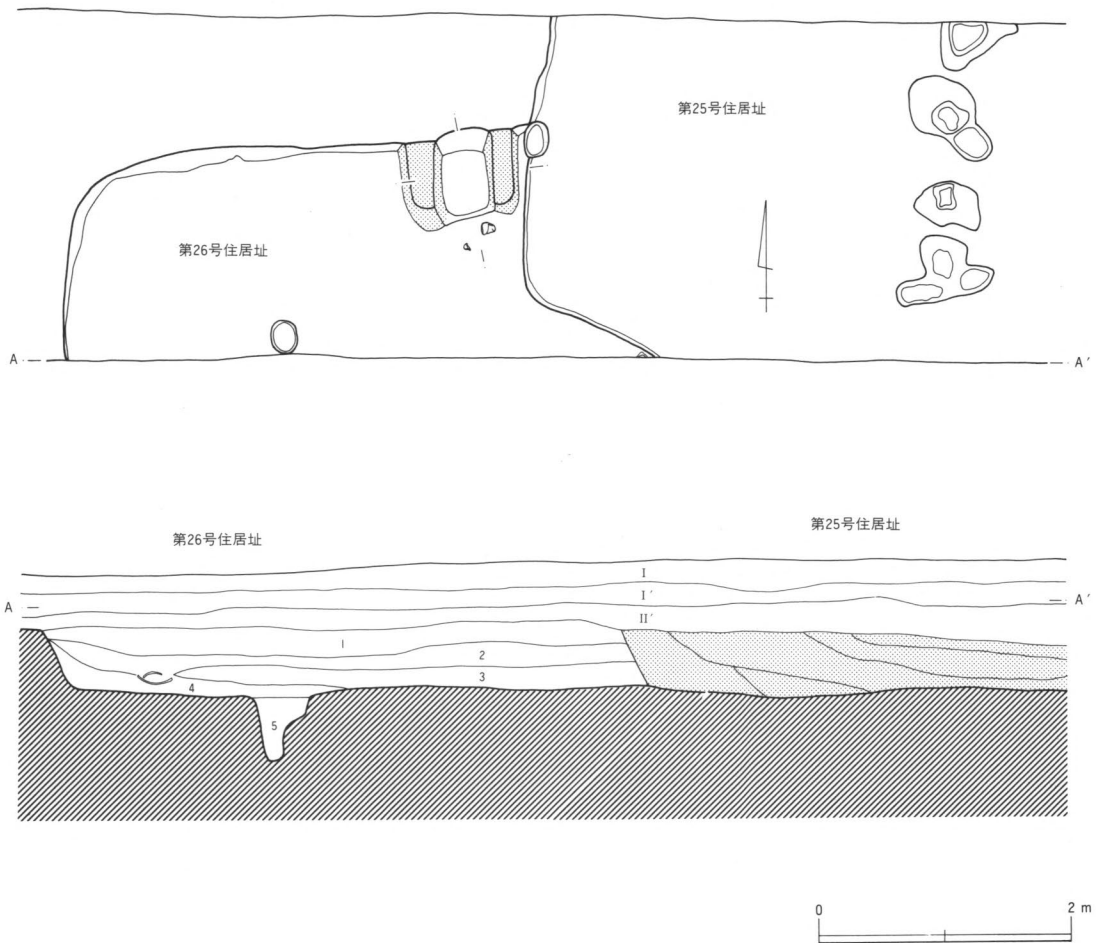
第40図 第25号住居址

第25号住居址土層説明

- 第1層 暗褐色土 ローム粒子少量を所々に含む。しまりの強い層。
- 第2層 褐色土 ローム粒・ローム粒子を多く含む。しまりの弱い層。
- 第3層 明褐色土 ローム粒子・ローム粒を非常に多く含む粘性の強い、しまりのない層。
- 第4層 暗褐色土 ローム粒子を所々に含む。粘性・しまりの弱い層。
- 第5層 明褐色土 ローム粒・ローム粒子を多く含む。しまりの強い層。

第26号住居址（第41図 図版18-1）

本址は調査区第IV区東側に東隅を第25号住居址に切られる形で検出された。南側は調査区外に延びており調査は全体の3割程度に留まった。住居址の平面形態は方形を呈すると推定され、規模は東西に6.1m、深さは確認面より50cmを測る。北壁にカマドが設置されている。その他の付帯施設については確認されなかった。出土遺物より古墳時代後期（鬼高II式）の所産である。



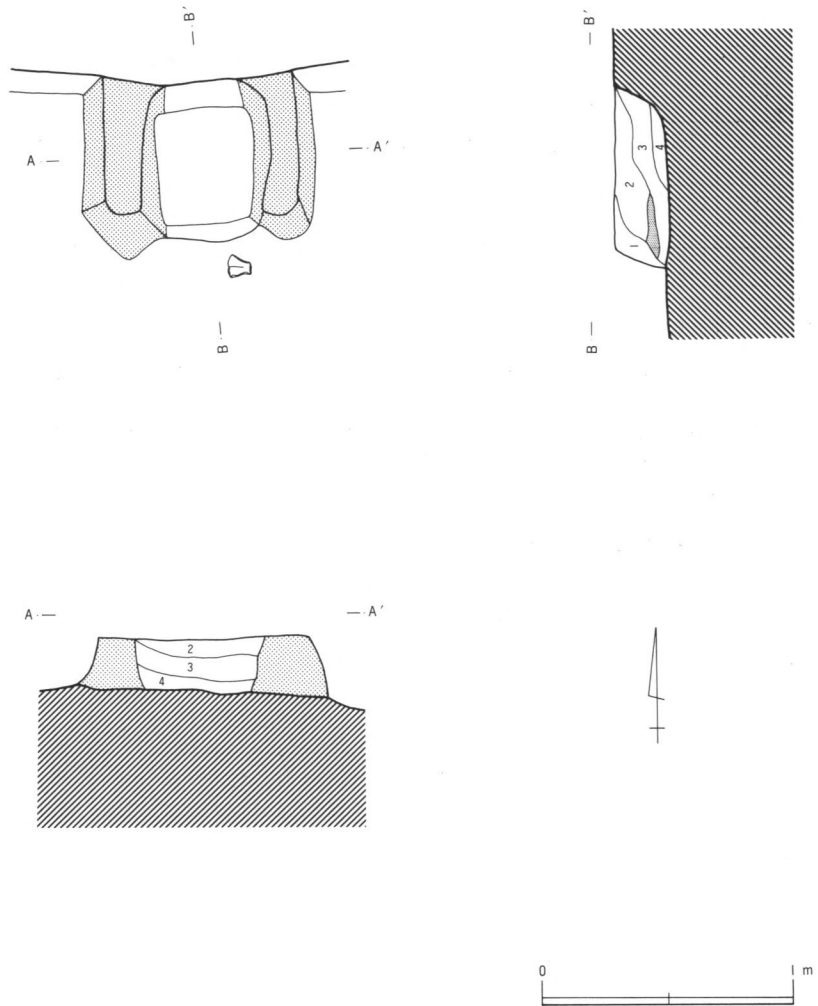
第41図 第26号住居址

第26号住居址土層説明

- 第1層 明褐色土 白色粒子・ローム粒子を非常に多く含む。しまりの強い層。
- 第2層 明褐色土 白色粒子・ローム粒子を非常に多く含む。しまりの強い層。
第1層よりやや暗く、しまりは弱い。
- 第3層 褐色土 ローム粒子を所々に含む。しまりの弱い層。
- 第4層 暗褐色土 第3層に似ているが、第3層よりやや暗い。
- 第5層 黒褐色土 ロームブロックが多く含まれている。

第26号住居址カマド (第42図 図版18-2)

カマドは北側壁ほぼ中央に設置されている。遺存状態はやや良好で、規模は全長65cm、幅90cm、ソデ長70cmを測る。焚口部はやや広く、燃烧部の内壁はよく焼けている。また燃烧部の下部は平坦であった。第1層は住居址の覆土にあたる。また、第2層である焼土が斑点状に含まれるしまりの強い粘土層に砂利を含んでいることからカマド構築の際、粘土に補強材として砂利を混ぜていたと推定される。



第42図 第26号住居址カマド

第26号住居址カマド土層説明

- 第1層 暗褐色土 ロームが汚点状に含まれる砂質・粘質層。
(焼土粒子・ローム粒子が所々に含まれる。)
- 第2層 淡茶褐色土 焼土が汚点状に含まれるしまりの強い粘土層。(砂利を含む。)
- 第3層 暗褐色土 砂利やローム粒子を含むしまりの弱い粘質層。
- 第4層 暗褐色土 ローム粒子を多く含む。(断面図最下層相当)

b. 土壌

第1土壌（第43図）

本址は、調査区第Ⅲ区西端に第11号住居址と重複して検出された。平面形態は円形を呈し、規模は直径約120cm、深さは確認面より約20cmを測る。底面は皿状を呈する。壁は東側はほぼ垂直に立ち上がるが、西側はゆるやかに立ち上がる。覆土は焼土粒を含むがA軽石は検出されていない。

第2土壌（第43図 図版21-1）

本址は、調査区第Ⅲ区ほぼ中央に検出された。平面形態は円形を呈している。規模は直径約122cm、深さは確認面より約15cmを測る。底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は旧表土と思われる黒褐色土であるがA軽石は認められなかった。

第3土壌（第43図 図版21-1）

本址は、調査区第Ⅲ区ほぼ中央付近、第2号土壌の南側から検出されたが、南隅は調査区外に延びている。平面形態は長方形を呈し、規模は長軸約260cm、短軸約90cm、深さは確認面より約30cmを測る。底面はほぼ平坦に近いがわずかに中心部に向けて傾斜を持っている。全体にやや北向きに傾いている。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北側の壁は南側の壁に比べると少しゆるやかな立ち上がりである。

第4土壌（第43図）

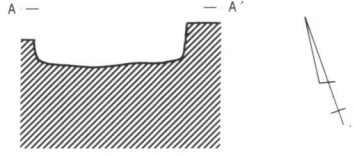
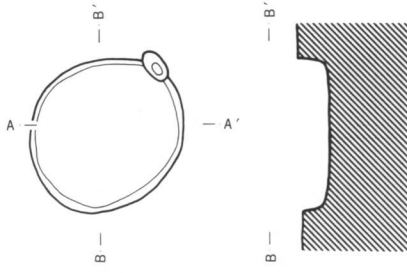
本址は、調査区第Ⅲ区東側、第3号土壌の東側から検出された。南側の一部が調査区外に延びている。平面形態は円形を呈すると推定され、規模は直径約100cm、深さは確認面より最大で約13cmを測る。底面は平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。

第5土壌（第43図）

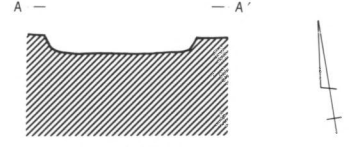
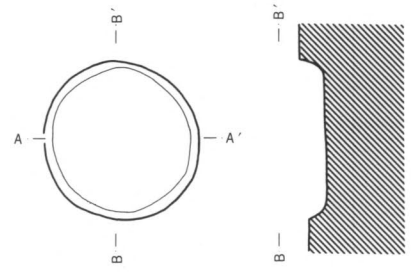
本址は、調査区第Ⅰ区北西側に検出された。平面形態はほぼ円形を呈するが、東側はやや直線的である。規模は東西に約90cm、南北に約100cmを測る。深さは確認面より約13cmを測る。底面はやや皿状を呈し、南側に多少傾斜している。壁は傾きをもって立ち上がる。

第6土壌（第43図）

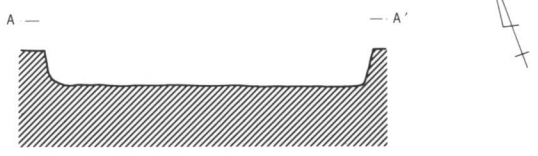
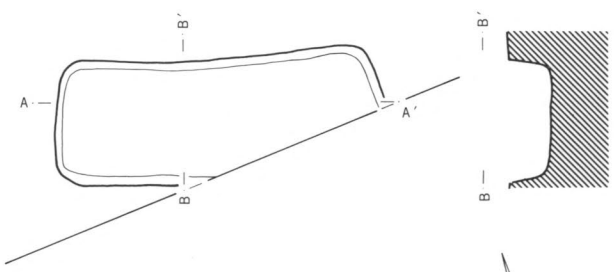
本址は、調査区第Ⅰ区東側、第1号溝の西側に検出された。平面形態は円形を呈しており、規模は直径約100cmを測る。北東側に段を有しており、底面は中央より北西によっている。深さは確認面より最大47cmを測り、中段までは約19cmを測る。底面は平坦であるが、中段の面は浅い皿状を呈している。壁は北東側はほぼ垂直に立ち上がるが、北西側はなだらかに立ち上がっている。中段面ほぼ中央より石が検出されている。



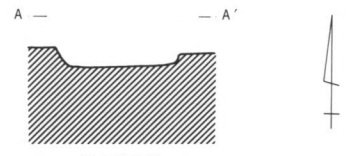
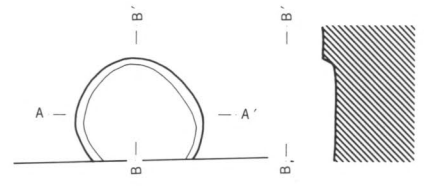
第1号土壤



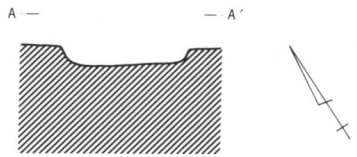
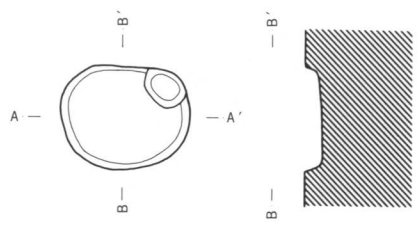
第2号土壤



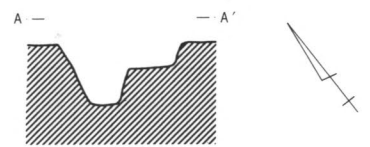
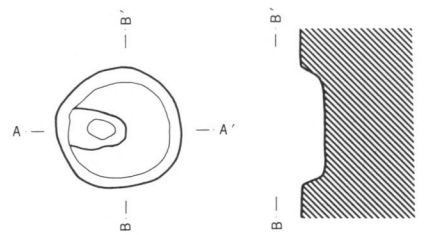
第3号土壤



第4号土壤



第5号土壤



第6号土壤



第43图 土壤(1)

第7土壌（第44図）

本址は、調査区第IV区西寄りに第14号住居址と重複して検出された。平面形態は円形を呈し、規模は直径約70cm、深さは確認面より約10cmを測る。底面は平坦で、壁は傾きを持って立ち上がる。

第8土壌（第44図）

本址は、調査区第IV区西よりに第17号住居址と重複して検出された。本址は浅いため北側半分は第17号住居址にかかり、検出されなかった。平面形態は円形を呈すると推定され、規模は最大約120cm、深さは確認面より約12cmを測る。底面はわずかに中央部が浅くなっており逆皿形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

第9土壌（第44図）

本址は、調査区第IV区中央より西寄り、第18号住居址の東側に検出された。平面形態は楕円形を呈し、規模は長軸約120cm、短軸約85cm、深さは確認面より約10cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、さらに2つの掘り込みがある。南側の掘り込みは平面形態が円形を呈し、直径30cm、深さ20cmを測る。底面は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。北側の掘り込みは平面形態はほぼ円形を呈し、直径20cm、深さ20cmを測る。底面はU字形を呈している。

第10土壌（第44図）

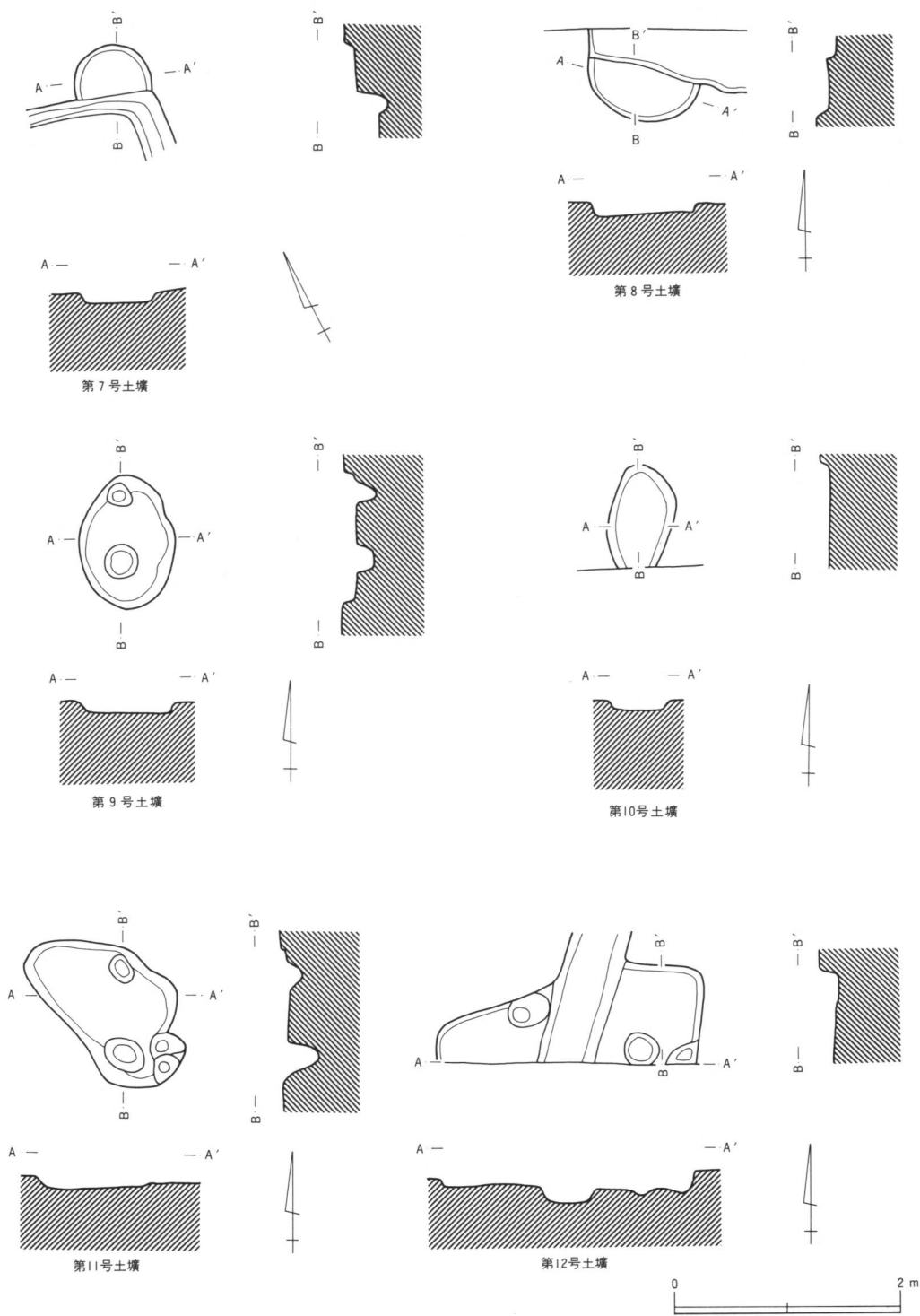
本址は、調査区第IV区中央よりやや西側に検出されており、南側の一部が調査区外へ延びている。平面形態はやや不整の長楕円を呈しており、規模は南北に90cm以上、東西に60cmを測る。深さは確認面より約10cmを測る。底面は平坦であり、壁はゆるやかに立ち上がる。

第11土壌（第44図）

本址は、調査区第IV区中央よりやや西側、第9号土壌の北東側に検出された。平面形態は不整形を呈しており、4つの浅い掘り込みと重複している。規模は東西に最大約130cm、南北に最大約120cmを測る。深さは確認面より約12cmを測る。底面は平坦であるが、西側に向いわずかだが傾斜している。壁はゆるやかに立ち上がる。

第12土壌（第44図）

本址は、調査区第IV区中央やや西寄り、第11号土壌の東側に検出されたが、南側半分は調査区外に延びている。さらに第5号溝および浅い3つの掘り込みと重複している。平面形態は不整形を呈すると推定される。規模は東西に最大230cmを測り、深さは確認面より最大18cmを測る。底部は平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第44图 土壤(2)

c. 溝状遺構

第1号溝（第45図）

本址は調査区第Ⅰ区中央やや西寄りに検出された。方向は南北に延びており、規模は最大幅が約80cm、深さが平均約30cmを測る。底の形態は平坦であり、壁は角度を持って立ち上がる。覆土からA軽石は検出されていない。

第2号溝（第45図 図版19—2）

本址は調査区第Ⅰ区中央やや西寄りに、第1号溝の東側に平行して検出された。方向は南北に延びており、規模は最大幅約100cm、深さが平均約10cmを測る。底の形態は皿状を呈しており、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土からA軽石は検出されていない。

第3a号溝（第46図 図版19—1）

本址は調査区第Ⅰ区北東端に第1号住居趾の西側と第3b号溝西側を切って検出された。方向は東北東から西南西に延びており、第3b号溝とはほぼ平行している。規模は最大幅約150cm、深さが確認面より約40cmを測る。底の形態は平坦であり、壁は角度を持って立ち上がる。溝の覆土はA軽石や砂利を含むことから、近現代の用排水堀と考えられる。

第3b号溝（第46図 図版19—1）

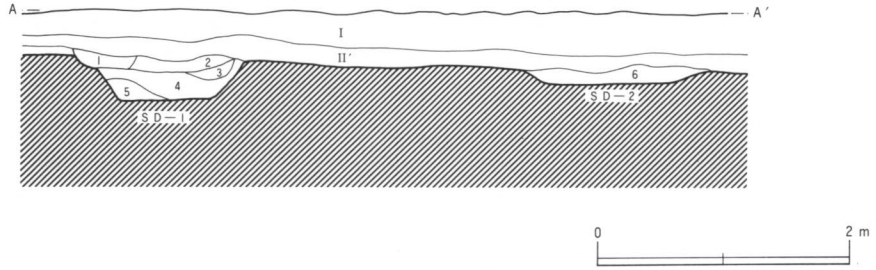
本址は調査区第Ⅰ区北東壁に第1号住居趾西側を切って検出された。さらに本址は西側の一部を第3a号溝に切られている。方向は東北東から西南西に延びており、第3a号溝とはほぼ平行している。規模は最大幅約110cm、深さは確認面より約70cmを測る。底の形態はU字形を呈しており壁は急に立ち上がる。溝の覆土からA軽石は検出されていない。第5層中には直径10cmから15cmの河原石が多く含まれていたことから、この溝は、本址より東へ110m付近にあたる金佐奈遺跡C地点（1992年調査）で検出されている河原石を使用した葺石状遺構と関係がある溝である可能性が考えられる。

第4号溝（第47図 図版20—1）

本址は調査区第Ⅰ区西側寄りに第4a号住居趾の中央付近を切って検出された。方向は第1号溝、第2号溝とほぼ同じ南北に延びており、規模は最大幅60cm、深さが平均約60cmを測る。底の形態は皿状を呈しており、壁はゆるやかに立ち上がる。覆土からB軽石を確認している。

第5号溝

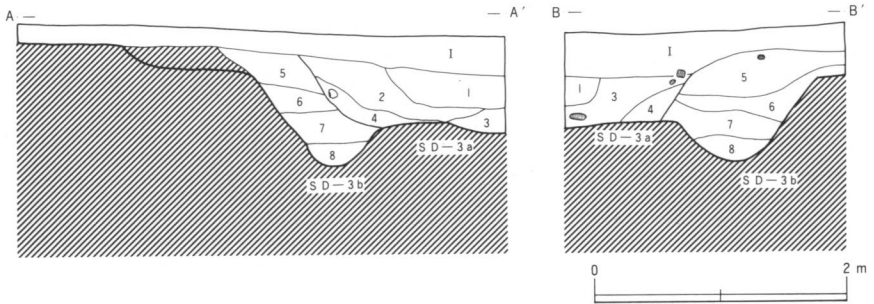
本址は調査区第Ⅳ区中央から検出された。方向は南北であるが、若干東に傾いて延びている。規模は最大幅50cm、深さが平均50cmを測る。底の形態は平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。覆土からA軽石を含むことから近現代の所産である。



第45図 第1・2号溝土層断面図

第1・2号溝土層説明

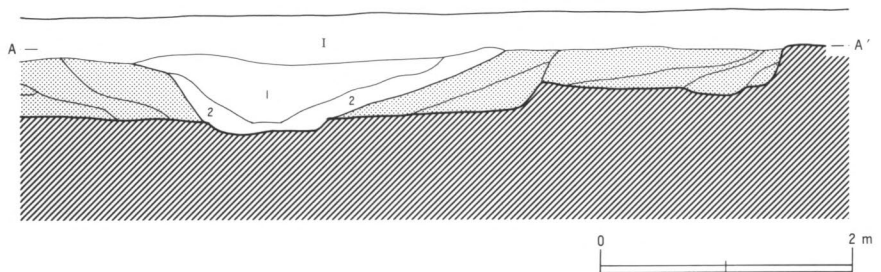
- | | | | |
|----------|------------------------------|----------|----------------------|
| 第1層 黒褐色土 | 旧表にわずかにローム粒子を含む。(As-A)は含まない。 | 第4層 暗褐色土 | ロームを斑点状に含みローム粒子を多く含む |
| 第2層 暗褐色土 | 旧表にローム粒子を含む。第1層より明るい。 | 第5層 褐色土 | ロームを斑点状に多く含む。 |
| 第3層 黒褐色土 | ロームをわずかに含む。 | 第6層 明褐色土 | ローム粒子、ロームブロックを多く含む。 |



第46図 第3a・b号溝土層断面図

第3a・b号溝土層説明

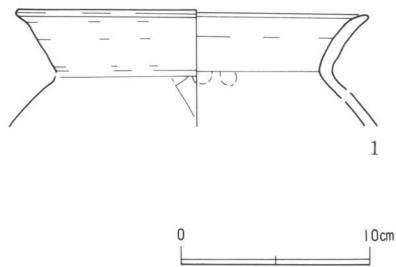
- | | | | |
|----------|--|----------|---|
| 第1層 灰褐色土 | (As-A)を多く含む。粘性の強い層。 | 第5層 褐色土 | わずかに砂利、ロームブロックを含む。粘質がない。10~15cmの河原石を多く含む。 |
| 第2層 褐色土 | (As-A)、(As-B)を含む。砂利を多く含む粘質層。焼土がわずかにみられる。 | 第6層 明褐色土 | ロームと粘土が斑に含まれる。粘性のある層。不均質層 |
| 第3層 褐色土 | 砂利を多く含む。 | 第7層 明褐色土 | ロームと粘土が均質に混じった層。 |
| 第4層 暗褐色土 | 砂利をわずかに含む。ローム粒子をわずかに含む。 | 第8層 暗褐色土 | 黒色土と粘土が均質に混じった粘質層。 |



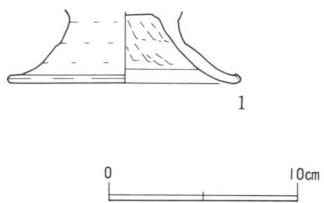
第47図 第4号溝土層断面図

第4号溝土層説明

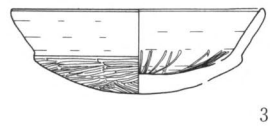
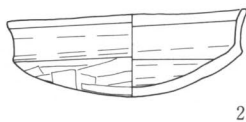
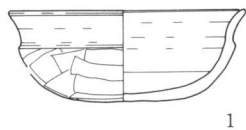
- | | |
|-----------|------------------------------------|
| 第1層 暗灰褐色土 | 焼土粒子、ローム粒子、砂利を多く含む均質層。(As-B)粒子を含む。 |
| 第2層 暗褐色土 | ローム粒子を非常に多く含む均質土層。 |



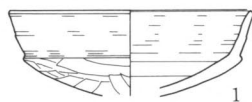
第48図 第1号住居址出土遺物(表-1)



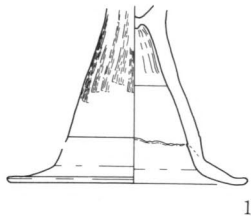
第49図 第3号住居址出土遺物(表-2)



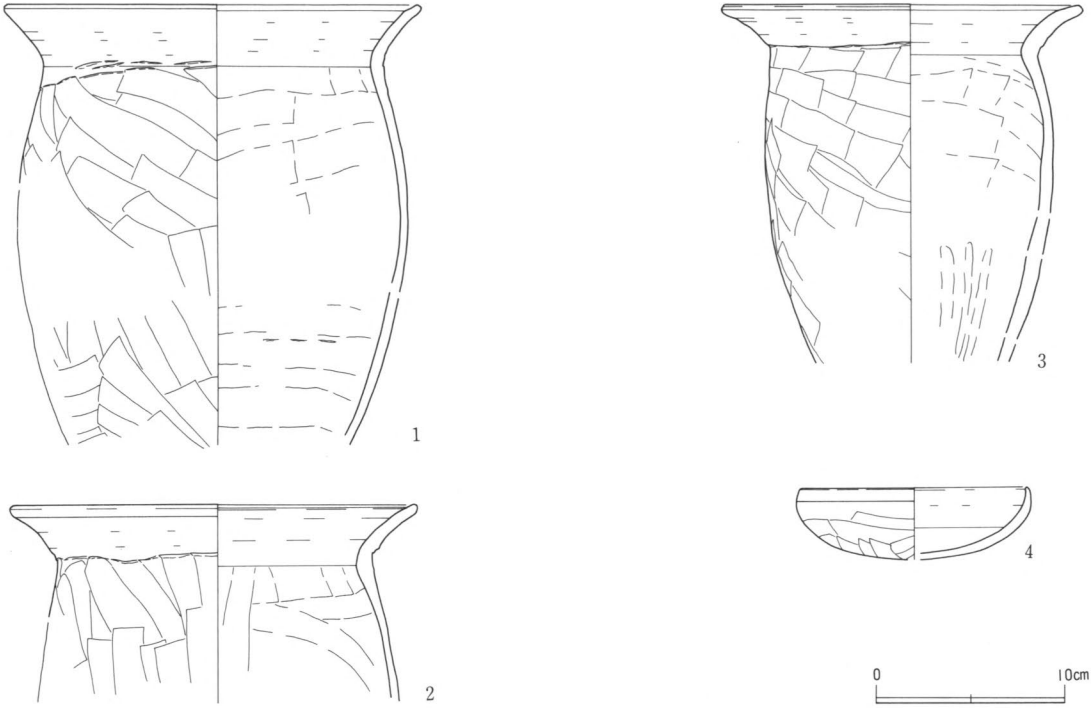
第50図 第4号住居址出土遺物(表-3)



第51図 第7a号住居址出土遺物(表-4)



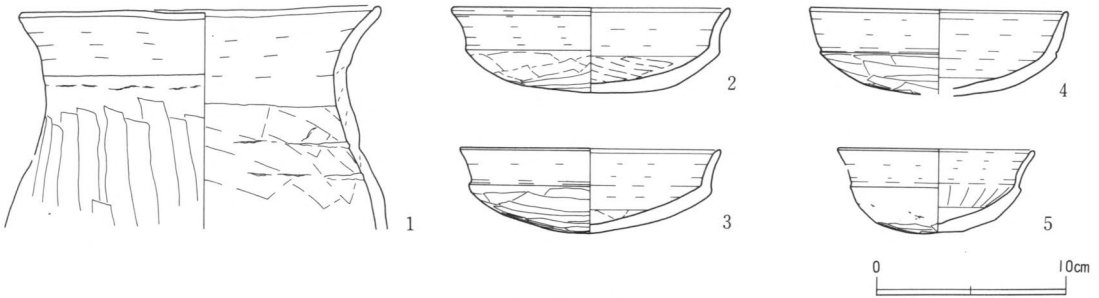
第52図 第8号住居址出土遺物(表-5)



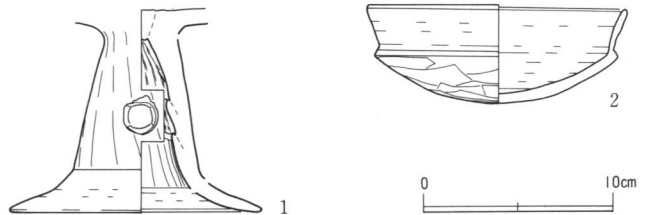
第53図 第9号住居址出土遺物（表一6）



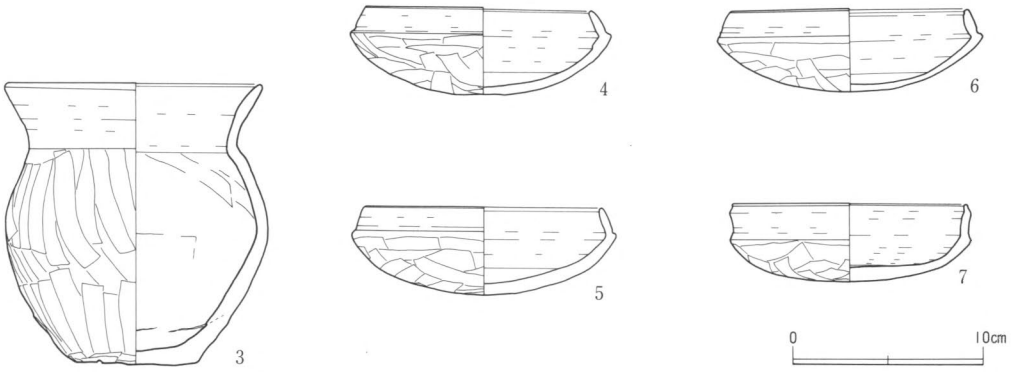
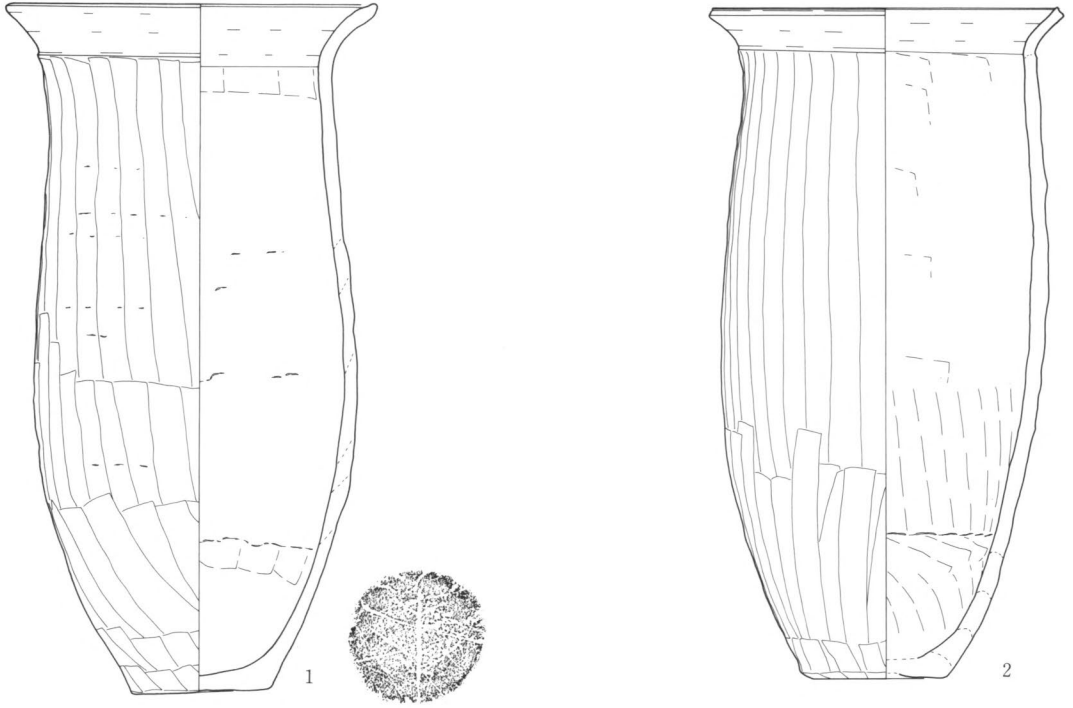
第54図 第12号住居址出土遺物（表一7）



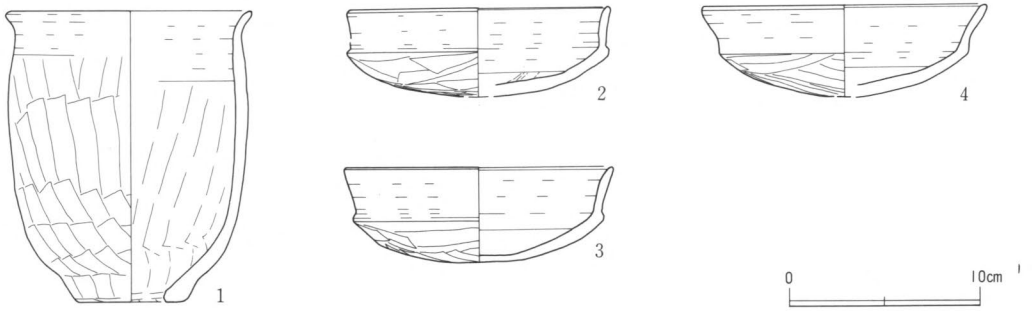
第55図 第13号住居址出土遺物（表一8）



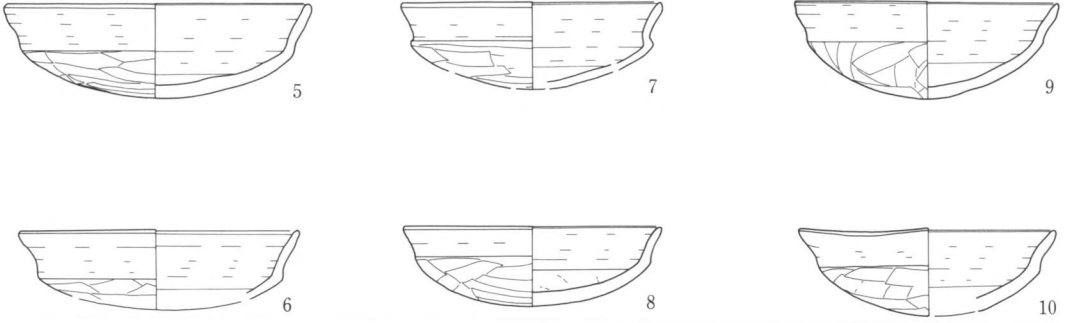
第56図 第14号住居址出土遺物（表一9）



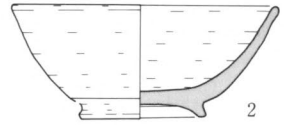
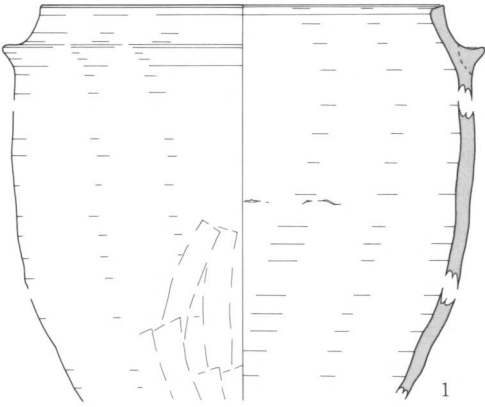
第57图 第15号住居址出土遺物 (表-10)



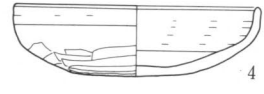
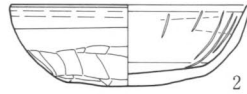
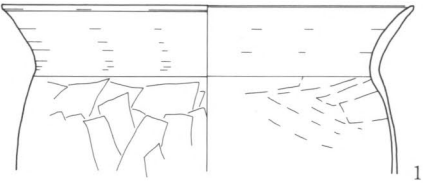
第58图 第17号住居址出土遺物(1) (表-11)



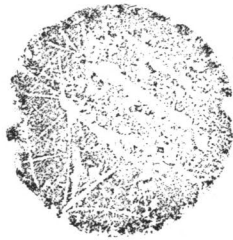
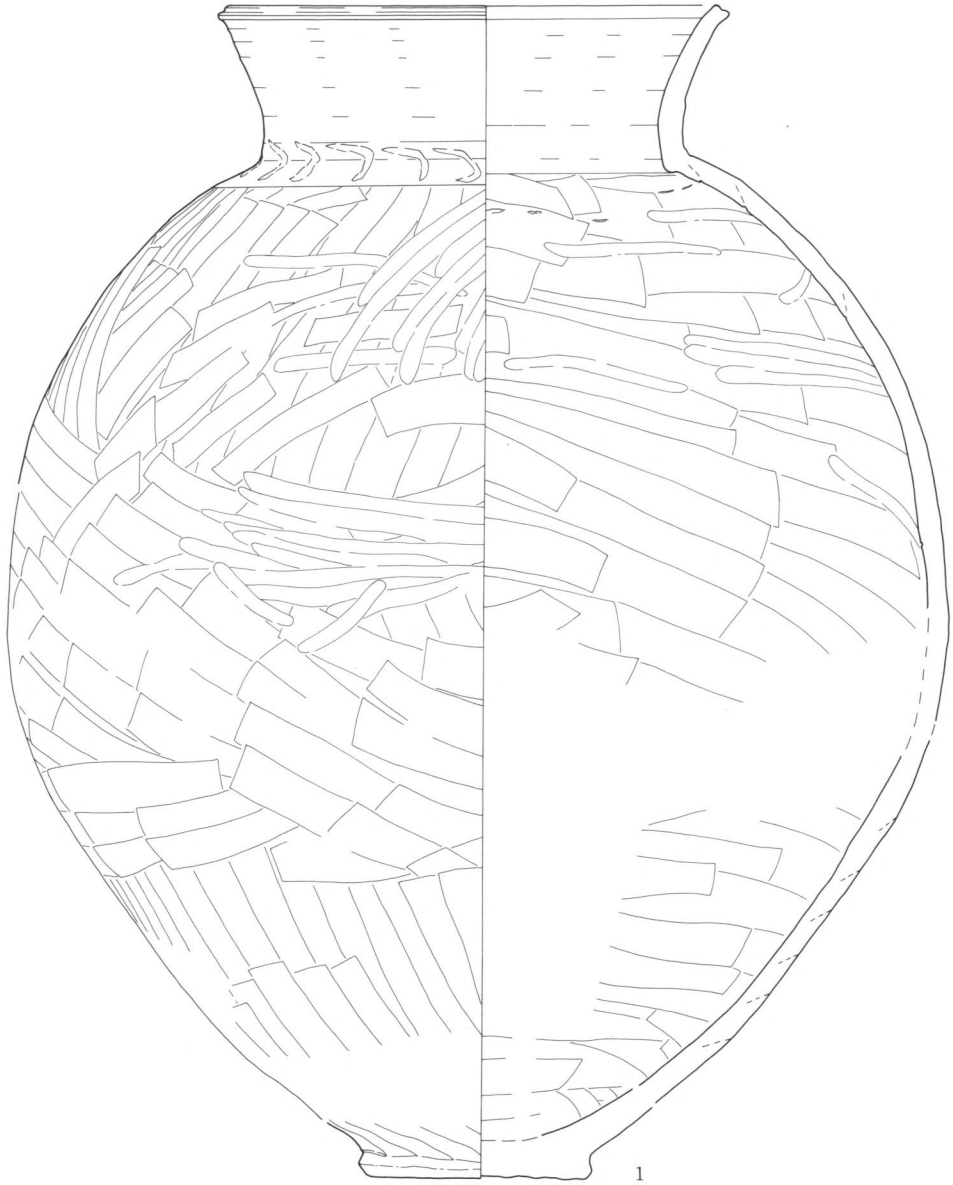
第59図 第17号住居址出土遺物(2) (表-11)



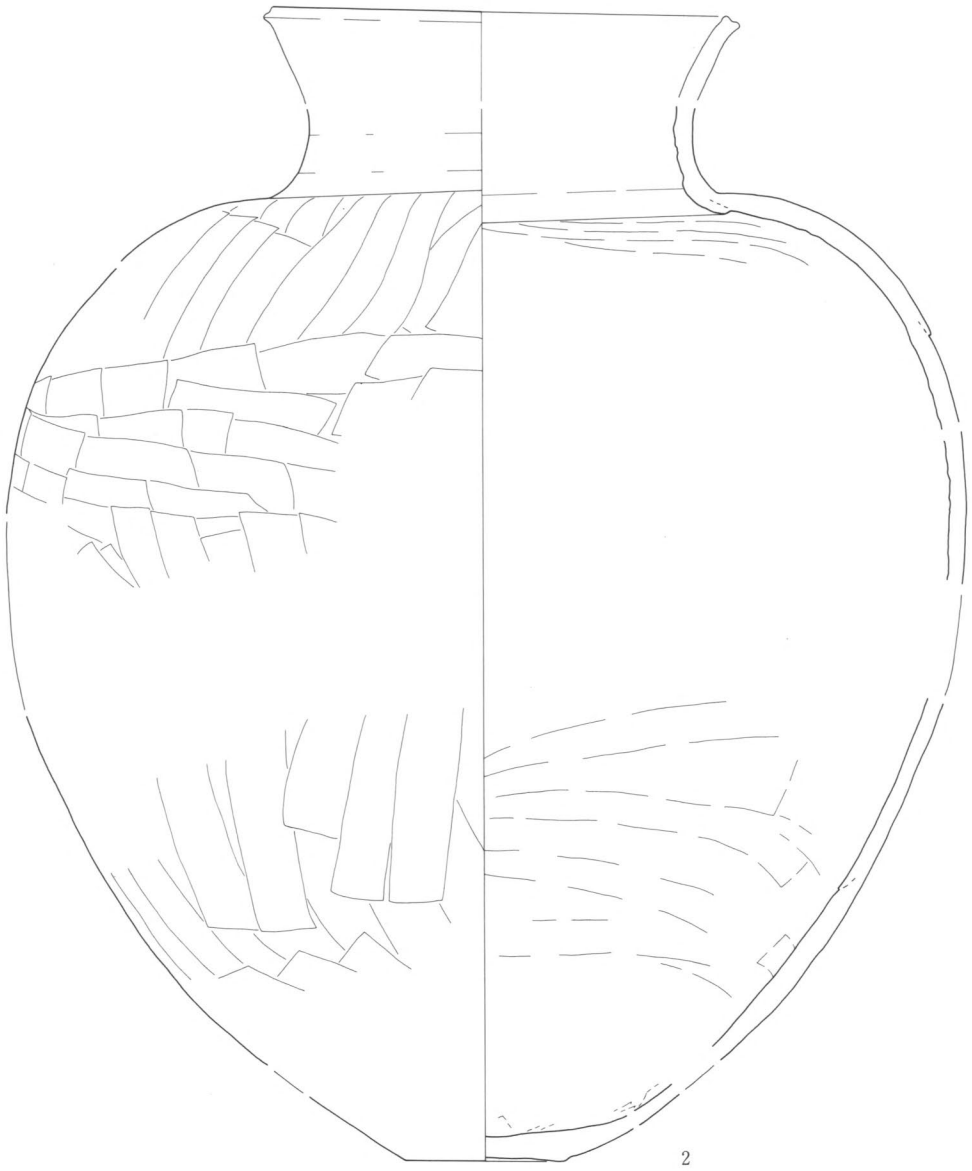
第60図 第20号住居址出土遺物 (表-12)



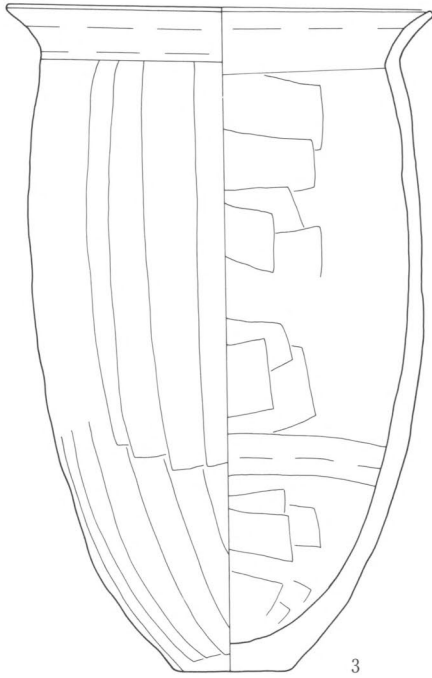
第61図 第21号住居址出土遺物 (表-13)



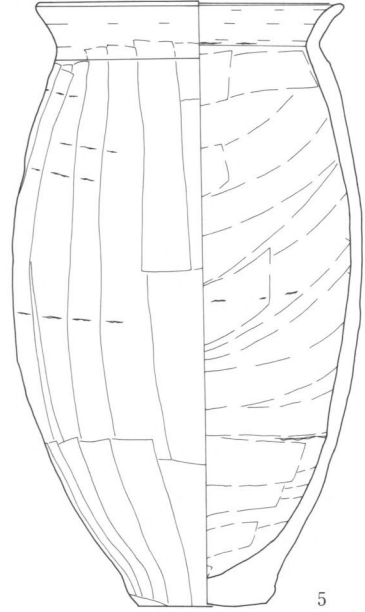
第62図 第23号住居址出土遺物(1) (表-14)



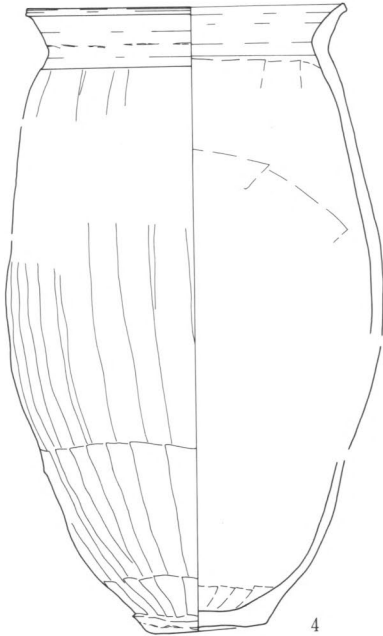
第63図 第23号住居址出土遺物(2) (表-14)



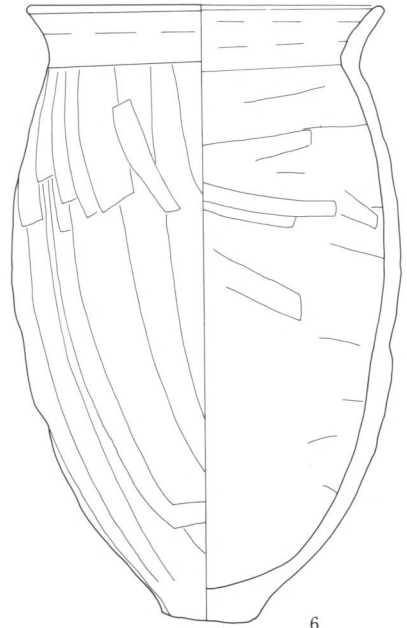
3



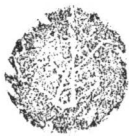
5



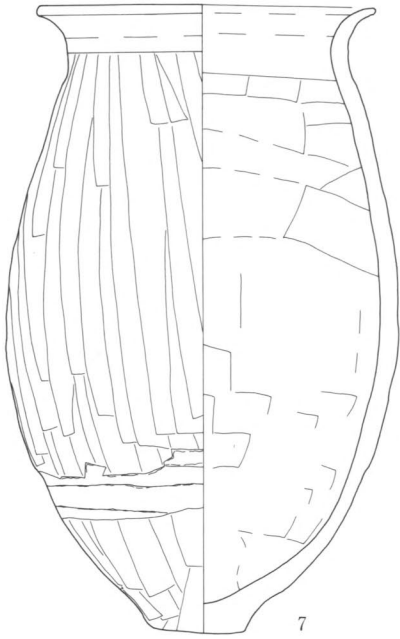
4



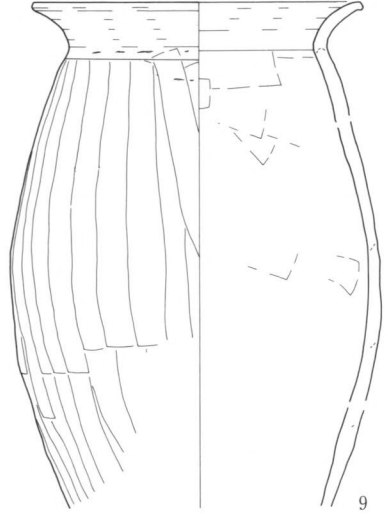
6



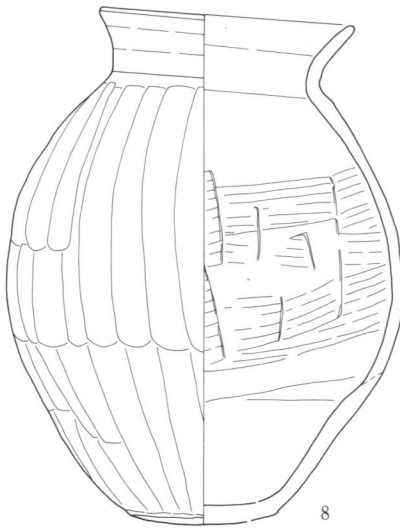
第64图 第23号住居址出土遺物(3) (表-14)



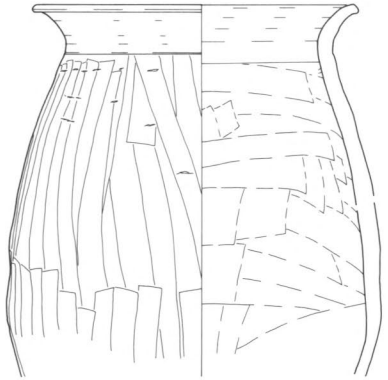
7



9



8



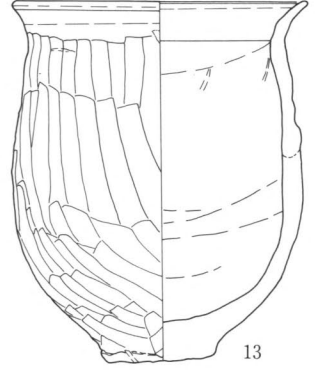
10



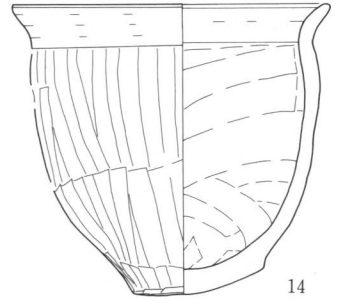
第65図 第23号住居址出土遺物(4) (表-14)



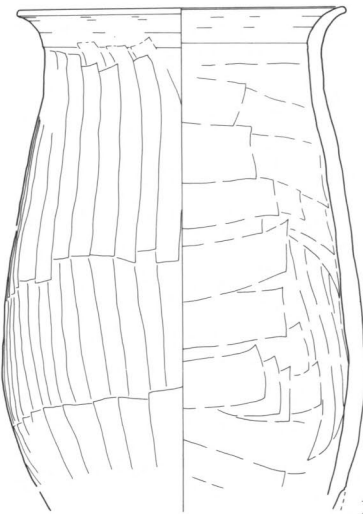
11



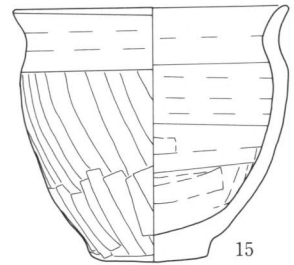
13



14



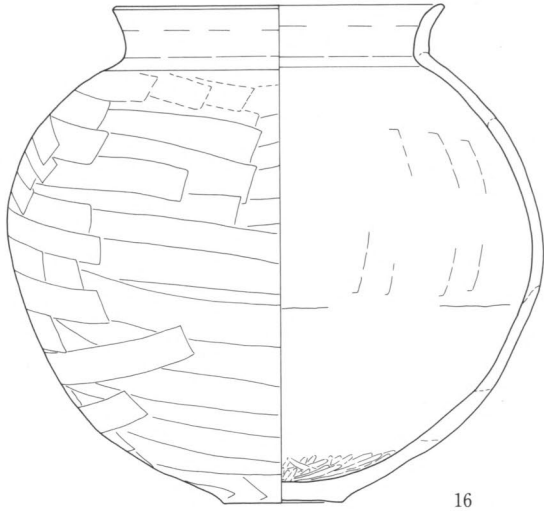
12



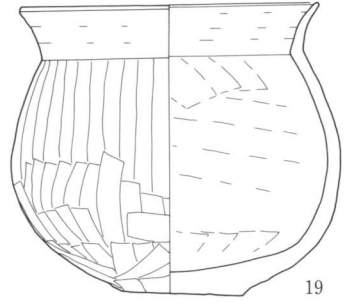
15



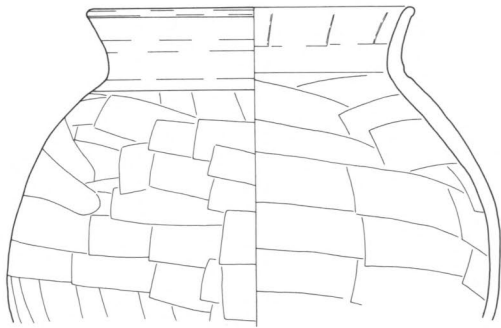
第66図 第23号住居址出土遺物(5) (表-14)



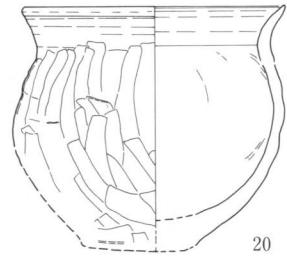
16



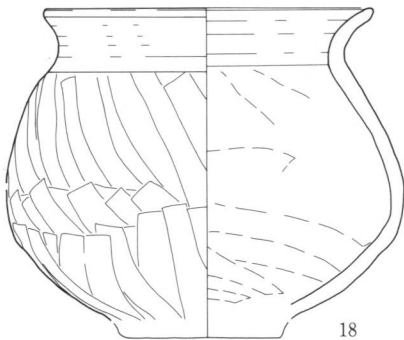
19



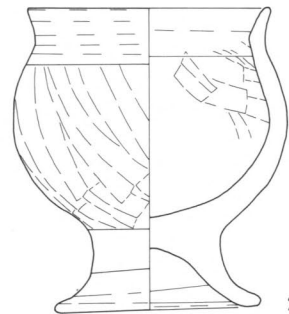
17



20



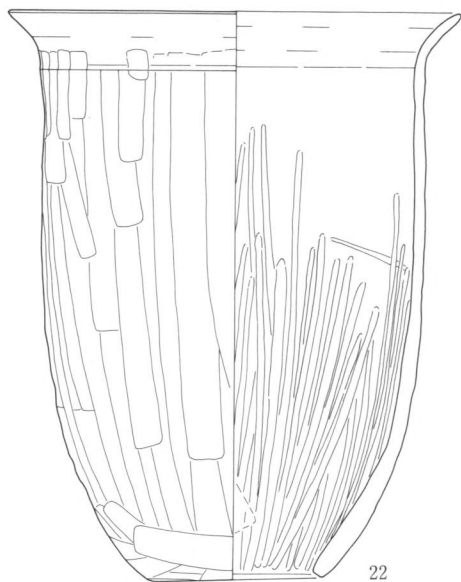
18



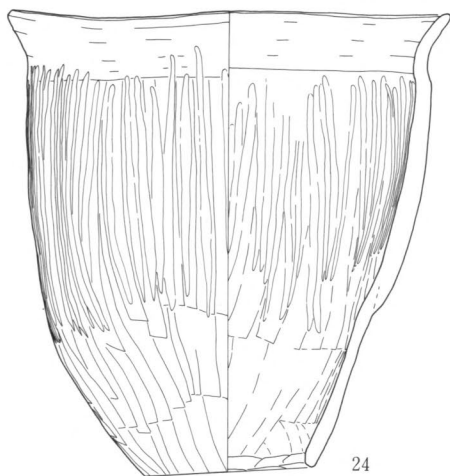
21



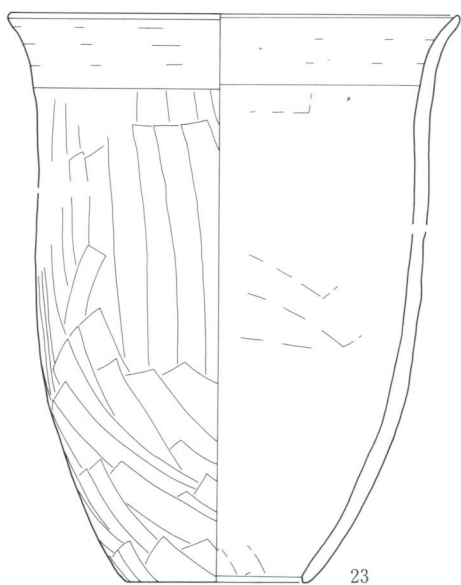
第67图 第23号住居址出土遺物(6) (表-14)



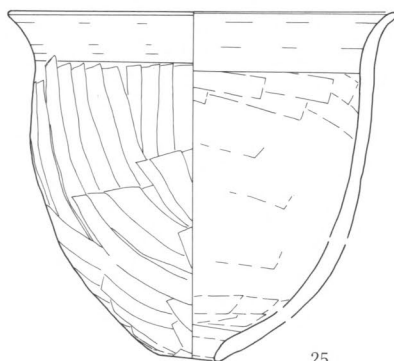
22



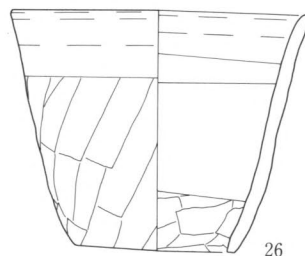
24



23



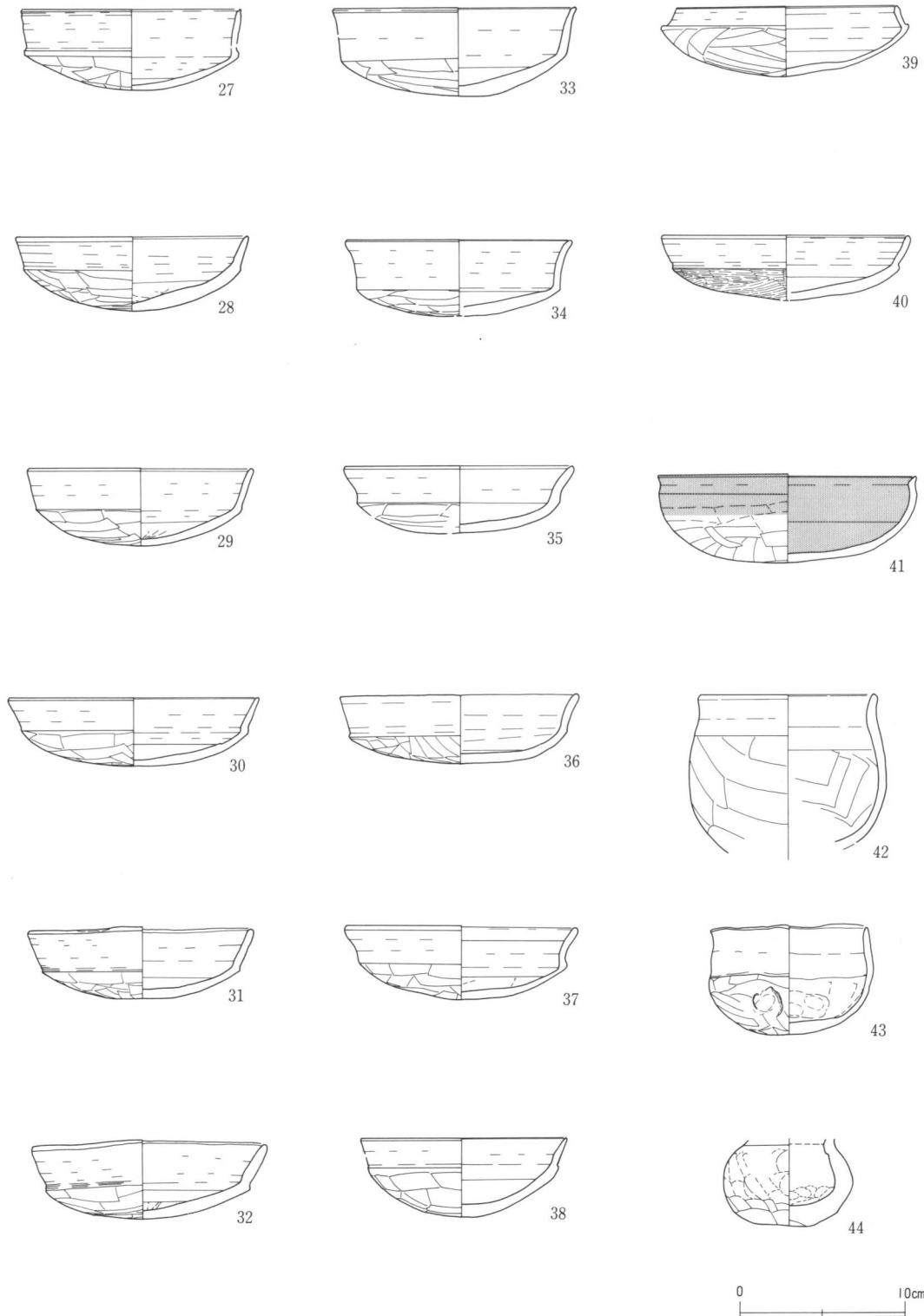
25



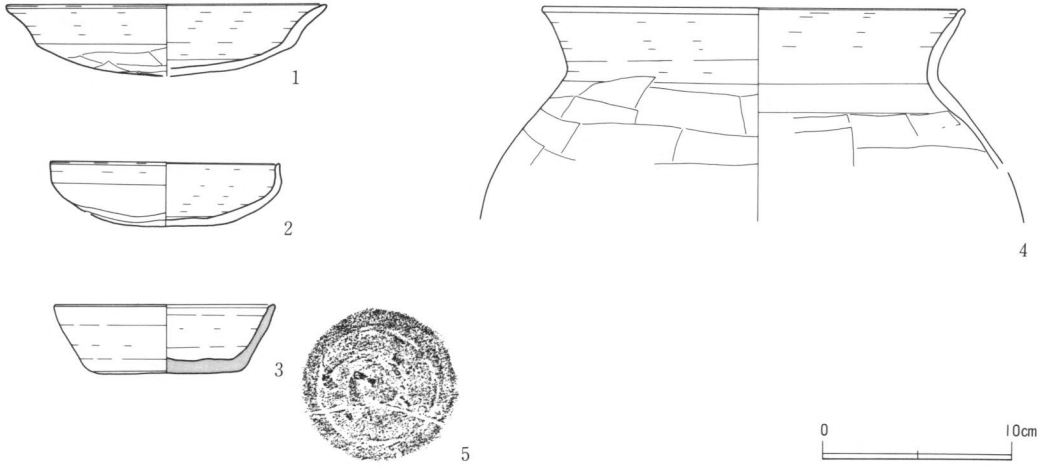
26



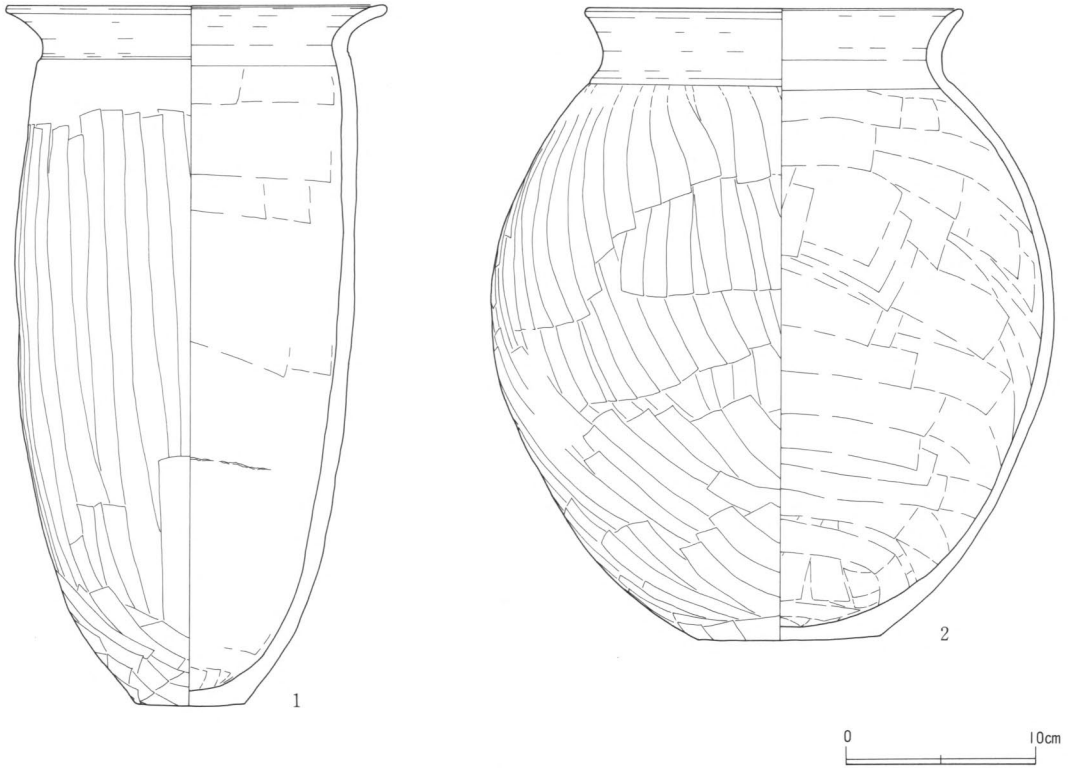
第68図 第23号住居址出土遺物(7)(表-14)



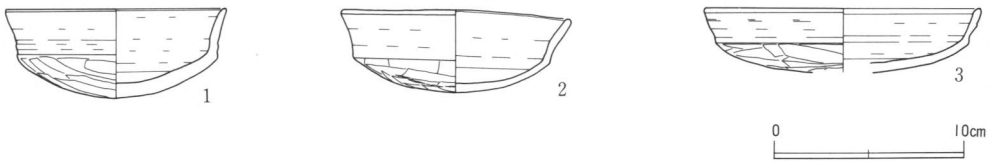
第69图 第23号住居址出土遺物(8) (表-14)



第70図 第24号住居址出土遺物 (表-15)



第71図 第25号住居址出土遺物 (表-16)



第72図 第26号住居址出土遺物 (表-17)

表一1 第1号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	甕	ko (18.8) t — h <6.3>	口端部は丸い。 口唇部は大きく外反する。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口唇部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデのちヨコナデ、胴部上位は指頭によるナデ、胴部はナデか。	㊦㊧ 橙褐色 褐色	残 10% 焼 普 片、石、砂粒 ⊕ 角、Fe ㊨

表一2 第3号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	台付甕	ko — t 12.4 h <3.8>	台部は中位でわずかな段をもち下位で大きく開く。 端部は上方に反り返る。	外側は台部は木口状工具によるヨコナデのちヨコナデ、下端部はヨコナデ。 内側は底部は木口状工具によるヨコナデ、台部は木口状工具による横位のナデ、裾部から下端部はヨコナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 30% 焼 良 片、石、砂粒 ⊕ 角 ㊨

表一3 第4号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	坏	ko (12.6) h 4.8	口端部は丸い。 口辺部はゆるやかに外反する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上半は木口状工具によるヨコナデのちヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 淡褐色	残 40% 焼 良 片、石、雲 ⊕ 角 ㊨
2	坏	ko 12.5 h 4.4	口端部は丸みをもちわずかに外側に肥厚する。 口辺部は外反しながら立ち上がる。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部は工具によるナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 90% 焼 良 雲 ⊕ 片、白粒 Fe、Mn ㊨
3	坏	ko (13.4) h 4.5	口端部は丸い。 口唇部はやや内傾する。 口辺部はわずかに内湾する。 器内面底部に放射状のミガキを施す。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリのち丁寧なミガキ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部中位は木口状工具によるヨコナデ、底部下位はナデ、底部は放射状のミガキを施す。	㊦㊧ 暗褐色 褐色	残 40% 焼 良 片、砂粒 ㊨

表一4 第7a号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	坏	ko (13.0) h <4.1>	口端部はやや尖り気味である。 口辺部中位に凹線を巡らせ段をつくりだしている。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位	㊦㊧ 暗褐色	残 40% 焼 良 片、砂粒 ㊨

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎土・備考
				は木口状工具によるヨコナデ、底部中位は木口状工具によるヨコナデのちナデ、底部下位はナデ。		角、Fe ㊸

表一五 第8号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎土・備考
1	高 坏	ko — t (12.8) h <9.4>	脚部下位はやや張る。 脚裾部は大きく開き、下端部は反り返る。	外側は脚部上半は木口状工具によるタテナデのちナデ、中位はナデ、下位から裾部はヨコナデ。 内側は脚部は工具によるヨコナデ、裾部はヨコナデ。	㊸㊸ 橙褐色	残 40% 焼 良 片、石、砂粒 角 ㊸ 角 ㊸

表一六 第9号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎土・備考
1	甕	ko (22.2) t — h <23.2>	口端部は丸い。 口唇部はわずかに内湾する。 口縁部は直線的に開く。 肩部がやや張る。 器外面胴部下半にスス付着。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口唇部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナデ。	㊸ 暗橙褐色 暗褐色 ㊸ 暗橙褐色 橙褐色	残 20% 焼 普 砂粒 ㊸ 片、石、Fe ㊸
2	甕	ko (21.6) t — h <10.5>	口端部は尖り気味である。 器内面口唇部は凹線が巡る。 口縁部は大きく外反する。	外側は口唇部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊸㊸ 暗橙褐色	残 20% 焼 普 片、石、砂粒 Fe ㊸ 角 ㊸
3	甕	ko 19.2 t — h <19.1>	口端部は丸い。 口唇部はわずかに内傾し立ち上がり気味である。 胴部上位が張る。 カマド構築材として2次的に使用されたものである。	外側は口端部は指頭によるヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口唇部は指頭によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナナメナデのち丁寧なナデ。胴部下位に指頭によるナデの痕跡がわずかに観察される。	㊸㊸ 淡褐色	残 70% 焼 普 片、石、砂粒 角、雲 ㊸
4	坏	ko (12.1) h 3.9	口端部は丸い。 口辺部は内湾しながら立ち上がる。	外側は口辺部はヨコナデ、体部はナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口辺部から体部はヨコナデ、底部はナデ。	㊸ 褐色 暗褐色 ㊸ 褐色	残 40% 焼 良 片、石、砂粒 角 ㊸

表一7 第12号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	坏	ko (15.6) h <4.7)	口端部はやや尖り気味である。 口唇部は大きく開く。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部中位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 暗褐色	残 20% 焼 良 片、石、砂粒 Fe ㊨

表一8 第13号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	甕	ko (19.4) t — h <11.4)	口端部は丸い。 口唇部は内側に肥厚し立ち上がる。 器内外面に輪積痕顕著。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、頸部はナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口唇部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナメナデのちナデ。	㊦㊧ 淡暗褐色	残 20% 焼 良 雲 ㊩ 片、石、Fe、Mn ㊨
2	坏	ko 14.9 h 4.5	口端部は丸い。 口唇部は外側に肥厚する。	外側は口唇部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部上半はヘラケズリのち丁寧なナデ、底部下半はヘラケズリ。 内側は口唇部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部は木口状工具によるナデのち丁寧なナデ。	㊦㊧ 褐色 暗橙褐色	残 60% 焼 良 砂粒 ㊩ 片、石、雲 ㊨
3	坏	ko 13.9 h 4.5	口端部はやや尖り気味に丸い。 口唇部はわずかに内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口唇部はヨコナデ、口辺部から底部中位は木口状工具によるヨコナデ、底部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊦㊧ 暗橙褐色	残 80% 焼 良 片、石、砂粒 Fe、雲 ㊩
4	坏	ko (13.7) h <4.5)	口端部は丸い。 口唇部器内面はわずかに窪む。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部中位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 30% 焼 普 片、石、砂粒 雲 ㊩ 角、Fe ㊨
5	坏	ko (10.5) h 5.0	口端部は丸い。 口唇部はわずかに内湾する。 底部器外面に黒斑あり。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部上半はナデ、底部下位はヘラケズリ。 内側は口辺部から底部中位は木口状工具によるヨコナデ、底部下位はナデ。	㊦㊧ 橙褐色 淡褐色	残 80% 焼 良 片、石、砂粒 雲、Mn ㊨

表一9 第14号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	高坏	ko — t (13.5) h <10.7)	脚体部はわずかに張りをもつ。 脚裾部は大きく開く。 脚体部中位にヘラ状工具により	外側は坏底部はナデ、脚体部はヘラケズリのちナデ、脚裾部はヨコナデ。 内側は坏底部はナデ、脚体部下位はヘラケズリ、	㊦㊧ 暗橙褐色	残 40% 焼 普 片、石、砂粒

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎土・備考
2	坏	ko 13.8	一孔を穿つ。 脚裾部下端は丸い。 脚体部器内面上位に絞り込み痕あり。	脚裾部は木口状工具によるヨコナデ、脚裾部下端はヨコナデ。	㊸ 橙褐色 淡褐色 ㊹ 淡褐色	Fe ㊺ 残 完 焼 良 片、石、砂粒 チャ ㊻ 雲、Fe ㊼
		h 5.2	口端部は丸い。 内側にわずかに肥厚する。 口辺部上位はやや内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、口辺部と底部の境目は木口状工具によるヨコナデのちヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部中位は木口状工具によるヨコナデ、底部下位はナデ。		

表—10 第15号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎土・備考
1	甕	ko 19.8	口端部は丸い。	外側は口端部は指頭によるヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口唇部は木口状工具によるヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、頸部は木口状工具によるヨコナデのちヨコナデ、胴部は丁寧なナデ、胴部下位は木口状工具によるヨコナデのちナデ、底部はナデ。	㊸ 橙褐色 淡暗褐色 ㊹ 橙褐色	残 80% 焼 普 片、砂粒 ㊻ 雲 ㊼
		t 7.8	口唇部内側はわずかに窪む。			
		h 36.6	胴部下位に最大径をもつ。 最大径やや下にカマドのものと思われる被熱した粘土が一部付着しそれより下位にスス付着。 底部に木葉痕あり。 カマド内出土。			
2	甕	ko 18.8	口端部は外側に凹線を巡らしている。	外側は口端部はヨコナデ、口端部外面は工具により凹線を巡らしている。口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部上位は指頭によるヨコナデのち木口状工具によるヨコナデ、口縁部下位は木口状工具によるヨコナデ、胴部上半は木口状工具によるヨコナデのち丁寧なナデ、胴部下半上位は木口状工具によるタテナデのち丁寧なナデ、胴部下半下位は木口状工具によるナメナデのちナデ。	㊸ 橙褐色 淡橙褐色 ㊹ 橙褐色	残 90% 焼 普 砂粒 ㊻ 片、石、雲 ㊼
		t 7.8	口縁部は大きく開く。			
		h 35.6	胴部中位やや下に最大径をもつ。 胴部中位やや下から下位にスス付着。			
3	甕	ko 13.7	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部及び底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部上位は木口状工具によるナメナデのちナデ、胴部中位は木口状工具によるヨコナデのち丁寧なナデ、底部はナデ。	㊸㊹ 橙褐色 褐色	残 完 焼 良 片、石、砂粒 ㊻ Fe、Mn ㊼
		t 6.5	口縁部は大きく開く。			
		h 14.9	頸部はやや強くしまる。 胴部中位はやや上に最大径をもつ。 器内外面の一部に黒斑あり。			
4	坏	ko 12.1	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部中位は木口状工具によるヨコナデ、底部下半はナデ。	㊸㊹ 暗橙褐色	残 90% 焼 良 砂粒 ㊻ 片、石、角 ㊼
		h 4.6	口辺部はやや湾曲して内傾する。			

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
5	坏	ko 12.5	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部中位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦ 暗褐色 ㊧ 橙褐色 ㊩ 暗褐色	残 完 焼 良 片、石、砂粒 ④ 角、Fe ㊲
		h 4.7	口辺部はやや湾曲して内傾する。			
6	坏	ko 12.5	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上半は木口状工具によるヨコナデ、底部下半はナデ。	㊦㊩ 暗褐色	残 80% 焼 良 砂粒 ④ 角、Fe ㊩
		h 4.4	口唇部は内側に凹線を巡らす。 口辺部はわずかに内湾して内傾する。			
7	坏	ko 12.5	口端部は外側に肥厚する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部下位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦ 暗褐色 ㊩ 暗褐色 暗橙褐色	残 90% 焼 良 砂粒 ④ 片、雲、Fe ㊲
		h 4.2	口辺部は屈曲して立ち上がる。			

表—11 第17号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	甗	ko (13.1)	口端部は丸い。	外側は口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から下端部はヘラケズリ。 内側は口縁部から胴部上位は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナメナデのちナデ、下端部はヘラ状工具による面トリを施す。	㊦㊩ 暗橙褐色	残 20% 焼 普 片、石、砂粒 ④
		t (6.0)	口縁部は大きく外反する。			
		h 15.4	胴部上位に最大径をもつ。			
2	坏	ko (14.0)	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上半は木口状工具によるヨコナデ、底部下半は木口状工具によるナデ。	㊦㊩ 暗褐色	残 90% 焼 良 砂粒 ④ 片、石 ㊲
		h 4.7	口唇部は外側に肥厚する。			
3	坏	ko (14.3)	口端部はやや尖り気味である。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊩ 淡褐色	残 40% 焼 良 片、石、砂粒 雲 ④ 角、Fe ㊲
		h 5.1	口唇部は直立して立ち上がる。 口辺部は直線的に開く。			
4	坏	ko (15.1)	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口唇部は指頭によるヨコナデのち木口状工具によるヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口唇部は指頭によるヨコナデのちヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊩ 橙褐色	残 40% 焼 良 片、石、砂粒 雲、Fe ④ 角 ㊲
		h <4.8>	口唇部は内湾する。			

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
5	坏	ko 16.3 h 5.0	口端部は丸い。 口唇部はわずかに内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上半は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊦ 橙褐色	残 完 焼 普 片、石、砂粒 ④ 雲、Fe ②
6	坏	ko (14.9) h <3.6>	口端部は丸い。 口唇部はわずかに内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊦ 暗橙褐色	残 30% 焼 普 砂粒 ④ 片、石、Fe ② 角、雲 ㊸
7	坏	ko (13.9) h <4.6>	口端部はやや尖り気味である。 口唇部はわずかに内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上半は木口状工具によるヨコナデ、底部下半はナデ。	㊦ 暗橙褐色 ㊦ 橙褐色	残 40% 焼 普 砂粒 ④ 片、石、雲、Fe ②
8	坏	ko 13.8 h 4.2	口端部はやや尖り気味である。 口唇部はわずかに立ち上がる。 口辺部は大きく外反する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊦㊦ 淡暗橙褐色	残 95% 焼 普 砂粒 ④ 片、石、雲、Fe ②
9	坏	ko (14.0) h 5.2	口端部は丸い。 口唇部は直立気味に立ち上がり開く。	外側は口端部はヨコナデ、口唇部は指頭によるヨコナデのち木口状工具によるヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口唇部は指頭によるヨコナデのち木口状工具によるヨコナデ、口辺部から底部上半は木口状工具によるヨコナデ、底部下半はナデ。	㊦㊦ 暗橙褐色	残 40% 焼 普 砂粒 ④ 片、石、雲 ② 角、Fe ㊸
10	坏	ko (13.7) h 4.7	口端部は丸い。 口唇部は内湾する。 器形の歪みが著しい。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上半は木口状工具によるヨコナデ、底部下半はナデ	㊦㊦ 暗橙褐色	残 60% 焼 普 砂粒 ④ 片、石、雲、Fe ②

表—12 第20号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	羽 釜	ko (21.4) t — h <20.8> g (25.6)	口端部は内側に面をもち凹線状に窪む。 口縁部は内傾する。 鏝部はほぼ水平に貼り付けられている。	外内ロクロナデ調整ののち器外面胴部下位はヘラケズリ。	㊦㊦ 暗橙褐色	残 30% 焼 不良 片、石、 微砂粒 ②

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
2	坏	ko (14.1) kd 6.7 h 6.1	口端部は丸い。 底部回転系切りののち高台部を貼り付けている。 高台部は「ハ」字状に開く。	外内ロクロナデ調整。	㊦㊧ 淡灰褐色 淡黄褐色	残 40% 焼 やや不良 砂粒 ㊤ 片、石、角、Mn ㊨

表—13 第21号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	甕	ko (21.8) t — h <8.8>	口端部はやや尖る。 口唇部は外側に肥厚する。 口縁部はゆるやかに外反する。 肩部の張りは弱い。	外側は口唇部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、肩部は横位のヘラケズリ、胴部上位は縦位のヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、肩部から胴部上位は木口状工具による斜位のナデのちナデ。	㊦㊧ 暗橙褐色	残 10% 焼 良 砂粒 ㊨ Fe、片、石 雲 ㊩
2	坏	ko 12.7 t 8.2 h 4.3	口端部は丸みを帯びる。 体部はゆるやかに開く。 体部から底部のヘラケズリにノッキングの痕跡がみられる。 器内面口縁部から底部にかけて放射状に暗文を施す。	外側は口端部から口唇部は指頭によるヨコナデ、体部上位はナデ、体部下位から底部にかけてヘラケズリ。 内側は口端部は指頭によるヨコナデ、口縁部から体部にかけてヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 完 焼 良 Mn ㊨ 角、雲、Fe ㊩
3	坏	ko 13.2 h 3.2	口端部は丸い。 口唇部は内湾する。 口辺部はやや直線的に開く。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口唇部から口辺部上位は指頭によるヨコナデのち木口状工具によるヨコナデ、口辺部中位から下位は木口状工具によるヨコナデ、体部は木口状工具によるヨコナデのちナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 淡暗橙褐色	残 95% 焼 良 片、石、砂粒 ㊤ 角、雲 ㊨ Mn ㊩
4	坏	ko 13.2 h 3.8	口端部はやや尖り気味である。 口辺部は直線的に立ち上がる。 底部はやや凹底状を呈する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部はナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部から体部は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 淡褐色	残 完 焼 良 片、石、砂粒 ㊤ 角、雲 ㊨ Mn ㊩
5	坏	ko 14.0 h 3.8	口端部は丸い。 口辺部は直線的に開く。 底部器内面に「X」字状の線刻有り。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部上半はナデ、底部下半はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 暗橙褐色	残 完 焼 良 砂粒 ㊤ 片、石、角、雲 Fe ㊨

表—14 第23号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色 調	胎土・備考
1	大形壺	ko 27.2 t 11.6 h (72.7)	口端部外側は凹線を巡らしている。 口縁部は中位から大きく外反する。 胴部中位に最大径をもつ。 底部は小さく木葉痕あり。 器内面胴部中位やや上から中位にかけて器表面の剝落がみられる。 器外面胴部下位は被熱により器表面が荒れている。	外側は口端部はヨコナデのち工具により凹線を巡らす。口縁部は木口状工具によるヨコナデ、頸部は工具によるナデツケのち木口状工具によるヨコナデ、胴部上半はヘラケズリのち木口状工具によるナデ、及び一部指頭によるナデ、胴部下半はヘラケズリ。 内側は口端部は指頭によるヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナデ及び一部指頭によるナデ。	㊦㊦ 暗橙褐色	残 70% 焼 普 片、石、砂粒 ⊕ Mn、角 ㊸
2	大形壺	ko — t 8.3 h <55.7>	器形は口頸部の重量によって 圧迫され肩部がやや張り出し 気味に歪んでいる。 胴部中位に最大径をもつ。底 部は小さく、木葉痕がかすか に残る。 器内面口頸部から胴部上位 にかけて被熱による器表面の 剝落が顕著である。 器外面胴部下半は被熱によ り器表面が荒れている。	外側は口頸部はヨコナデ、胴部はヘラケズリ、底 部はナデ。 内側は胴部から底部は木口状工具によるナデのち ナデ。	㊦ 橙褐色 淡褐色 ㊦ 褐色 淡褐色	残 40% 焼 普 片、石、砂粒、 Fe、雲 ㊸ 角 ㊸
3	甕	ko 22.5 t 6.4 h 35.3	口唇部は面状を呈する。 口縁部は外反する。 胴部中位に最大径をもつ。	外側は口端部は指頭によるヨコナデのち工具によ り凹線を巡らしている。口縁部は工具によるヨコ ナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口唇部は指頭によるヨコナデ、口縁部は工 具によるヨコナデ、胴部上位は木口状工具による ナデ、中位は工具によるヨコナデ、下位は木口状 工具によるナデ。	㊦ 暗橙褐色 ㊦暗褐色	残 40% 焼 良 片、雲 ⊕ 石、Fe ㊸ Mn ㊸
4	甕	ko 17.0 t 6.5 h 33.2	口端部は外側に面をもち、凹 線を巡らしている。 胴部中位に最大径をもつ。 器外面胴部上位から中位に かけてスス付着。 器外面胴部下位は被熱によ りやや剝落している。 底部はやや凹底状を呈し、木 葉痕あり。	外側は口端部はヨコナデのち工具により凹線を巡 らしている。口縁部から頸部は木口状工具による ヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口 状工具によるヨコナデ、胴部から底部は木口状工 具によるナデのち丁寧なナデ。	㊦ 淡褐色 暗褐色 ㊦ 暗褐色	残 70% 焼 普 片、石、砂粒 ⊕ 角 ㊸
5	甕	ko 16.3 t 6.8 h 32.1	口端部は丸い。 口縁部は大きく外反する。 胴部中位に最大径をもつ。 器外面胴部中位から底部は 被熱により劣化している。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口 状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具に よるヨコナデ、胴部から底部は木口状工具による ナデのちナデ。	㊦ 橙褐色 淡橙褐色 ㊦ 淡褐色	残 90% 焼 普 片、石、Fe ⊕ 雲 ㊸

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
6	甕	ko 18.8	口唇部は丸みをもつ。	外側は口唇部は指頭によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口唇部は指頭によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナデ。	㊦ 暗橙褐色	残 80% 焼 良 片 ㊧ 石、雲、チャ ④ 角 ㊨
		t 5.2	口縁部は外反する。			
		h 32.0	胴部中位に最大径をもつ。胴部はやや歪んでいる。			
7	甕	ko 17.7	口唇部はやや面状をなす。	外側は口唇部は指頭によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ、体部はヘラケズリ。 内側は口縁部は工具によるナデ、胴部は木口状工具によるナデのち一部指頭によるナデ。	㊦㊩ 暗橙褐色	残 70% 焼 良 片 ㊧ 石 ㊱ 雲、チャ ④ Mn ㊨
		t 5.3	口縁部は大きく外反する。			
		h 33.8	胴部中位に最大径をもつ。胴部中位から下位にかけて剥落している。			
8	甕	ko 13.6	口端部は丸みをもつ。	外側は口端部は指頭によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口縁部は工具によるヨコナデ、胴部は工具によるケズリ。	㊦㊩ 暗橙褐色	残 90% 焼 良 片、雲 ㊱ 石、Mn ④ Fe、チャ ㊨
		t 8.2	口縁部は直線的に開く。			
		h 27.1	胴部中位に最大径をもつ。			
9	甕	ko 17.6	口端部は外側に面をもつ。	外側は口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナデのち丁寧なナデ。	㊦ 暗褐色	残 70% 焼 良 片、石、砂粒 ㊱ ㊩ Mn、角 ④
		t —	口縁部は大きく外反する。			
		h <26.7>	胴部中位に最大径をもつ。器外面胴部下位は被熱により器表面が荒れている。			
10	甕	ko 17.3	口端部外側は面状をなし、下方に肥厚する。	外側は口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具による横位ナデのちナデ。	㊦ 橙褐色	残 40% 焼 普 砂粒 ㊱ 片、石、Fe、Mn ④ 暗褐色
		t —	口縁部は大きく外反する。			
		h <19.6>	胴部中位やや下に最大径をもつ。			
11	甕	ko 19.2	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊦ 暗橙褐色	残 40% 焼 良 砂粒、Mn ㊱ 片、石、Fe ④ 暗橙褐色
		t —	口唇部はわずかに内湾する。			
		h <27.0>	胴部中位はやや下に最大径をもつ。			
12	甕	ko (17.4)	口端部は丸い。	外側は口唇部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊦ 淡橙褐色	残 40% 焼 良 片、石、砂粒 ㊱ ④ 暗褐色
		t —	口唇部は大きく外反する。			
		h <26.6>	胴部中位はやや下に最大径をもつ。			
13	甕	ko 16.6	口縁部は丸い。	外側は口端部は指頭によるヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はヘラケズリ。 内側は口端部は指頭によるヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部は工具によるナデ。	㊦㊩ 橙褐色	残 80% 焼 良 片、石、チャ ④ 雲 ㊨
		t 5.8	口縁部はゆるやかに外反する。			
		h 19.3	胴部下位に最大径をもつ。胴部外面に黒斑あり。			

番号	分類	大きさ (cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
14	甃	ko 16.8 t 7.1 h 15.3	器形の歪みが著しい。 口端部はやや尖り気味である。 口唇部はわずかに内湾する。 肩部がやや張る。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部は木口状工具によるヨコナデのちナデ。	㊦㊦ 暗橙褐色 褐色	残 80% 焼 良 片、石、砂粒 チャ ㊦
15	甃	ko 14.2 t 6.2 h 13.4	口唇部は丸みをもつ。 口縁部は外反する。 胴部上位に最大径をもつ。	外側は口唇部は指頭によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口唇部から口縁部は指頭によるヨコナデ、胴部上位は工具によるヨコナデ、胴部中位は工具によるヨコナデのちナデ、胴部下位はヘラケズリのちナデ。	㊦ 暗橙褐色 ㊦ 橙褐色	残 70% 焼 良 片 ㊦ 石、雲 ㊦ Fe、Mn ㊦ 角 ㊦
16	壺	ko 16.8 t 6.0 h 25.5	口唇部は面状をなす。 口縁部はゆるやかに外反する。 胴部中位に最大径をもつ。	外側は口唇部は指頭によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口縁部は工具によるヨコナデ、胴部は工具によるケズリのちナデ、底部は工具によるケズリのちナデのち荒いミガキ。	㊦㊦ 暗褐色	残 60% 焼 良 片、雲 ㊦ 石、Mn ㊦
17	壺	ko 17.2 t — h <17.1>	口唇部は丸みをもつ。 口縁部はゆるやかに外反する。 胴部中位に最大径をもつ。	外側は口唇部は指頭によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口縁部は工具によるナデ、胴部は木口状工具によるナデ。	㊦㊦ 暗橙褐色	残 40% 焼 良 片、雲 ㊦ Mn ㊦ 石 ㊦
18	甃	ko 17.5 t — h 16.5	口端部は丸い。 口唇部はわずかに内湾する。 胴部中位に最大径をもつ。	外側は口唇部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊦㊦ 暗橙褐色	残 80% 焼 普 片、石、砂粒 角、雲、Fe ㊦
19	甃	ko 15.9 t 6.5 h 15.2	口端部は丸い。 口縁部は大きく外反する。 胴部下位に最大径をもつ。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部は木口状工具によるナデのち丁寧なナデ。	㊦㊦ 橙褐色 淡褐色	残 90% 焼 普 片、石、砂粒 雲、Fe ㊦
20	甃	ko (13.9) t (6.0) h (13.0)	口端部はやや尖っている。 口縁部はゆるやかに外反する。 胴部に輪積み痕を残す。 胴部側面に黒斑あり。	外側は口端部は指頭によるヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口端部は指頭によるヨコナデ、口縁部は工具によるヨコナデ、胴部から底部は工具によるナデ。	㊦㊦ 淡橙褐色	残 60% 焼 普 片、Fe、Mn ㊦ 角、雲 ㊦
21	台付甃	ko 12.5 t 10.6 h 15.5	口端部は製作時あるいは乾燥時に逆位に置いていたと思われ面状をなす。 口縁部はゆるやかに外反し最大径を胴部中位にもつ。 台部はゆるやかに開き下端部は丸みをもつ。	外側は口縁部は工具によるヨコナデ、胴部はヘラケズリのちナデ、台部上位は指頭によるヨコナデ、下位は工具によるヨコナデ。 内側は口縁部は工具によるヨコナデ、胴部上位はヘラケズリのちナデ、中位以下は剝落により不明、台部上位はヘラナデのちナデ、中位から下位は工具によるヨコナデ。	㊦㊦ 暗橙褐色	残 90% 焼 良 片 ㊦ Fe ㊦ 角、石、雲 ㊦

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
22	甌	ko 24.1	口唇部は丸みをもつ。	外側は口唇部が指頭によるヨコナデ、口縁部上位は工具によるヨコナデ、下位はヘラケズリのち工具によるヨコナデ、体部はヘラケズリ。 内側は口縁部は工具によるヨコナデ、体部はヘラミガキ。	㊦ 暗橙褐色 黒褐色 ㊧ 暗橙褐色	残 70% 焼 良 Mn ㊨ 片、石 ㊩ 雲、チャ ㊪
		t 9.4	口縁部は外反する。			
		h 30.0	体部上位から中位は直線的で、体部下位はゆるやかな弧を描き下端部へと移行する。			
23	甌	ko (24.1)	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、体部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、体部は木口状工具によるナデのち丁寧なナデ、下端部はヨコナデ。	㊦ 暗褐色 淡褐色 ㊧ 暗橙褐色	残 80% 焼 良 片、石、砂粒 ㊩ 雲、Fe ㊪
		t 9.6	口唇部はわずかに内湾する。			
		h (30.1)	口縁部はゆるやかに外反する。			
24	甌	ko 23.6	器形の歪みが著しい。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、体部はヘラケズリのち上位はヘラナデ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、体部はヘラケズリのち上位はヘラナデ。	㊦㊧ 暗橙褐色	残 90% 焼 良 片、石、砂粒 ㊩ 角、Fe、Mn ㊪
		t 9.3	口端部は丸い。			
		h 24.6	口縁部上位は工具のあたりにより段状をなす。			
25	甌	ko 20.8	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、体部はヘラケズリ、下端部はヘラケズリのち指頭によるナデ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、体部は木口状工具によるナメナデのち軽いナデ、下端部はヘラケズリのち指頭によるヨコナデ。	㊦㊧ 明褐色	残 70% 焼 良 白粒、雲 ㊩ 片、Fe ㊪
		t 3.3	口縁部は大きく外反する。			
		h 18.4	胴部上位がわずかに張る。			
26	甌	ko 15.5	口唇部は丸みをもつ。	外側は口唇部から口縁部は工具によるヨコナデ、体部はヘラケズリ。 内側は口唇部から口縁上半部は工具によるヨコナデ、口縁下半部は工具によるナデのちヨコナデ、体部上半部は工具によるナデ、体部下半部はヘラケズリ。	㊦ 淡褐色 ㊧ 暗褐色	残 80% 焼 良 片 ㊨ 石、雲、チャ ㊩
		t 9.1	口縁部は外反する。			
		h 12.8	体部上半は直線的で、体部下半は丸みをもち下端部へと移行する。			
27	坏	ko 13.5	口端部は丸い。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上端は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 60% 焼 良 片、白粒、角 Fe ㊩
		h 5.0	口唇部器内外面に凹線が巡る。 口唇部はわずかに内湾する。			
28	坏	ko 14.2	口唇部はとがる。	外側は口唇部は指頭によるヨコナデ、口辺部は工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口唇部は指頭によるヨコナデ、口辺部から底部上位は工具によるヨコナデ、底部は工具によるナデのちナデ。	㊦ 淡橙褐色 ㊧ 淡褐色	残 40% 焼 普 片 ㊩ 雲 ㊪ 石、Fe ㊫
		h 4.1	口辺部はやや外反気味に立ち上がる。			
29	坏	ko 13.8	口端部は丸く、わずかに内側に肥厚する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 95% 焼 良 片、石、雲、白粒 ㊩
		h 4.3	口辺部は直線的に外反する。			

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
30	坏	ko 15.4 h 4.2	口端部はやや尖り気味である。 口辺部は直線的に外反する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 95% 焼 良 片、白粒 ㊤ 雲、砂粒 ㊦ Fe、Mn ㊨
31	坏	ko 13.8 h 4.4	器形の歪みが著しい。 口端部は丸い。 口辺部はわずかに内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 95% 焼 普 雲、白粒 ㊤ 片、石、Fe ㊦ 角 ㊨
32	坏	ko 14.4 h 4.8	器形の歪みが著しい。 口端部は丸い。 口辺部はわずかに内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、体部中位は木口状工具によるヨコナデのちヨコナデ、底部下位は木口状工具によるナデのちナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 完 焼 良 片、雲、白粒 Fe ㊦
33	坏	ko (14.9) h 5.4	口端部は丸い。 口唇部はわずかに外反する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 淡褐色	残 40% 焼 良 片、石、雲 ㊤
34	坏	ko 13.9 h 4.7	口端部は丸い。 口唇部は大きく外反する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部中位から底部はナデ。	㊦㊧ 淡褐色	残 40% 焼 良 砂粒、白粒 ㊦ 片、角、Mn ㊨
35	坏	ko 14.5 h 4.2	口端部は丸い。 口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。 底部はゆるやかに立ち上がる。	外側は口縁部は工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口縁部は工具によるヨコナデ、底部は工具によるナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 90% 焼 良 雲 ㊦ 片、Fe ㊤ 白粒、Mn ㊦
36	坏	ko 14.1 h 4.1	口端部はわずかに尖る。 口唇部はやや内湾する。 器内面の剥落顕著。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊦㊧ 淡褐色	残 70% 焼 普 砂粒、白粒 ㊤ 片、石、Fe ㊦
37	坏	ko 14.3 h 4.5	口端部は丸い。 口唇部は内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口唇部はヨコナデ、口辺部下位から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊦㊧ 淡橙褐色	残 90% 焼 普 片、石、砂粒 白粒 ㊤ Fe、Mn ㊦

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
38	坏	ko 12.6 h 4.8	口端部はやや尖る。 口唇部はわずかに内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部上位はナデ、底部中位から底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部下位から底部はナデ。	㊦㊧ 橙褐色	残 60% 焼 良 白粒、雲 ㊨ 片、石、Fe ㊩
39	坏	ko 13.4 h 4.3	口端部は尖り気味である。 口辺部は内傾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上半はヘラケズリ、底部下半はナデ。	㊦㊧ 暗褐色 褐色	残 90% 焼 良 白粒、砂粒 ㊨ 片、石、Fe、Mn ㊩ ㊪
40	坏	ko 15.2 h 4.0	口端部は丸い。 口唇部器内面には凹線が巡る。 口辺部上位にわずかに段を有する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリのちヘラナデに近いミガキ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上半は木口状工具によるヨコナデ、底部下半はナデ。	㊦㊧ 暗褐色 淡褐色	残 30% 焼 普 片、白粒、Fe ㊨ 角 ㊩ ㊪
41	坏	ko 15.9 h 5.4	非常に丁寧なつくり。 口端部はやや尖り気味である。 口縁部は内側に屈曲してから外反する。 器外面口端部から体部及び器内面に赤彩が施されている。	外側は口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリのちミガキに近い丁寧なナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部から体部はヨコナデ、底部はナデ。	㊦ 明褐色	残 95% 焼 良 チャ ㊨ 片、Fe ㊩ ㊪
42	鉢	ko 10.6 h 10.1	口端部は丸い。 口縁部はゆるやかに外反する。 頸部はゆるやかにくびれ、肩部はなだらかで張らない。 胴部最大径は口縁部とあまり差がなく、寸胴で下3分の1から急に丸みを帯びる。	外側は口縁部から頸部・肩部にかけてヨコナデ、体部はヘラケズリ。 内側は口縁部から体部上位はヨコナデ、体部はヘラケズリ。	㊦ 淡褐色 ㊧ 橙褐色	残 90% 焼 良 片 ㊨ 石 ㊩ 角、雲 ㊪
43	鉢	ko 9.6 h 6.8	器形の歪みが著しい。 器内面下位にはヘラケズリ時に削りすぎ、それを補修したものと思われる粘土付着がみられ、その一部は指頭で強く押しすぎヒビが入ったまま焼成したと思われるものが観察される。 器外面底部に同心円状の黒斑あり。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部はヘラケズリ、一部補修のためのナデ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部は木口状工具によるヨコナデ、体部から底部は木口状工具によるナデのちナデ、一部補修のためのナデ。	㊦ 淡褐色 橙褐色 ㊧ 橙褐色	残 完 焼 良 白粒、雲 ㊨ 片、石 ㊩ ㊪

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
44	埴	t 2.8 h <5.3>	胴部中位において強く張る。 凹底を呈する。	外側は頸部はヨコナデ、胴部上位から中位は斜め方向にヘラケズリのちナデ。 内側は頸部はヨコナデ、胴部から底部は指頭によるナデ。	㊸㊹ 橙褐色	残 50% 焼 良 Mn ㊸ 石、角、雲、Fe ㊹

表—15 第24号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	坏	ko (17.0) h 3.8	口端部はやや尖り気味である。 口辺部は大きく外反する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上半は木口状工具によるヨコナデのちヨコナデか、底部下半はナデ。	㊸㊹ 淡暗橙褐色	残 40% 焼 普 砂粒 ㊸ 片、石 ㊹ 角、Fe ㊹
2	坏	ko (12.2) h 3.4	口端部は外側に肥厚する。 器形はやや歪む。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部上半はナデ、底部下半はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部は工具によるヨコナデ、底部下位はナデ。	㊸㊹ 暗橙褐色	残 50% 焼 普 片、石、砂粒 ㊸ 角、Mn ㊹
3	須恵器 坏	ko 11.7 t 8.1 h 3.7	口端部は丸い。 口縁部は上位でやや内傾する。 口唇部器内面は凹線状に窪む。	外内ロクロナデのち口縁部は定位でのヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ。	㊸㊹ 灰白色	残 90% 焼 良 砂粒 ㊹ Mn ㊹
4	甕	ko 22.5 t — h <11.3>	口端部は外側に肥厚する。 口唇部器内面は凹線状に窪む。 口縁部は直線的に外反する。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部は木口状工具によるヨコナデ、頸部はヨコナデ、胴部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部は木口状工具による横位のナデ。	㊸㊹ 暗橙褐色	残 30% 焼 良 砂粒 ㊸ 片、石 ㊹ 角、Mn ㊹

表—16 第25号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	甕	ko 20.3 t 5.9 h 37.2	口端部は丸い。 口縁部は大きく外反する。 胴部中位に最大径をもつ。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、肩部はナデ、胴部はヘラケズリ、底部はナデ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊸ 橙褐色 暗褐色 ㊹ 橙褐色 淡褐色	残 完 焼 良 片、石、雲 Fe ㊸ 角 ㊹

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
2	壺	ko 20.1 t 9.7 h 33.5	口端部は丸い。 口唇部は外側に肥厚する。 胴部中位やや上に最大径をもつ。 器外面胴部下位にスス付着。	外側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口縁部から頸部は木口状工具によるヨコナデ、胴部から底部は木口状工具によるナデのちナデ。	㊸ 橙褐色 暗橙褐色 ㊹ 橙褐色 淡褐色	残 70% 焼 良 片、石、砂粒 ⊕ 角、Fe、Mn Ⓣ

表—17 第26号住居址出土遺物観察表

番号	分類	大きさ(cm)	器形及び形成手法の特徴	調整手法の特徴	色調	胎土・備考
1	坏	ko 11.7 h 4.7	口端部はやや尖り気味である。 口唇部はわずかに内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊸㊹ 淡橙褐色	残 90% 焼 普 片、石、Fe ⊕ 角、雲 ⊗
2	坏	ko 12.3 h 4.4	口端部はやや尖り気味である。 口唇部はわずかに内湾する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部上位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊸㊹ 明橙褐色	残 完 焼 普 片、石、Fe ⊕
3	坏	ko (14.6) h <3.4	口端部は尖り気味である。 口辺部中位やや上に段を有する。	外側は口端部はヨコナデ、口辺部は木口状工具によるヨコナデ、底部はヘラケズリのち丁寧なナデ。 内側は口端部はヨコナデ、口辺部から底部中位は木口状工具によるヨコナデ、底部はナデ。	㊸㊹ 暗橙褐色	残 40% 焼 良 片、石、砂粒 ⊕ 雲、Fe、Mn Ⓣ

凡 例

1. 観察表における番号は各遺物図版中の番号・写真図版中の番号に対応している。
2. 表中における大きさの略号は、ko は口径、t は底径、h は器高、g は鏝部径、kd は高台部径を表わしている。また、() は推定値、< > は残存値を示している。
3. 色調欄における㊸は器外面を、㊹は器内面を表わしている。
4. 胎土・備考欄の鉱物等の略号は以下のとおりであり、その含有量については多量、中量、少量、微量をそれぞれⓉ、⊕、Ⓣ、⊗で表わしている。片：片岩粒 石：石英粒 チャ：チャート 白粒：白色粒子 黒粒：黒色粒子 角：角閃石 雲：雲母粒 Fe：鉄斑粒 Mn：マンガン粒 白針：白色針状物質
5. 遺物実測図の縮尺はそれぞれ図に示してあるが原則として土器は1/4、その他は2/3である。

第Ⅳ章 まとめ—第23号住居址検出の大型壺形土器について—

はじめに

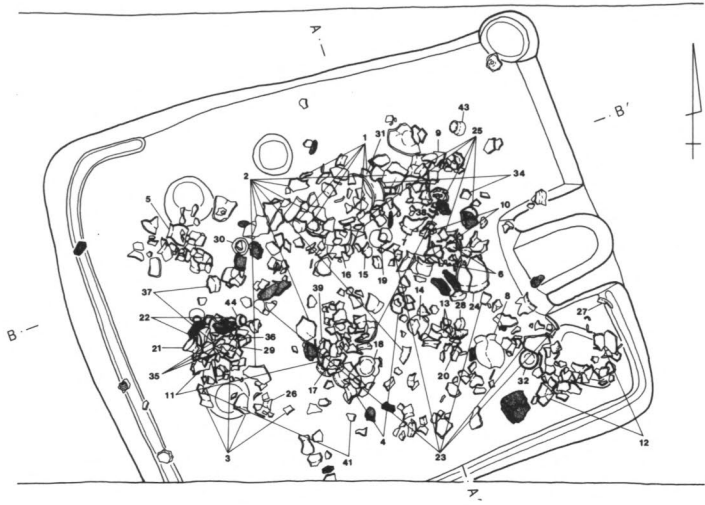
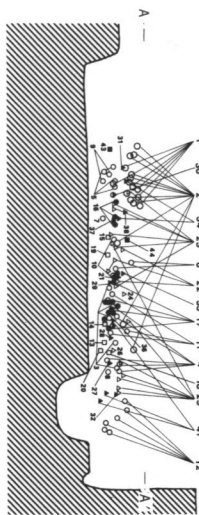
金佐奈遺跡 A1 地点は古墳時代後期から平安時代にかけての集落址であるが本報告の調査では調査区の制約上その一部の地域が発掘されたに過ぎず、また同一集落と思われる近接の金佐奈遺跡 A1 地点及びB地点も現在整理中であり集落址の全容・時間的経過、そして歴史的位置づけをおこなうには困難な状況にある。今回は古墳時代後期の住居址であり、かつ多量の遺物が検出された第23号住居址について概観し、「まとめ」としたい。

1. 出土遺物及び遺物の検出状況

第23号住居址から検出された遺物は大型壺形土器^(註1)、中・小型壺形土器、長胴型甕形土器、大型甕形土器、小型甕形土器、小型甕形土器^(註2)、坏形土器、台付甕形土器、鉢形土器、埴形土器(第62～69図)、礫石等があげられる。図化できた遺物は44個体でありこのうち完形またはほぼ完形のものは4個体で、残存率が90%以上のものは10個体であり、器種別にみると坏の遺存の良い傾向がうかがえる。正確な各器種の個体数の把握はなしえなかったが図示できなかった破片資料を含めると100個体を上回るものであろう。ここで特筆すべきは推定器高72.7cmと口頸部を欠損するが残存器高55.7cmを測る2個体の大型壺形土器が検出されたことと、高坏が極端に少ないことである。さらに祭祀行為にかかわるような特殊な遺物は検出されておらず当遺構の性格を現す事象としてあげることができる。

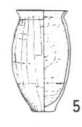
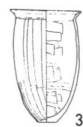
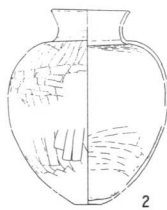
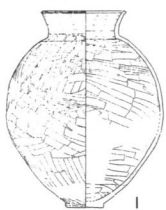
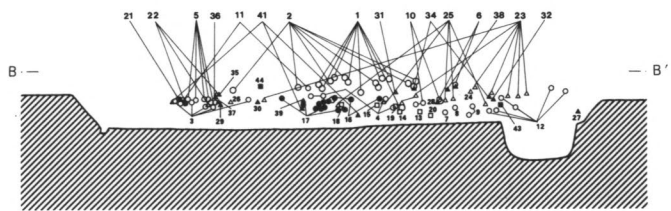
当遺構の遺物検出状況は平面的には住居址中央部に偏在し、大半は破損した状態で検出されている。垂直分布を見てみるとそのほとんどが住居址床面よりやや浮いたかたちで検出されている(第70図)。住居址覆土の1～3層はレンズ状堆積を呈しており、埋没過程は自然堆積であったものと思われる(第36図)またセクションが住居址南西コーナー付近で観察されていることから遺物のレベルはエレベーションラインの交差する住居中央部付近では第2層上位に相当するものとみてよいものである。

これらのことから当遺構は田中広明氏(1989)によって指摘がなされているような土器集積のための保管場所や山川守男氏(1995・1996)や徳山寿樹氏(1996)によるような屋内における葬送儀礼が行なわれた住居址である可能性は低く、やや時期は古いが深谷市八日市遺跡第3号住居址例(中山、1995)のような住居廃絶後二次的に遺物が廃棄された場所であり、その開始は住居址覆土の埋没状況より比較的短時間のうちに始まったものと考えることが出来よう。



凡例

- 大形甕
- 長胴甕
- 壺
- △ 甌
- 甕
- 鉢・埴
- ▲ 坏
- 礫石



3

4

5

6

7



8

9

10

11

12



16

17

18

19

20



22

23

24

25

26



27

28

29

30

31

32

34



35

36

37

38

39

41



13

14

15

21

43

44

2. 古墳時代後期における大型壺形土器

古墳時代後期における土器組成はおもに壺形土器、甕形土器、坏形土器、高坏形土器、鉢形土器、埴形土器等があげられ、第23号住居址のものは廃棄されたものではあるが、器高70cmをこえる大型の壺形土器が住居址内より検出されることはあまり例をみない。北武蔵における大型壺形土器の検出例は管見に触れたかぎりでは破片資料も含め、上里町臺遺跡（中村他、1980）第22号住居址、第26号住居址、岡部町砂田前遺跡（岩瀬、1991）第54号住居址、第67号住居址、深谷市上敷免遺跡（澤出、1985）A1号住居址、同上敷免遺跡（瀧瀬・山本、1993）第75号住居址^(註3)、第232号住居址があげられる。住居址以外の例は深谷市城北遺跡（山川他、1995）第1、3、5号祭祀跡があげられる。第5号祭祀跡は第23号住居址とほぼ同時期のもので、器高77.1cmと61.3cmを測る2個体の大型壺形土器が多数の土器とともに河川址に投棄されたかたちで検出され興味深い事象である。鬼高期前半の集落内での祭祀から河畔帯での祭祀という祭祀形態の変遷もさることながら集落の終焉まで放置されていたことくらべ恣意的である。

ともあれ古墳時代後期社会において大型壺形土器の検出例が極めて少ないと言うことはどのような意味づけがなされるであろうか。その製作意図、換言すれば使用目的は内容物の問題はあがるが日常の貯蔵の為か、祭祀行為の為だけによるものか、または一定期間の使用の後祭祀行為に供されるもの^(註4)かという問題は残るものの、大型壺形土器はその稀少性から古墳時代後期集落のすべての住居址に保有されるものではなくその分配ないし管理に首長層の関与があったことは容易に想像できるであろう。

児玉郡地域、とりわけ児玉町を中心としたの古代における開発の諸段階についてはすでに述べられているが、第23号住居址の遺物の廃棄された時期である鬼高式後半期はそれまでの低地における灌漑施設をとまなう開発が終焉をむかえ、丘陵部にその開墾の舞台が展開する時期であり、また墳丘規模などからも身分秩序の多様化の進行が指摘され、その前提として在地首長層を中心に進められた灌漑システムの充実による経済的安定に伴う首長層の指導的求心力の低下と宗教的権威の後退からなる社会的分解をあげている（鈴木、1996）。

このような社会的状況の中で大型壺形土器が経緯はともあれ最終的に祭祀行為に供される前提にたつならばその廃棄は首長層の宗教的権威の低下を表わす事象の一つとして捉えることができよう。また今のところ住居規模に著しい差の少ない該地域において、今後大型壺形土器を伴う住居址が検出されるならば集落内における社会構造の解明につながるのではなかろうか。（大熊季広）

- 註1 通常住居址から検出される壺形土器の器高は正確な統計をとってその偏差を明らかにした訳ではないが、大きくても概ね40～50cmの範囲におさまるものである。本稿ではこれを越えるものを「大型壺形土器」と呼称する。
- 註2 ここでは球胴を呈するものと通常の長胴甕の製作技法に沿い、器形の途中で口縁部にまとめているものごとを包括している。これらについては再整理を図り別の機会に触れたいと思う。
- 註3 報告では「甕形土器」となっているが、煮沸形態の器種としてカマド構造に適応する形で長胴化した長胴甕は安定して存在し、貯蔵形態との機能分化は明白であろう。土師器生産の製作、焼成技術の系譜は弥生土器にもとめられるものであり、煮沸形態のものを「甕形土器」、貯蔵形態のものを「壺形土器」と呼称する機能論的立場からここでは壺形土器として扱った。
- 註4 例えば城北遺跡第5号祭祀跡より検出された2個体の大型壺形土器には樹脂による補修がなされている。これが日常の使用にともなう破損の補修か、焼成時の破損を補修したものかは明らかでない。また焼成前に穿孔された土器が和泉期に比べ極端に少ない現象と併せ祭祀に供せられた土器群の使用痕の観察によってある程度解明される可能性が考えられる。今後の課題としたい。

参考・引用文献

富田和夫・赤熊浩一

- (1985)『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第150集
- 澤出晃越 (1985)『上敷免遺跡(2次) 上敷免北遺跡』深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
第11集
- 田中広明 (1989)『上毛野・北武蔵の古墳時代後期の土器生産—土器生産の転換と在地首長
制—』東国土器研究 第2号 東国土器研究会
- 岩瀬譲 (1991)『樋詰・砂田前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第102集
- 岩瀬譲 (1995)『前・居立』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第151集
- 山川守男他 (1995)『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第150集
- 中山浩彦 (1995)『宮ヶ谷戸—根岸—八日市—城西』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告
書 第172集
- 山川守男 (1996)「人骨を伴う古墳時代後期の住居埼玉県深谷市城北遺跡—」『すまいの考
古学—住居の廃絶をめぐる—』山梨県考古学協会1996年度研究集会 資
料集
- 鈴木徳雄 (1995)『堀向・藤塚A・柿島・内手B・C・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査
報告 第18集
- 鈴木徳雄 (1996)『東鹿沼・藤塚B1・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告 第21集
- 徳山寿樹 (1996)『藤塚遺跡—B2 地点の調査—』児玉町文化財調査報告 第22集
- 児玉町教育委員会 児玉町史編さん委員会 (1993)『児玉町史 自然編』

圖 版



1. 全 景 (東より)



2. 第 I・II区 (南東より)

図版 2



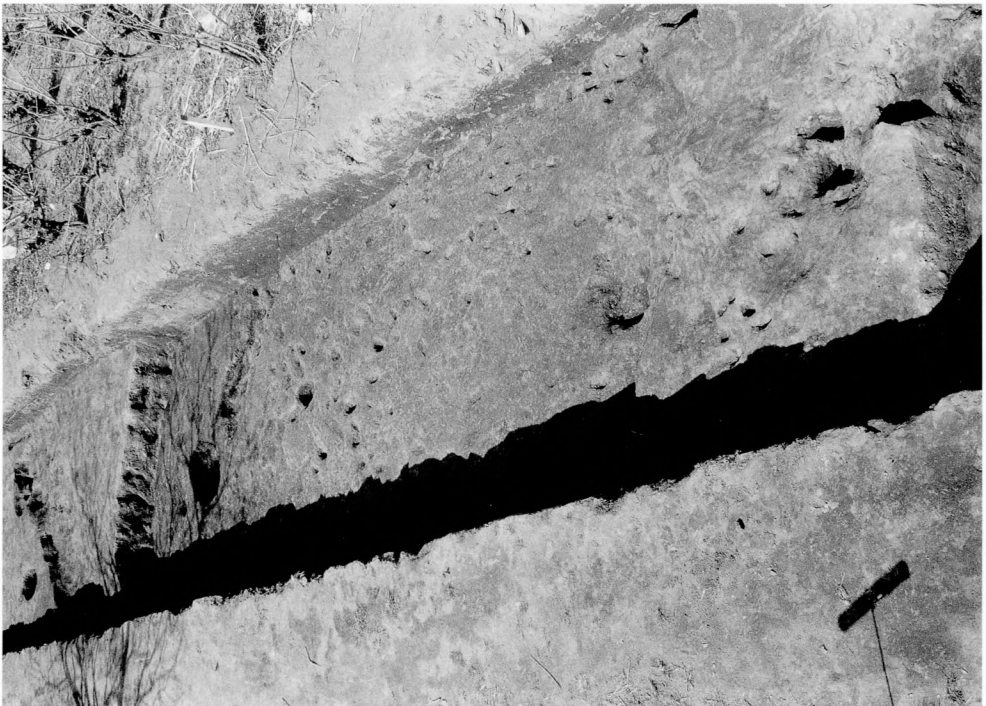
1. 第Ⅲ区 (西より)



2. 第Ⅳ区 (西より)



1. 第1号住居址（北西より）

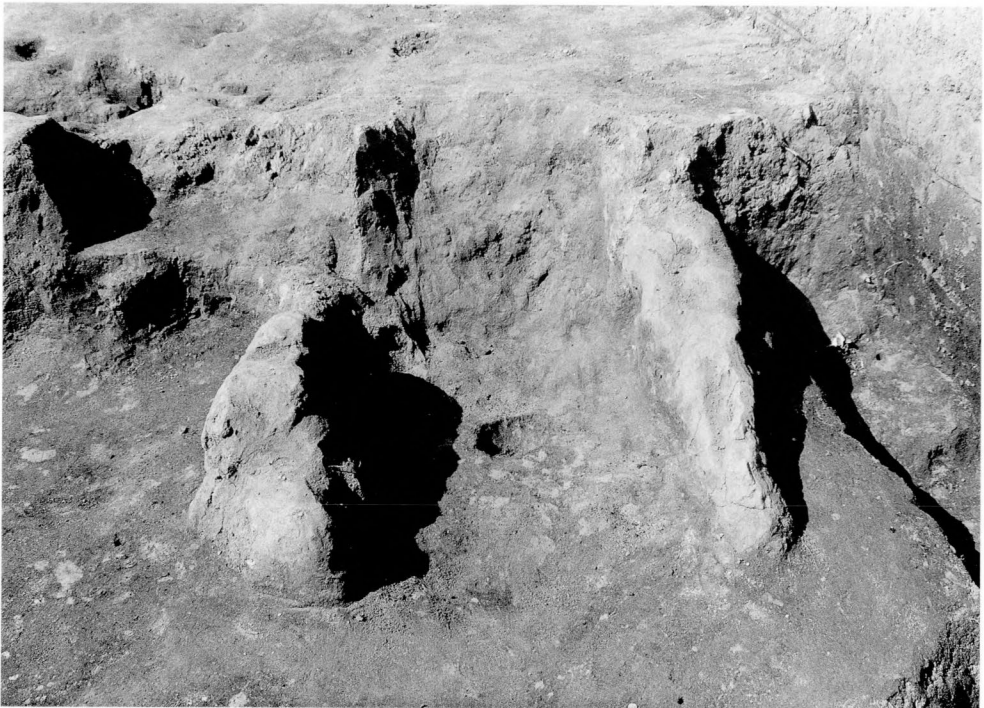


2. 第2・3号住居址（南より）

図版 4



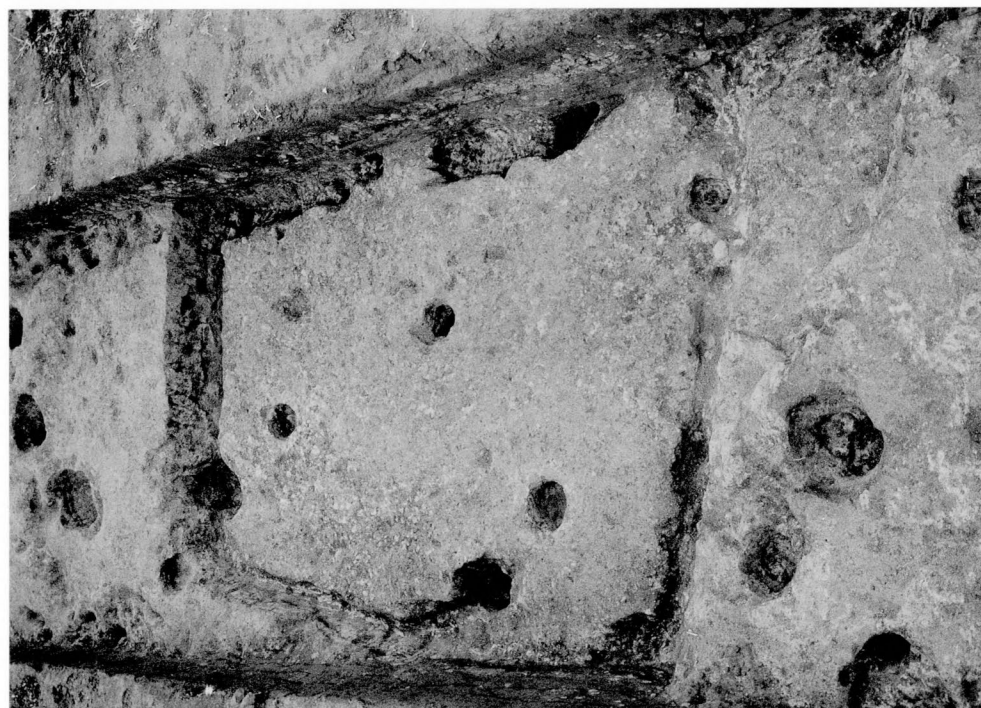
1. 第4・5号住居址（北東より）



2. 第4a号住居址カマド（南より）



1. 第7号住居址 (西より)



2. 第7b号住居址 (南より)



1. 第8号住居址（南西より）



2. 調査風景



1. 第9号住居址（北西より）



2. 第9号住居址カマド（西より）



1. 第10号住居址（北東より）



2. 調査風景



1. 第11・13号住居址（西より）



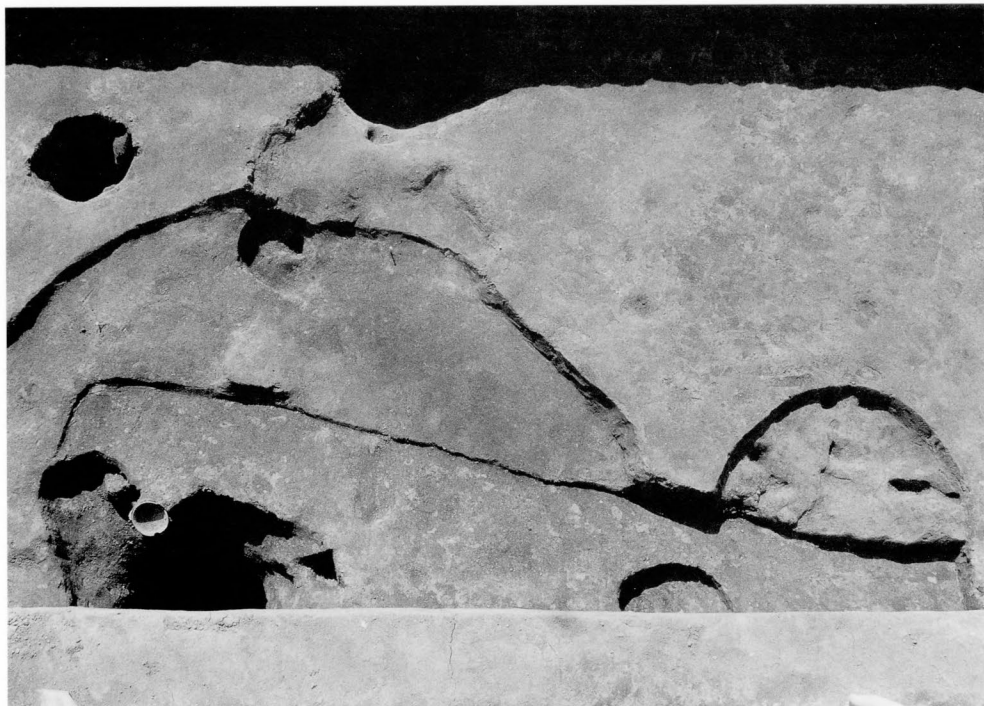
2. 第13号住居址（東より）



1. 第14・15号住居址（西より）



2. 第15号住居址（北より）



1. 第17号住居址（北より）



2. 第18・19号住居址（北より）



1. 第20号住居址（北より）



2. 第20号住居址カマド（西より）



1. 第21号住居址（南西より）



2. 第21号住居址カマド（西より）



1. 第23号住居址（南西より）



2. 第23号住居址遺物出土状態（北より）



1. 第23号住居址遺物出土状態



2. 遺物取り上げ風景



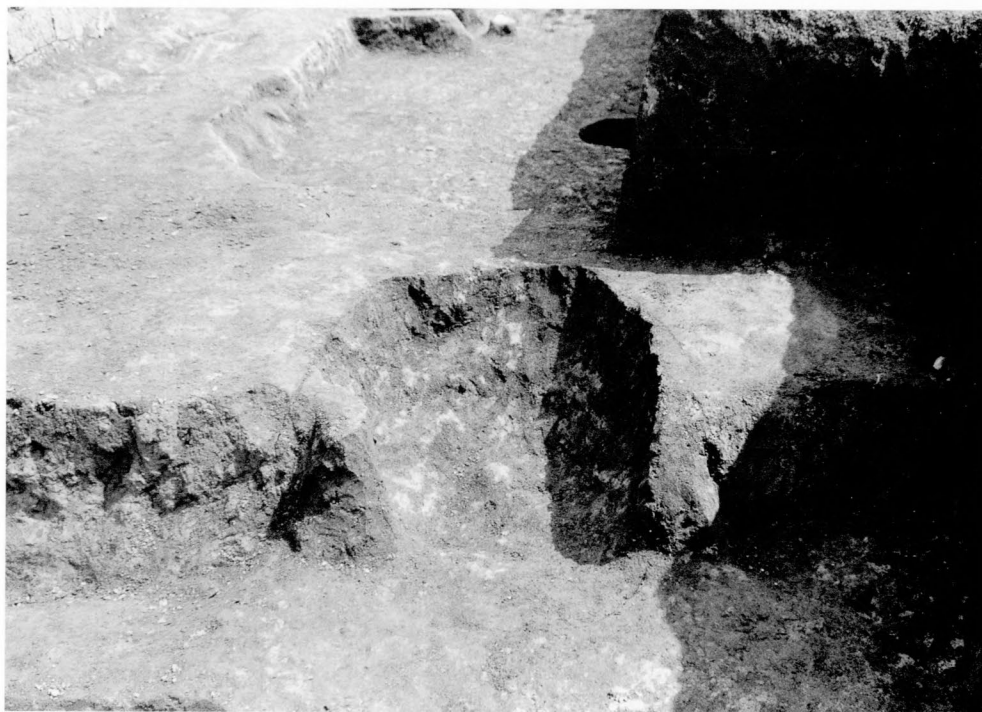
1. 第23号住居址カマド（南西より）



2. 調査風景



1. 第24号住居址（南西より）



2. 第24号住居址カマド（南西より）



1. 第25・26号住居址（南東より）



2. 第26号住居址カマド（南より）



1. 第3号溝 (南西より)



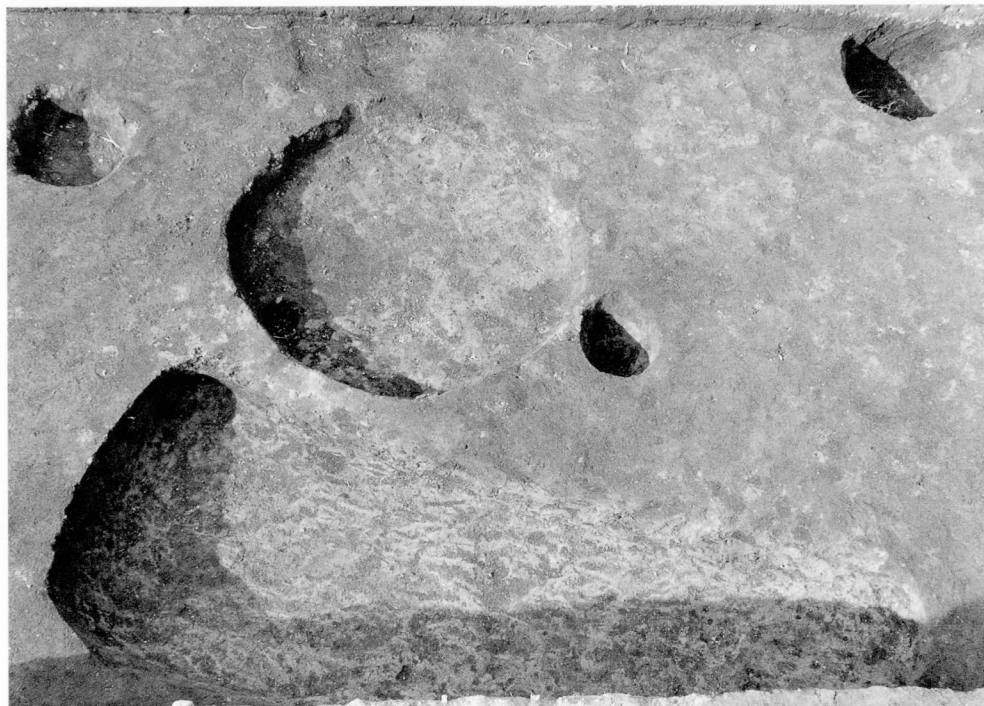
2. 第2号溝 (南西より)



1. 第4号溝 (北東より)



2. 調査風景



1. 第2・3号土壙（南より）



2. 調査風景

图版22



第1・2・3・4・9号住居址出土遺物



第8・9・13・14号住居址出土遺物

図版24



第14・15号住居址出土遺物

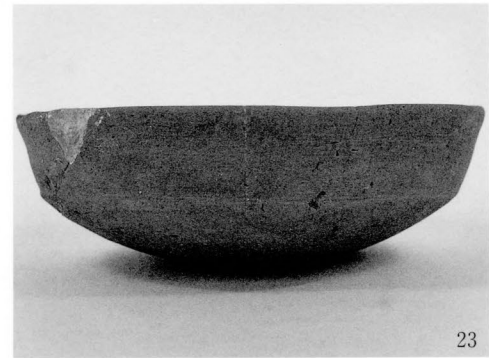
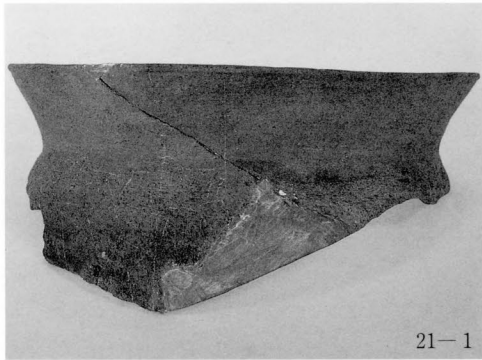


第15・17号住居址出土遺物

图版26



第17・20号住居址出土遺物



第20・21・23号住居址出土遺物

图版28



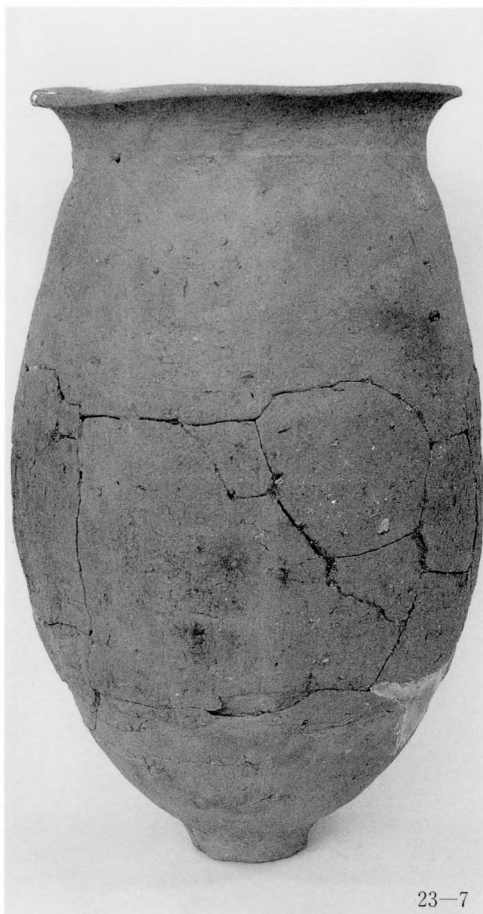
第23号住居址出土遺物(1)



第23号住居址出土遺物(2)



第23号住居址出土遺物(3)



第23号住居址出土遺物(4)

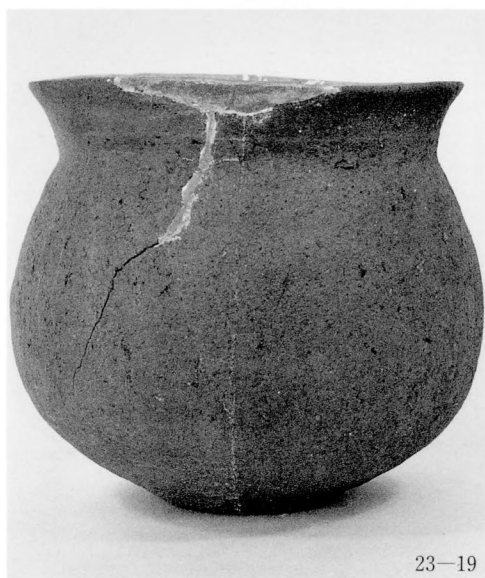


第23号住居址出土遺物(5)

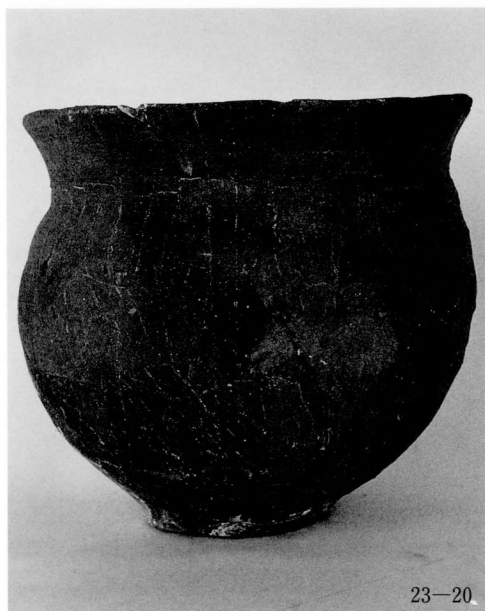


第23号住居址出土遺物(6)

图版34



第23号住居址出土遺物(7)

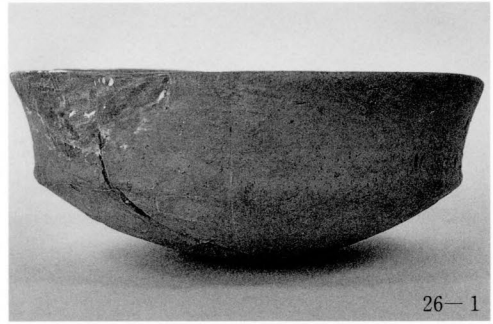
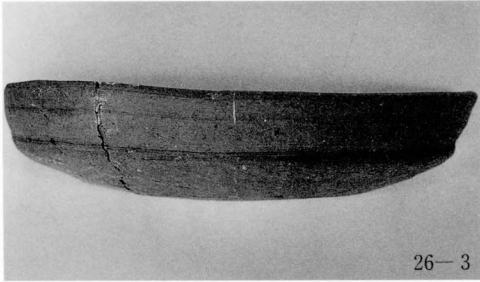


第23号住居址出土遺物(8)

图版36



第23・24号住居址出土遺物



第25・26号住居址出土遺物

報告書抄録

フリガナ	カナサナイセキ A1 チテン							
書名	金佐奈遺跡 A1 地点							
副書名	町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書	巻次	19					
シリーズ	児玉町文化財調査報告書	巻次	第 24 集					
編集者	徳山 寿樹							
編集機関	児玉町教育委員会							
所在地	〒367-02 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368番地 TEL 0495 (72) 1331							
発行日	1997 (平成 9) 年 3 月 21 日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡					
カナサナイセキ 金佐奈遺跡 A1チテン (A1地点)	コダマダチコダママチ 児玉郡児玉町 オオアザカミマシモアザ 大字上真下字 カナサナイ 金佐奈他	113824	298	36°12'4"	139°7'57"	19901001 } 19910320	300	県営かん 排事業 (九郷地区)
所収遺跡	種別	主な年代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
金佐奈遺跡 (A1地点)	集落	古墳後期	竪穴住居14		土器			
		奈良	竪穴住居		土器		24号住で 小鍛冶址 を確認	
		平安	竪穴住居 4		土器			
			竪穴住居 5・土壇・溝				詳細な時期 不明	

児玉町文化財調査報告書第24集

金 佐 奈 遺 跡

— A1 地点の調査 —

町内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書

平成9年3月21日印刷

平成9年3月21日発行

発行者 児玉町教育委員会
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67

